

創 り た い
未 来 社 会
あ な た の
夢 と
こ だ わ り

世界に
向けて未来を
提案しよう！

NRI 学生小論文コンテスト2014

創 り た い
未 来 社 会
あ な た の
夢 と
こ だ わ り

「NRI学生小論文コンテスト」とは？

野村総合研究所 (NRI) は、「未来創発—Dream up the future.」という企業理念のもと、未来社会のパラダイムを洞察し、その実現を担うことを使命としています。

そうしたNRIの社会貢献活動の一環として、これからの社会を担う若い世代の皆さんに、日本や世界の未来に目を向け、自分たちが何をなすべきかを真剣に考え、その熱い想いを発表する場を持っていただこうと、2006年から毎年「NRI学生小論文コンテスト」を開催しています。

毎年、多くの学生の皆さんから、日本と世界の新たな関係づくりや、未来に向けた斬新で力強い提案をいただいています。

NRIは、コンテストで入賞した若い世代からの提案を広く社会に公表することによって、若者を含む幅広い世代が日本の未来を考えるきっかけにしていきたい、と考えています。

これまでの募集テーマ

- 大学生の部・留学生の部 | 高校生の部
- 第1回 (2006) 2010年の日本と私
 - 第2回 (2007) 変わりゆく世界、進みゆく日本。
 - 第3回 (2008) 日本の新たな「開国」に向けて
 - 第4回 (2009) ITを活用した日本発ビジネス | 日本はコレで世界一になる！
 - 第5回 (2010) 日本が世界のためにできること | 世界のなかで日本の魅力を高めるには
 - 第6回 (2011) 2025年、新しい“日本型”社会の提案 | 2025年の日本を担うわたしの夢
 - 第7回 (2012) 自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会
 - 第8回 (2013) あなたが考える“わくわく社会”を描いてください



これまでの記録冊子

コンテストへの想い

日本や世界の夢ある未来を提案してください！

NRIグループは企業理念に「未来創発—Dream up the Future.」を掲げており、夢 (Dream) と未来 (Future) という2つの想いを大切にしています。学生小論文コンテストでも、大学生、留学生、高校生の皆さんから、日本や世界に向けた、夢のある未来の提案をお待ちしています。

NRI代表取締役社長
嶋本 正



新鮮な発想に触れることが毎年の楽しみ

毎年「NRI学生小論文コンテスト」の審査に参加し、2つのことを感じます。それは喜びと苦しみです。応募論文を読んで若い世代の方々の新鮮な発想に触れ、表彰式で受賞者の方たちとお会いすること、これが喜びです。甲乙つけがたい論文の中から入賞作品を選定すること、これが苦しみです。私にとって本コンテストの審査は毎年楽しみであり、自分自身の勉強にもなっています。

「NRI学生小論文コンテスト」特別審査委員
池上 彰 さん

いけがみ あきら—ジャーナリスト、東京工業大学教授。1950年、長野県生まれ。1973年、NHKに記者として入局。1994年から11年間「週刊こどもニュース」の“お父さん”を務め、2005年4月独立。主な著書に、『伝える力』『池上彰の現代史授業—21世紀を生きる若い人たちへ シリーズ』『おとなの教養 私たちはどこから来てどこへ行くのか?』など。

自分の想いを出発点に思考を深めて

現在は過去の先人たちが築き上げてきた歴史の上にあるように、未来というものは私たちが生きる現在の上にあります。つまり、未来を考えると、軸足は必ず現在に置くということです。この先、どんな未来が訪れ、そこで我々はどんな生き方をするのか—現在の自分の想いを出発点にしながら、思考を深めてほしいと思います。

「NRI学生小論文コンテスト」特別審査委員
ノンフィクションライター
最相 葉月 さん

さいしょう はづき—東京都生まれ。ノンフィクションライター。科学技術と人間の関係性、災害、医療などを中心に取材活動を行う。主な著書に『絶対音感』『星新一—〇〇一話をつくった人』『青いバラ』『ピヨンド・エジソン』『セラピスト』『れるられる』『最相葉月 仕事の手帳』など。





目次

- 2 「NRI学生小論文コンテスト」とは？
- 3 コンテストへの想い
- 6 NRI学生小論文コンテスト2014 創りたい未来社会～あなたの夢とこだわり～
- 7 募集要項
- 8 審査結果

- 11 **入賞論文 大学生の部**
- 12 大賞 インクルーシブ教育の実現に向けて——地域から創る、「福祉教育の日本」 城内 香葉
- 15 優秀賞 2025年問題に対する3つの提案——医学生の立場から考えた日本の医療の展望 菅野 未知子
- 20 特別審査委員賞 小一の壁から小一の扉へ「高齢者宅による学童保育」 高瀬 彩菜

- 25 **入賞論文 留学生の部**
- 26 大賞 若者でつなく伝統産業と未来社会——人的資本の活用による伝統産業の継承 陳 慕薇
- 30 優秀賞 良好な隣国関係を築ける社会の第一歩へ——日中青少年交流事業の強化について 邵 天澤
- 35 優秀賞 博士活用社会の実現を目指した博士・ポストドクターの国際コミュニケーター派遣制度の提案 劉 維

- 38 NRI学生小論文コンテスト受賞OB・OGインタビュー

- 41 **入賞論文 高校生の部**
- 42 大賞 さくらんぼネットワークの構築——世界を救い、日本を変える 韓 大鏞
- 44 優秀賞 「アグロフォレストリー」——日本と東南アジアの掛け橋 菅野 康弘
- 46 優秀賞 子どもの笑顔が溢れる社会——ネットいじめ解決への提案 谷口 今日子
- 48 特別審査委員賞 世界中の子供たちがつながっていく 野田 かれん

- 51 **募集告知から審査、そして表彰まで**
- 52 募集告知
- 54 審査
- 56 最終審査会
- 58 ドキュメント最終審査会
- 64 論文発表会
- 66 表彰式
- 68 コンテストへの応募動機
- 70 NRIグループ社員による審査の感想
- 72 NRIグループ社員によるコンテスト告知活動
- 73 先生から見た「NRI学生小論文コンテスト」
- 74 おわりに
- 75 メディアでの掲載

NRI 学生小論文コンテスト2014

大学生の部、留学生の部、高校生の部 共通テーマ

世界に向けて未来を提案しよう!

創りたい未来社会 あなたの夢とこだわり

2006年から開催している「NRI学生小論文コンテスト」、第9回となる今回は「創りたい未来社会 ～あなたの夢とこだわり～」を3部門(大学生の部、留学生の部、高校生の部)の共通テーマに設定しました。

学生の皆さんには、社会や未来に対する夢を描き、その実現に向けて強いこだわりを持ち続けながら行動してほしい、という想いを込めています。

体験に基づく強い想いや、常識にとらわれない、柔軟な発想を元にした“こだわりの未来社会”に出会えることを期待しています。

【テーマ詳細】

世界はいつもさまざまな課題を抱えています。

先人たちはこうした課題の解決にチャレンジし、科学・技術だけでなく、社会制度、芸術文化、教育スポーツなどの分野でイノベーションを起こして、よりよい社会の実現に貢献してきました。

先人たちのこうした偉業は、多くの人たちの協力によって実現していますが、その発端はひとりの、あるいはほんの少数の人たちの想いや創意工夫から始まったものが少なくありません。

「こういう社会が実現できたら…」、「こんなことが可能になったら…」など、夢を描き、それを実現するための強いこだわりを持ち続け、行動することが、社会の発展や世界を変えることにつながっているのです。

さて、あなたには、現在の日本や世界がどのようにみえていますか。

あなたは、未来に向けてどのような夢を描きますか。

また、どのような“こだわり”を持って、その夢を実現したいと思いますか。

NRIは、あなたが夢とこだわりを持ち続けることが、よりよい未来社会を創る原動力になると信じています。

募集要項

日本や世界を元気にする 斬新で力強い提案を!

大学生の部

応募資格：日本国内の大学院、大学、短大、高等専門学校(4～5年)に在籍している学生で、27歳以下の個人またはペア。ペアの相手は、留学生の部、高校生の部の応募資格者でも可。

字数：4,500～5,000字

*別途400字程度の要約を添付

賞：[大賞1名]賞金50万円、[優秀賞若干名]賞金25万円、

[奨励賞若干名]賞金5万円

留学生の部

応募資格：日本国内の大学院、大学、短大、高等専門学校(4～5年)、日本語学校に在籍している留学生で、30歳以下の個人またはペア。ペアの相手は留学生の部の応募資格者に限る。

字数：4,500～5,000字

*別途400字程度の要約を添付

賞：[大賞1名]賞金50万円、[優秀賞若干名]賞金25万円、

[奨励賞若干名]賞金5万円

高校生の部

応募資格：日本国内の高校、高等専門学校(1～3年)に在籍している、学生の個人またはペア。ペアの相手は高校生の部の応募資格者に限る。

字数：2,500～3,000字

*別途200字程度の要約を添付

賞：[大賞1名]賞金30万円、[優秀賞若干名]賞金15万円、

[奨励賞若干名]賞金3万円

【応募の際の注意点】

- ・論文は日本語で執筆された、自作で未発表のものに限る。
- ・テーマをそのまま論文タイトルとはせず、独自のタイトルを必ずつける。
- ・3名以上のグループでの応募は、審査対象外。
- ・図表の数は5つ以内。
- ・図表のタイトル、図表中の文字、注釈、参考文献一覧は、字数に含まない。

審査結果

受賞者の皆さんおめでとうございます！

入賞

大学生の部

大賞	インクルーシブ教育の実現に向けて ―― 地域から創る、「福祉教育の日本」 城内 香葉 慶應義塾大学 総合政策学部2年
優秀賞	2025年問題に対する3つの提案 ―― 医学生立場から考えた日本の医療の展望 菅野 未知子 千葉大学 医学部医学科5年
特別審査委員賞	小一の壁から小一の扉へ「高齢者宅による学童保育」 高瀬 彩菜 群馬県立女子大学 国際コミュニケーション学部3年

留学生の部

大賞	若者でつなぐ伝統産業と未来社会 ―― 人的資本の活用による伝統産業の継承 陳 慕薇 京都大学大学院 経済学研究科 修士課程2年
優秀賞	良好な隣国関係を築ける社会の第一歩へ ―― 日中青少年交流事業の強化について 邵 天澤 立命館大学 政策科学部政策科学科4年
優秀賞	博士活用社会の実現を目指した博士・ポストドクターの国際コミュニケーター派遣制度の提案 劉 維 東京工業大学大学院 総合理工学研究科 博士課程2年

高校生の部

大賞	さくらんぼネットワークの構築 ―― 世界を救い、日本を変える 韓 大鏞 神戸朝鮮高級学校2年
優秀賞	「アグロフォレストリー」 ―― 日本と東南アジアの掛け橋 菅野 康弘 宮城県宮城野高等学校2年
優秀賞	子どもの笑顔が溢れる社会 ―― ネットいじめ解決への提案 谷口 今日子 大阪府立佐野高等学校3年
特別審査委員賞	世界中の子供たちがつながっていく 野田 かれん 佐賀県立武雄高等学校2年

奨励賞

大学生の部

オンライン弁護士 石川 友恵 慶應義塾大学 法学部2年	「自分専門医」養成を介した元気な地域づくり 小沢 一世 自治医科大学 医学部3年
音楽療法の可能性 ―― 「心」と「体」のケアを 上條 恭佑 自治医科大学 医学部医学科5年	女性が作る日本のwork to“live”社会 津田 沙也香 上智大学 経済学部3年

ふるさとボランティア塾の創設 ――教育機会の不平等克服による地域コミュニティの再生 中垣 亜美 椋山女学園大学 現代マネジメント学部3年
--

日本品質の水道整備に向けた基盤構築 ――国内外の自治体と企業の協働による水ビジネス展開 長谷川 高平 日本大学生産工学部4年
--

海を志す ――真の海洋立国に向けた基盤としての海底地図の作成 平野 玲 東北大学大学院 法学研究科1年
--

ローカル教育のすゝめ ――未来の日本のために 村上 由和 首都大学東京 都市教養学部3年

2校通学制度の提案 ――いじめの芽を早期に摘む学校改革 森本 摩耶 大阪市立大学 商学部4年

高校生の部

笑う毎日 ――「笑い」の効果 青木 椋 埼玉県本庄東高等学校1年

未来へつなげる農業 ――日本農業の復興を目指して 葦名 志穂 埼玉県本庄東高等学校1年
--

LOCを学び、夢中に努力する 飯塚 巳弥 埼玉県本庄東高等学校2年

留学生の部

情報公開プラットフォームの構築による知識の共有へ 王 廷浩 京都大学 経営管理大学院 修士課程2年
--

次世代を担う子供を育成するための女性教育の重要性 ――女性の高等教育と社会進出と育児のバランス クララソニア スンジャヤ 大阪文化国際学校 日本語科2年
--

世界を一つに ～戦争のない未来を目指して～ 日本平和ツーリズム構想の提案 シュムブラング ナッタデット 国際医療福祉大学大学院 医療経営管理研究科 修士課程1年
--

マスコミの情報の不均衡と日中サンシャイン新聞の提案 杜 世鑫 青山学院大学 国際政治経済学研究科 修士課程1年 張 亜楠 神戸大学 法学研究科 修士課程1年（共著）
--

紛争のない世界への一歩 ――国際相互理解促進教育プログラム DOAN LE HAI NGOC 明治大学 国際日本学部国際日本学科4年

宇宙に世界の情報基地を——平等な情報社会を目指して
郡 希望 国立沖縄工業高等専門学校3年

「願い」を「自ら」叶えるために
——クラウドファンディングサービスで革命を起こす！
櫻井 未優 宮城県宮城野高等学校2年

誰もが「個性」を生かせる社会——統合保育の充実
新家 巧真 東京都 中央大学高等学校3年

地元の地域活性——戸沢村の魅力を伝えるために
鈴木 祥平 山形県立新庄南高等学校3年

65歳からのカレッジ——スポーツが創るいきいき社会
仲野 由佳梨 兵庫県西宮市立西宮高等学校1年

世界で活躍する日本人——英語教育に改革を
西出 哲也 岐阜県立関高等学校1年

日本の国家維持と若者に明るい未来を提供するために
八田 隼弥 東京都 中央大学高等学校3年

「国境の壁を越えて、世界中の人々がリアルに、自由に交流できる未来社会」
藤井 杏 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校1年

日本の公用語を日本語と英語とする未来社会
町田 瑞貴 早稲田渋谷シンガポール校1年

本当に幸せな人生の終わり方
南方 雄介 千葉県 私立 市川高等学校2年

聴覚障害への理解を求めて
森本 慧 兵庫県立小野高等学校2年

「存在意義」を見出せる社会へ
山田 こなみ 広島県立安古市高等学校2年

論文の応募概況

NRI学生小論文コンテスト2014「創りたい未来社会～あなたの夢とこだわり～」への
応募論文数と受賞論文数は、以下のとおりです。

応募論文数

大学生の部	留学生の部	高校生の部
159	37	687
総数 883		

受賞論文数

	大学生の部	留学生の部	高校生の部	計
入賞 (大賞・優秀賞・特別審査委員賞)	3	3	4	10
奨励賞	9	5	18	32
計	12	8	22	42

NRI学生小論文コンテスト2014 入賞論文 大学生の部

大学生の部 テーマ

世界に向けて未来を提案しよう!

創りたい未来社会 あなたの夢とこだわり

世界はいつもさまざまな課題を抱えています。

先人たちはこうした課題の解決にチャレンジし、科学・技術だけでなく、社会制度、芸術文化、教育スポーツなどの分野でイノベーションを起こして、よりよい社会の実現に貢献してきました。

先人たちのこうした偉業は、多くの人たちの協力によって実現していますが、その発端はひとりの、あるいはほんの少数の人たちの想いや創意工夫から始まったものが少なくありません。

「こういう社会が実現できたら…」、「こんなことが可能になったら…」など、夢を描き、それを実現するための強いこだわりを持ち続け、行動することが、社会の発展や世界を変えることにつながっているのです。

さて、あなたには、現在の日本や世界がどのように見えていますか。

あなたは、未来に向けてどのような夢を描きますか。

また、どのような“こだわり”を持って、その夢を実現したいと思いますか。

NRIは、あなたが夢とこだわりを持ち続けることが、よりよい未来社会を創る原動力になると信じています。

あなたの経験や体験に基づく強い想いや、常識にとらわれない柔軟な発想を元にした論文の応募をお待ちしています。

*入賞論文は基本的に原文をそのまま掲載していますが、一部、表記統一などの調整をしています。



大賞 [大学生の部]

自らの体験を元にして、日本版インクルーシブ教育の必要性を力強く提言。地域を巻き込んだ形の具体策にも筆者のこだわりが感じられ、審査委員の納得感と高評価を得ました。

インクルーシブ教育の実現に向けて

—— 地域から創る、「福祉教育の日本」

慶應義塾大学 総合政策学部2年

城内 香葉 きうち かえで

1. はじめに

差別を感じながら過ごした小学校時代

私が小学校に入学する年に、特別支援学校の分校（当時は養護学校）が空いた教室を間借りする形で設置された。母の話では、第1回目の行政の説明会では「共生」という言葉が使われ、健常児、障害児が共に学び、共に過ごすことのメリットを語ったそうだ。しかし、それに対する保護者や地域住民の反発が強かったため、2回目の説明会では、あっけなく「普通学校の児童は障害児と接することはなく、今までと変わらない生活が保障される」というものになってしまったという。子どもたちの教育そのものよりも、保護者の説得を優先した形でのスタートを切った。それから、私たちが使用しない時間だけ、グラウンドの片隅を使って運動する彼らの姿を見かけた。暑い夏の日、彼らにプールの使用は認められなかった。図工や習字の授業で特別教室が使えなくなった私たちのために、私たちの保護者は彼らの立ち退き交渉を続けていた。何の不便も感じてはいない私たちのために戦っていたのだ。私は学校という教育の場で、不条理な差別を感じながら過ごした。何もできないことが悔しく、違和感を持ち続け、そして私の中に教育改革への信念が芽生えたのである。それは10年経った今も変わらず膨らみ続け、私が「創りたい未来社会」「創っていかねばならない未来社会」がここに存在する。

2. インクルーシブ教育システムの構築に向けた特別支援教育とは

1994年のサラマンカ宣言以降、欧米をはじめ各国では、ノーライゼーションの理念に基づき、「インクルーシブ教育」が推進されてきた。インクルーシブ教育とは、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みであり、それは単に場を同じにし、

障害者の通常学級への同化を強いるのではなく、個々の多様なニーズに対応し、誰も排除することなく平等に学習できることを目指すものである。

ところが日本では、インクルーシブ教育の推進をしてはいるものの、それを構築するためのプロセスとして「特別支援教育」が導入され、分離教育を続けている。世界の流れに反し、日本が推し進めてきた「特別支援教育」とはどのようなものなのか。2003年3月、文部科学省から出された「今後の特別支援学校の在り方について（最終報告）」の中には、「障害の程度に応じ特別な場で指導を行う『特殊教育』から障害のある児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じて適切な教育的支援を行う『特別支援教育』に転換を図る」¹⁾と述べられており、私の印象に残ったものは、①特殊教育の対象者だけでなく、LD、ADHD、高機能自閉症を含めて障害のある児童生徒を対象にする ②障害のある子どもたちの教育を地域化する ③今まで断片的だった教育からライフステージを見通した支援体制を整える、の3点であった。

3. 特別支援教育（分ける教育）の現状と課題

その後、各地で特別支援学校が整備され、障害の種別によって就学指導がなされていたために遠くまで通わなければならない子どもが、近所の特別支援学校に通うことが可能になり、様々な支援体制が整えられた一方で、結果として「分離教育」が進行することになる。政府は健常児と障害児の交流を課題にあげ、解決策として「交流教育」に取り組んでいる。交流教育がインクルーシブ教育への道であるかのように位置づけられているが、あくまでも交流は、「たまに来るお客さん」であり、インクルーシブの考え方からは遠のいている。特別支援学校の誕生は、障害児の個々の能力を伸ばす特別な支援をするというその裏で、健常児、障害児を分けることで、通常学級の「足でまとい」を排

除しようとする古くからの背景が根付いているのではないだろうか。

4. 日本版インクルーシブ教育(分けない教育)の構築に向けて ～夢とこだわりの提案～

① コミュニティスクールとのマッチング

——地域を味方につける

2012年9月、文部科学省は、現在障害を持つ子どもの通学先が「原則として特別支援学校」と定められている法令を改正し、普通の小学校に通学しやすくする方針を固めている²⁾。

しかし、障害を持つ子どもが地域の小学校に入学しようとすると、さまざまな困難が立ちはだかるという現実がある。私が通った小学校を例にあげた通り、インクルーシブ教育を実現させる為には、普通学校の保護者や地域住民の理解が絶対的に必要となる。保護者の不安は、「それまで無かったものが増える」という受身の姿勢からくる漠然とした戸惑いや、「学習に遅れをとる」といった具体的な内容まで様々であり、それらを取り除いていかなければならない。

地域住民の理解、心のバリアフリーの最大の力となるものは「関心」である、と私は言い切る。親の関心、教師の関心、社会の関心こそが、良い子どもを育て、良い学校を創り、良い社会を創っていく。私自身が、母の「今日、漢字テストだね」、通学路の八百屋さんの「運動会、見に行くよ」の一言だけで頑張る事ができたからだ。

私の住む静岡県は、前年度の学力テストで小6国語Aが全国最下位となり、その他の教科でも低下傾向が続いていた。「成績が悪かった小・中学校の校長名を公表する」と川勝県知事がメディアを通して発言したことで、波紋を呼んだ。県教育委員会との押し問答の末、平均点以上の学校名の公表に至ったことは記憶に新しい。そして1年後の今年の学力テストでは、すべての教科で大幅な改善が見られ、中3数学Bに至っては全国3位と躍進した³⁾。この結果は、あらかじめ予想がついた事ではないだろうか。「関心」がもたらす児童生徒・教師・保護者の意欲の向上、目標に向けたコミュニケーションの増加、すべてがプラスに働いたのだ。

また、同時期に静岡県は、県内にまだ5校しかないコミュニティスクールの導入促進をしていくと発表した。地域住民や保護者が学校づくりに参画するコミュニティスクールは、2005年の発足当時、全国で17校だったが、2013年4月には1,570校(幼62、小学1,028、中学463、高校9、特別支援8)と増え続け、今後全国の公立小中学校の1割にあたる3,000校を目標にしている⁴⁾。コミュニティスクールの学力向上はすでに実証されており、校長のリーダーシップの下、地域関係者、保護者との連携を深め運営していく構図は、まさにインクルーシブ教育の目指す

ものと一致する。モンスターペアレント、学校に無関心、批判的だった人々を協力者に変え、コミュニティを最大の応援団にしていくことが、インクルーシブ教育実現の鍵となる。現在、全国には特別支援学校のコミュニティスクールも存在するが、私が目指すものはインクルーシブな環境のコミュニティスクールであり、比較的受け入れられやすいコミュニティスクール指定の時期とマッチングさせ、推進していくことを提案したい。

② 人員確保

～手を借り、知恵を借り、そして評価するしくみ～

インクルーシブ教育が90%以上進んでいるイギリスやイタリアの成功例を参考にすれば、1クラス20名程の小人数制(イタリア)であることや、保健省・教育省が連携し、専門性を持つ支援教師を派遣(イギリス)するなどの取り組みがされている。どの国であっても人員の確保が出来なければ、実現しないということである。

現在、通常学級においても発達障害(LD、ADHD、高機能自閉症)への対応が必然なことから、教師の負担は増加する一方であり、教師自身が「進化していく障害に関する教育」を勉強していかなくてはならない。すべての教師が学習するしくみ、教師を目指すすべての学生が大学で必修科目としていくことを前提に、一般教師でも、研修により資格がとれる支援教師制度を作っていくべきである。

また、児童の就学前の体験入学や、障害の程度や本人自身、保護者の希望を取り入れながら学校の選択ができるカウンセラーを学校ごとに配置することや、地域から家庭医を派遣すること、そして個人指導ができるチューター制度を導入することも効果的である。大学生のインターンや高校生以上の学生アルバイト・ボランティアによる参加型支援、孤独防止を狙ったシニア世代の取り込みなど、学校がより開かれたコミュニティの場になることが、人員確保に繋がるだろう。また、これらの積極的参加を社会全体で評価するしくみが重要であると考えている。

③ ユニバーサルデザインの提案型・参加型

「私の街の学校づくり」

今年1月、日本は国連の「障害者の権利条約」を批准した。この条約によって「合理的配慮の不提供」も差別の一種とみなされ、今後益々公共施設で、ユニバーサルデザインが取り入れられることになるだろう。インクルーシブ教育の実現には、学校整備の財政難が度々取りざたされるが、私のイメージするインクルーシブな環境は、地域住民参加型で手作りの温かさがあるものだ。

先日、地域の運動会のポスターが商店街に貼られており、私の小学校の同級生が描いたことが分かったと、彼女の活躍が嬉しかった。私は、絵やデザインといったものにまるでセンスがな

かったためか、友人たちが器用に描く絵やデザインに、いつもわくわくしていた。もっと幅広く学校のユニバーサルデザインを募集し、障害があるものの不便さに寄り添いながら、一緒に工夫し作り上げていく参加型のしくみを作っていきたい。私たち若者が地域に根付き、自分の意見やデザインが広がり、関心を持たずにはいられない程魅力的な「私の街の学校づくり」が出来たら、どんなに素晴らしいだろう。

④ 発信 ～世界へのアプローチ～

日本は、「モラルの国」「おもてなしの国」と言われることはあっても、「福祉の国」「教育の国」として名前があがることはない。日本では、小さい時から「人に迷惑をかけないようにしなさい」と教えられる。しかし、ドイツの友人から、「人に迷惑をかけるのは当たり前、だから人の迷惑も許してあげなさい」と教えられたと聞いた。これが、分離教育とインクルーシブ教育の違いなのではないかと思い、私は考えさせられた。教育での福祉の充実を図りたい私のすべきことは、グローバル社会に通用するインクルージョンの考え方やインクルーシブ教育の必要性を発信していくことだ。世界に誇れる新たな「福祉教育の日本」を築くために。

5. 終わりに

誰も排除しない世の中に

先日、ボランティアで出会った特別支援学校の教師を目指している大学院生Nさんがこんな話をした。「彼らは、社会に出ていく時に必要なものを身につけるために毎日頑張っています。彼らは今まで隔離された世界にいたので、社会に出て行った時に友達がいません。皆さんにお願いがあります。友達になってあげてください」と。その後、私はNさんと意見交換がしたいと思い、「私はインクルーシブ教育についてこれから勉強していきたいです」と声をかけた。Nさんは「インクルーシブ教育って何?」と答え、私は改めて、日本におけるインクルーシブ教育の認識の低さに愕然とした。私は今まで、特別支援学校の交流会や文化祭の裏方の手伝いに出かけていたので、障害児の母親と話す機会も沢山あった。「障害のない上の兄弟と同じ地域の小学校に行かせてあげたかった」という方もいれば、「きめ細かな指導がある特別支援学校がやっぱり安心だ」という方もいた。それゆえ、決して現在の日本の特別支援学校の取り組みを否定するものではない。しかし、特別支援学校という枠の中でしか生活してこなかった彼らは、社会に出た時にうまく健常者とコミュニケーションをとることができない可能性がある。またそれは、普通学校で障害児と全く接することなく育った健常児も同じことである。私が小学校で、泥団子を作る特別支援学校の彼らの姿を窓越しに見ては「一緒に遊びたい」と思った気

持ちは、決して「友達になってあげる」というようものではなかった。一緒に過ごしていく中でお互いの違いを尊重し、共同作業の中で助け合いながら成長していけば、道徳の授業で習ってきた「弱者には手を差し伸べよう」という教えは、そもそも必要なのではないだろうか。私たちはいつ事故に遭うとも限らないし、いずれは老いてもくる。障害を持った者を社会全体で受け止め、貧困・老い・いじめや虐待、能力主義の世の中で多くの困難を抱えている人がいることに目を向け、誰も排除しない世の中を築いていきたい。

文中注

- 1) 文部科学省 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議「今後の特別支援教育の在り方について(最終報告)のポイント」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/018/toushin/030301a.htm
- 2) 「障害児、普通学校に通いやすく 従来の政策転換 文科省」『毎日新聞』(毎日新聞社、2012年9日5日付)
- 3) 「学力テスト 小6国語A最下位脱出 本県全科目で改善」『静岡新聞』(静岡新聞社、2014年8月26日付)
- 4) 文部科学省初等中等教育局参事官付「行政説明 コミュニティスクールの今後の展開 ～学校・家庭・地域の三者の協働体制の構築を目指して～」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2014/02/24/1344503_1.pdf

参考文献

- ・ 茂木俊彦『ノーマライゼーションと障害児教育』全国障害者問題研究会出版部、1994年
- ・ 宮永潔・羽生田博美 編著『マニュアル 障害児の学校選択——やっぱり地域の学校がいい』社会評論社、1995年
- ・ 茂木俊彦『障害児教育を考える』岩波新書、2007年
- ・ 金子郁容『日本で「一番いい」学校——地域連携のイノベーション』岩波書店、2008年

【受賞者インタビュー】

**実際に見てきたこと、
体験から感じてきたことを
伝えたかった**



——コンテストに応募した理由、きっかけは?

自分のこだわりを伝えて、大勢の人に一緒に考えてもらいたいと思ったからです。

——論文を書き上げるまでにどのくらいの時間がかかりましたか?

書くことだけで言えば短い時間でしたが、体験から感じたことを頭の中でまとめていた期間は長かったです。

——この論文を書く上で苦労したことは?

実際に見てきたこと、体験してきたことを盛り込むには文字制限があり無理なので、重要なことの選別が難しかったです。

——今、どんなことに興味を持っていますか?

日本の教育、日本の福祉の今後です。

優秀賞 [大学生の部]

医学生の立場から、日本の高齢化と医療問題を現状分析に基づき深く考察。リーダー医師による人材確保など、具体的に堅実な提案が、審査委員の共感を集めました。



2025年問題に対する3つの提案

——医学生の立場から考えた日本の医療の展望

千葉大学 医学部医学科5年

菅野 未知子 かんの みちこ

1. 問題提起の背景

はじめに

超高齢化社会を迎えた我が国固有の問題として、「2025年問題」と呼ばれている問題があることを、どれくらいの方が日常生活の中で意識しているだろうか。厚生労働省発表のデータによると、2025(平成37)年に高齢者人口は約3,500万人に達すると推計されており、4人に1人が75歳以上という事態を迎え¹⁾、医療費の増加、労働人口の負担の増大が国としての基盤を揺るがしかねないとして、大きな社会問題となっている。

私は現在、千葉大学医学部に在籍しており、将来の医療の一翼を担う者としてこのことに大きな危惧を抱いている。今回これらの問題に対する施策を考え、明るい未来の医療を示すべく、

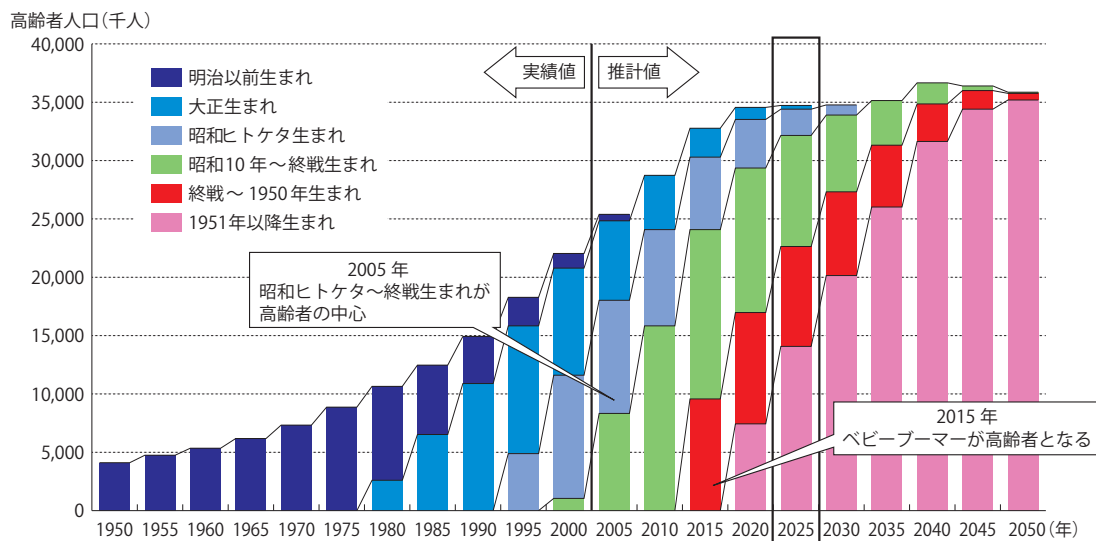
論文を投稿するに至った。

“老いる”首都圏、不足する医師

2025年問題を考えるうえで着目すべきことは、今後首都圏を中心に急速に高齢化が進むことである¹⁾。しかしながら首都圏周辺地域は、人口に対し医師の数が少ない地域として知られており、2012年に厚生労働省が発表したデータでは、人口10万人に対しての医師数が、埼玉県が148.2人と最も少なく、次いで、茨城県167.0人、千葉県172.7人となっている²⁾。このまま何の手だても打たれなければ、2025年度もこのような医師不足の傾向は続くとして懸念は大きい。

人口に比して医師数の少ない地域で高齢化が急速に進めば、どのような惨劇が起こるかは想像に難くない。医療者が疲弊し

図1 世代別に見た高齢者人口の推移



資料：2000年までは総務省統計局「国勢調査」、2005年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成14年1月推計)」
出典：厚生労働省 第1回介護施設等の在り方に関する委員会「資料4 今後の高齢化の進展～2025年の超高齢社会像～」(平成18年9月27日)

きること医療事故の増加を招いてしまうかもしれないし、また高齢者特有の慢性疾患を診ることに医療資源が割かれ、急性期医療への配分が疎かになってしまうことで、救急医療の崩壊も招きかねない。最悪の場合には、地域の医療自体が立ちいかなくなってしまう恐れもある。

『お・も・て・な・し』の医療体制、ニッポン

日本における医療は、やはりおもてなしの国の名に恥じないと言わなければならないか、他国に比しても実に手厚い医療サービスを提供しているといえるのではないか。それを示す一例が、次の主要諸国の平均在院日数を示したデータである³⁾。

このデータから明白にわかるように、日本における在院日数は他国に比して飛びぬけて長い。他国ではアメリカを筆頭に、簡単な手術であれば外来で行うことを基本にするなど、在院日数を極力抑える試みがなされているが、日本では手術は入院して行うことが基本であるし、術後においても手厚い管理体制を敷くなど、他国からすれば“サービス過多”とも呼べるような医療を提供しているのが実情である。高齢者の数が増えれば、より長期入院の必要な症状の重い患者も増えると考えerことは自然であり、何の施策も講じなければ、諸国と比べた在院日数の開きは今後さらに大きくなっていくかも知れない。

2. 具体的方策

リーダーは人材を集める

人口に対しての医師数が少ない首都圏地域で、高齢化が今

図2 都道府県別高齢者人口の見通し
(上位・下位それぞれ5都道府県)

	2004年時点の 高齢者人口(万人)	2025年時点の 高齢者人口(万人)	増加数(万人) と増加率(%)	増加数順位
埼玉県	109	196	87 (+80%)	1
東京都	223	308	85 (+38%)	2
神奈川県	141	226	84 (+60%)	3
千葉県	102	173	72 (+71%)	4
大阪府	155	219	64 (+41%)	5
秋田県	30	34	4 (+14%)	43
山形県	31	35	4 (+13%)	44
徳島県	19	23	4 (+19%)	45
鳥取県	14	17	3 (+21%)	46
島根県	20	22	2 (+8%)	47
全国	2488	3473	985 (+40%)	

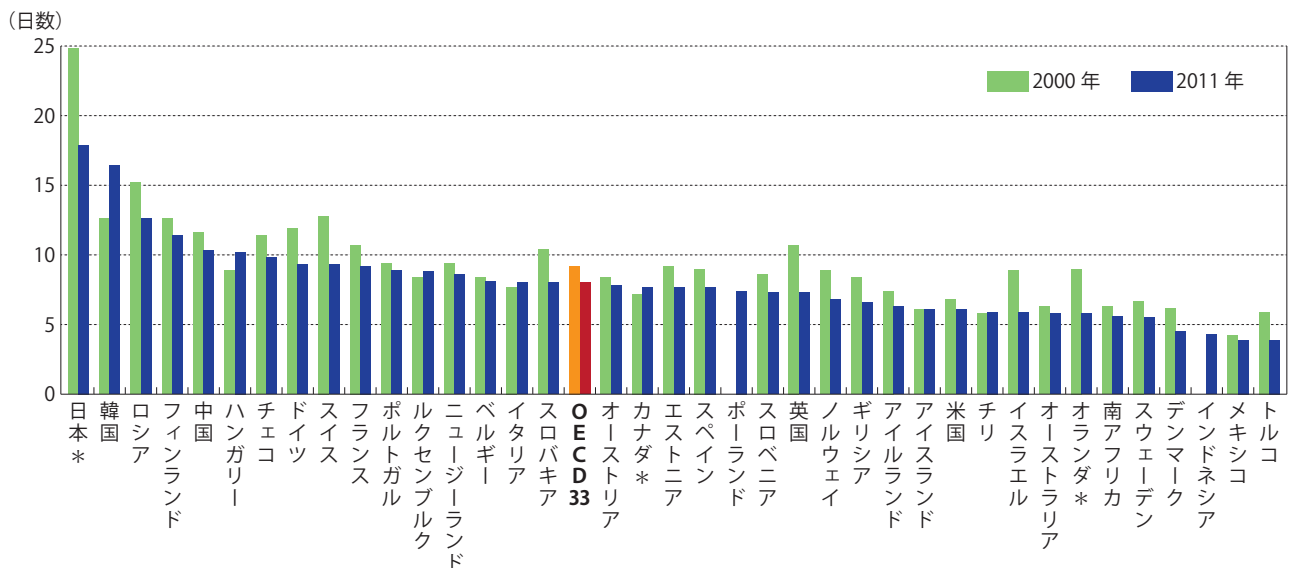
資料：総務省統計局「平成16年10月1日現在推計人口」、国立社会保障・人口問題研究所「都道府県の将来推計人口(平成14年3月推計)」
出典：厚生労働省 第1回介護施設等の在り方に関する委員会「資料4 今後の高齢化の進展～2025年の超高齢社会像～」(平成18年9月27日)

後急速に進むということは既に述べたが、ここではこの問題を解消する取り組みを考えていきたいと思う。

医師数が不足しているならば、単純に医学部を新設してしまえばいいのではないかと考えてしまいがちだが、今後日本の人口は減少の一途を辿ると言われており⁴⁾、単純に医学部を増やしてしまうのは早計であると思われる。人口に対する医師の比率は西日本で高く、首都圏を含む東日本地域で低い傾向があるので²⁾、このような偏在化を是正するための取り組みが必要となるだろう。

医師が勤務地を選ぶ際に影響を与える因子には、給与、教育体制、勤務地の利便性等、様々なものがあげられるが、こ

図3 平均在院日数の国際比較 (OECD34カ国と新興4カ国)



*データは治療(急性期医療)の平均在院日数である(過小評価の結果となっている)

出所：OECD Health Statistics 2013

ではつい先日、私が病院見学のために訪れた、福島県の沿岸地域にある南相馬市立総合病院（以下、南相馬病院と呼ぶ）の医師確保の成功例を取り上げ、偏在化解消のためのヒントを得たいと思う。

2011年3月に未曾有の大震災が東日本を襲い、津波によりたくさんの方が命を奪われ、人類史上最悪の原子力発電所事故が起こったことは記憶に新しい。街の中心部が原子力発電所からわずか20kmしか離れていない南相馬市は、震災直後、物資の往来が完全に途絶え、陸の孤島と化した。この時期、南相馬病院でも医療資源の枯渇や医療人材の流出など、大変厳しい病院運営を迫られた。

震災から3年半経った今は、その当時の最悪の状況を脱しており、常勤医師数はむしろ震災前よりも増えているという驚きの状況となっている。この医師数増加の背景には、人材確保に尽力した病院側の努力と、困窮する被災地を助けようと周囲に呼びかけたリーダー医師の存在、そしてその呼びかけに応え、立ち上がった諸先生方の高い志があった。

南相馬病院に全国から人材が集まったのは、震災という特殊な状況が契機となったためと考えられるが、この例からは人材集めのための重要なエッセンスが抜き出せる。それは、「リーダーは人材を集める」ということである。南相馬病院に関していえば、医学界に人脈を持つ東京大学医科学研究所の特任教授である上昌広先生が旗揚げをして周囲に呼びかけたことを発端に人材が集まり、その人材がまた人材を呼び、またその人材が…といったような好循環が生まれた。医師不足が深刻になっている地域でも、影響力の強い医師を中心に据え、現場の窮状を広く知ら

しめることで、南相馬病院と同じような好循環を生み出すことは十分に可能であると私は考える。

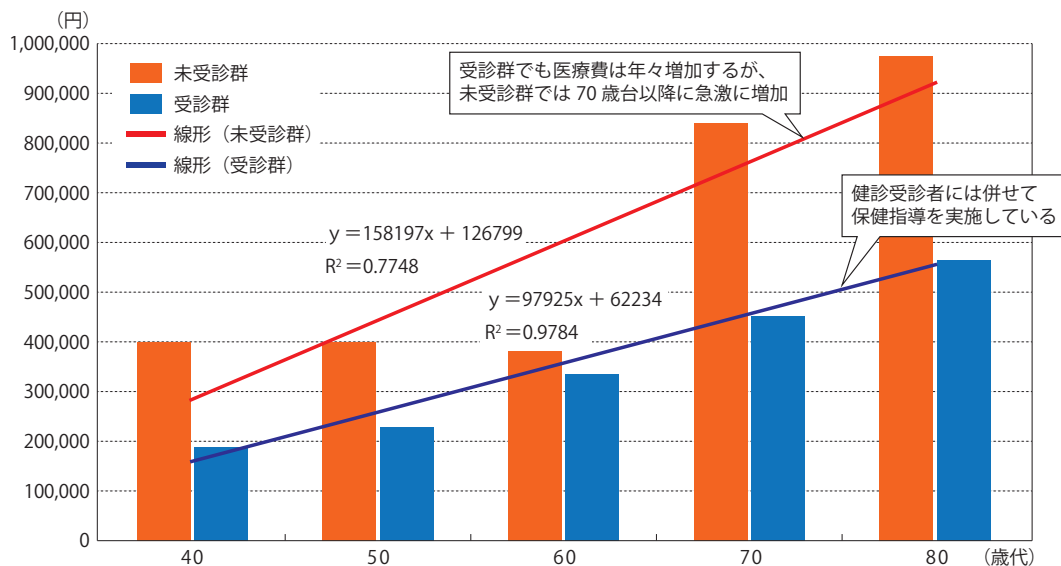
また南相馬病院では、僻地では珍しく、昨年度は初期研修医の定員数に対して2倍の応募があったということも特記すべきことだろう。全国でも有数の人気を誇る、千葉県にある亀田総合病院と提携し、一定期間亀田総合病院で研修ができる制度を設けたことや、医科学分野での高名な先生方を招いて、院内で定期的に勉強会を催していることなどがこの人気の秘訣なのかもしれない。つまり、僻地であっても魅力的な教育制度を組み込むことで、全国から人材を集めることは可能であるということをおの例は示している。

未病息災

現在の診療報酬制度では、実際の診断・治療行為に対してのみ保険の点数が定められ、予防医学に属する診療行為——健康診断やワクチンなど——に対しては保険点数が払われないことが実情となっている。つまり病院側から見れば、重症でよりお金のかかる治療行為を必要とし、長期間の入院が必要になる患者を抱え込めば抱え込むほど保険点数が稼げる仕組みになっている、という見方もできる。しかし国全体として考えれば、病気が深刻化する前に早めに対処することができれば、莫大な金額の医療費が削減できる上に、国民はより長く健康でいられ、労働可能な期間が延び、より苦しみの少ない最期を迎えられるかもしれない。

実際、熊本県のある町の国民健康保険加入者を対象に、健康診断受診者と未受診者の間にどれほど年間にかかる医療費

図4 健診の未受診者と受診者の医療費推移（熊本県A町国保加入者の年齢階級別年間医療費）



資料：日本赤十字社熊本健康管理センター 小山和作名誉所長資料より

の差があるかを調べたデータを見てみよう⁵⁾。これによると、70歳代では受診者と未受診者の間で、年間医療費に約400,000円もの差が表れている。このように、予防医学が医療費削減に貢献する度合いは大きいと考える。そうであれば、予防医学に重点化した施策を講じることが必要となるだろう。

例えば、透析について考えてみよう。現在、透析治療が必要な患者は約30万人おり⁶⁾、1人当たり1か月につき40万円の透析代が必要となることから⁷⁾、透析治療にかかる年間医療費は総額約1.4兆円である。日本における医療費総額は2013年度で39兆円と発表されているので⁸⁾、透析治療が医療費の約30分の1を占めている計算になる。そして、透析の原因のおよそ45%は、糖尿病の末期状態である⁶⁾。つまり、糖尿病が透析の必要な段階にまで進行することを防げれば、年間1.4兆円かかっている医療費が大幅に削減できるのである。糖尿病の発症機序には遺伝的要因も絡むが、大抵の場合は食事療法や運動療法など早めの予防措置を講ずることにより、透析が必要になる末期状態にまで病状が進行することを防げる、もしくは遅らせることができる。

具体的には、市町村などの自治体が主体となって保険医が常勤している健康相談室を作り、そこで市民が食事療法や運動療法について細かく指導を受けられるようにする。さらにジムを併設させ、無料で開放するなど、誰もが気軽に訪れることのできる環境を整備する。また末期の糖尿病の悲惨さを伝える市民講座を定期的の開講し、啓蒙活動を推進する、などの取り組みを提言したい。

こうした取り組みのほかにも、糖尿病の重症度合いを表すHbA1c⁹⁾の値を指標として、食事や運動を通して糖尿病を改善させた人に対して、改善の度合いに比して医療費を返還するなどのインセンティブを与えてみるのはどうだろうか。

予防医学に重点化した取り組みが、糖尿病に限らず全ての疾患に対して行われれば、先々を見据えたとき、医療費削減に寄与する度合いは大きい。今の医療のように、病態が末期であればあるほど、入院期間が長くなればなるほど、より多くの医療費が割かれている現状を打破するわけではない。

高齢者世帯のデータベース化と移動型医療施設（メディカルワゴン）構想

前項の予防医学に重きを置くという理念にも重なるところがあるが、私が推奨したいのは、地域に住む高齢者世帯の情報をデータベースによって管理する取り組みである。データベース化するのには、その高齢者が受けた健康診断やがん検診の結果、持病やADLの状況など。これにより高齢者の状態を継続的に知ることができ、病態がより重症化する前に早めに医療措置を講ずることができる。

しかし、たまに健康診断やがん検診を受診せず、重症化して

しまってから病院を訪れ、すでに末期の状態であったというような患者を目にすることがある。このように重症化するまで医療機関を受診しないという患者の背景には、そもそも病識が薄いという患者個人としての問題もあるだろうが、医療機関へのアクセスが悪いとか、足腰が悪くて医療機関を受診することが困難だという物理的問題もあると考えられる。

そのような患者を含め、長期間、健康診断やがん検診を受診しない患者に対しては、こちらから出向いて診察を積極的に行う。エコーやX線撮影、血液検査など簡単な診察のできる設備を車内に搭載した移動型医療施設——メディカルワゴン——で地域内の高齢者世帯を回り、健康診断、がん検診がその場でできるようにする。このような取り組みを行うことにより、早期に発見されていたら助かったはずの病気が、重症化するまで放置され末期で発見されるという悲しい事態が少しでも減らせるだろう。

3.まとめ

健やかに老いる社会を目指して

2025年問題は目前に差し迫っている問題であり、私たち医療を担う者をはじめ、全国民が危機感を持って取り組むべき問題だと考えている。ところが、周りを見回してもこの問題に対して危機意識を持っている人が少ないと感じたことから、広く問題を周知させようと筆をとったのがこの論文を書ききっかけであった。

医療費増大により国が亡びるという医療費亡国論がマスコミで喧伝されることも多いが、本質的には、一人一人の医療者がただ目の前にいる患者を、最善を尽くして助けようとした結果の集積なのである。私自身も、実習でまわっていて目の前の患者が病気で苦しんでいる姿を見ていると、助けるためにはできる限りのことは何でもしてあげたいという心情になる。だから実際のところ、現場にいる医師に「高額な治療は、たとえそれが患者にとって最善であっても差し控えるべきだ」などと声高に主張することはできない。しかしながら、そのような高額な治療が必要な状態に陥ってしまう前に、早期に発見して進行を未然に防ぐことはできる。

このようなことから、私は国策として今以上に予防医学を推進していくべきだと考えるし、その実現なくして明るい未来の医療は語ることはできないと考える。老いは誰にでも訪れる。そのような現実を各人が前向きに受け入れ、老いていくことへの不安が少なくなる、そんな医療を提供していくことが私たち医療従事者の役目である。

参考文献

- 1) 厚生労働省 第1回介護施設等の在り方に関する委員会「資料4 今後の高齢化の進展～2025年の超高齢社会像～」平成18年9月27日
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/09/dl/s0927-8e.pdf>
- 2) 厚生労働省「平成24年(2012年)医師・歯科医師・薬剤師調査の概況」平成25年12月17日
http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/ishi/12/dl/kekka_1.pdf
- 3) OECD 「Health at a Glance 2013 OECD Indicators」
Average length of stay in hospitals
http://www.keepeek.com/Digital-Asset-Management/oced/social-issues-migration-health/health-at-a-glance-2013/average-length-of-stay-in-hospitals_health_glance-2013-36-en#page1
- 4) 内閣府「平成24年版 高齢社会白書」将来推計人口でみる50年後の日本
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2012/zenbun/s1_1_1_02.html
- 5) 厚生労働省「平成17年度総合評価書 医療保険制度評価書」別紙p.31～45
<http://www.mhlw.go.jp/wp/seisaku/jigyuu/05sougou/dl/1-11-1c.pdf>
- 6) 一般社団法人日本透析医学会「図説 わが国の慢性透析療法の現況 (2013年12月31日現在)」
<http://docs.jsdt.or.jp/overview/>
- 7) 一般社団法人全国腎臓病協議会「透析治療にかかる費用」
<http://www.zjk.or.jp/kidney-disease/expense/dialysis/index.html>
- 8) 厚生労働省「平成25年度医療費の動向－MEDIAS－」
<http://www.mhlw.go.jp/topics/medias/year/13/index.html>
- 9) 糖尿病ネットワーク「ニュース／資料室」
<http://www.dm-net.co.jp/calendar/2014/021324.php>

[受賞者インタビュー]

**書き上げるのに
挫折しかけたが、
諦めずにやり遂げることは
大切だと実感**



—— コンテストに応募した理由、きっかけは？

元々、文章を書くのが好きで、趣味でコラムを書いたりしていたので、自分の力がどこまで通用するのか腕試しをしてみたいと思ったからです。

—— この論文を書く上で苦労したことは？

増大する医療費という複雑な問題を前にして、自分の知識の至らなさや文章の拙さに嫌気が差して、最後まで書き終えるのに挫折しかけました。でも、諦めずに書き終えたことで優秀賞という素晴らしい賞をいただくことができました。最後までやり遂げることは、本当に大切なことだと感じました。

—— 今、どんなことをしている時間が楽しいですか？

アジア料理を作ることと、各地の地酒を飲み比べるのにはまっています。友人と一緒に美味しいものを食べながらお酒をくみかわすのが、今一番楽しい時間です。



特別審査委員賞 [大学生の部]

少子化と高齢化の現状を掛け合わせて「高齢者宅による学童保育」というアイデアに変換させた視点の新鮮さや、安全面への考察が高評価につながりました。

小一の壁から小一の扉へ 「高齢者宅による学童保育」

群馬県立女子大学 国際コミュニケーション学部3年

高瀬 彩菜

たかせ あやな

1. はじめに

1-1. きっかけ

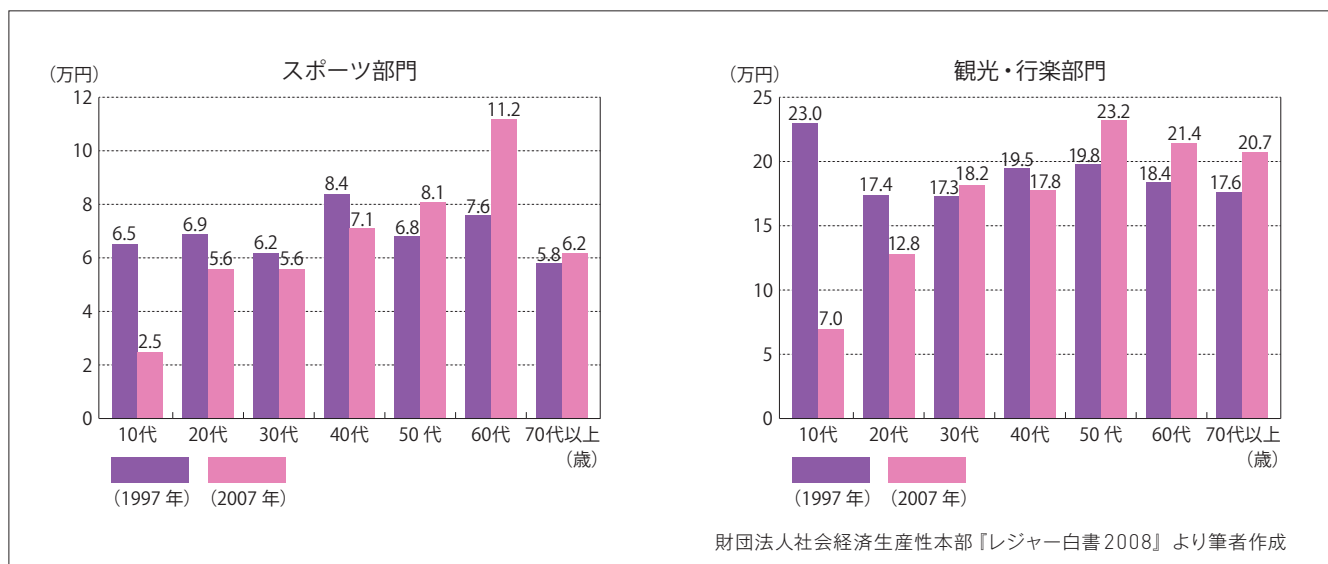
高齢化というワードをポジティブな意味を持つワードに一変させること、また親の負担と感ずるものを軽減させること、これは私が一生をかけて挑戦していきたい夢であり、こだわりでもある。今日の日本では、高齢化が顕著な問題として取り上げられている。メディアによって報道される高齢化問題は、ほとんどがネガティブな要素を含んで用いられている。昔から根っからのおばあちゃん子だった私は、祖母を含んだこの高齢者たちが、実は今日の日本にはなくてはならない財産であることを証明したい。また、長い間片親という環境で育ってきた私は、子どもが小学校に上がった時の親に増える負担をよく母親から感じ取っていた。もしも、親にかかるこの負担を高齢者が救うことができる

システムが日本に存在すれば、双方の問題が解決できる理想の未来社会が期待できると考え、提章では両者が得をするウィン・ウィンのシステムを提言していく。

1-2. 現状

まず、現代の高齢者について言及しておく。今日の高齢者の余暇の過ごし方は実にアクティブであり、(財)社会経済生産性本部「レジャー白書2008」からは、積極的にスポーツや観光にお金を使っていることが読み取れる。また、内閣府大臣官房政府広報室「NPO(民間非営利組織)に関する世論調査」(平成17年8月調査)、および内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査(平成15年度)」からは、高齢者の約半数はNPO活動に参加したことがある、または関心を持っていることがわかる。これらの現状より、高齢者には活力が十分あっ

図1: 余暇消費額の年代比較



て、その活力をNPO活動のような形で発揮することができる場所が存在すれば、需要はあると考えられる。

次に、小一の壁である。小一の壁とは主に共働き家庭に発生する問題で、子どもが小学校へと入学することを境に、公的学童保育の預かり時間の短さから親の負担が増加することを指す。公的学童保育では最長19時までしか預けることはできず、また、小学校入学初日から預けられないところがほとんどである。よって、両親は就業形態を変更しなければいけない可能性も出てくる。さらに、小学生は思春期へと移行する時期であり、大人の存在が必要不可欠であるにも関わらず、現代社会では核家族化や共働きが増加しているため、学校外での教育機能の低下も避けられない。公的学童保育より効率的な学童システムがあれば、こちらも需要が見込める。

2. 提章

2-1. 「高齢者宅による学童保育」の提案

1-2. から、双方にはそれぞれ問題があるが、何らかのシステムが存在することによって解決できると考えられる。そこで私は、

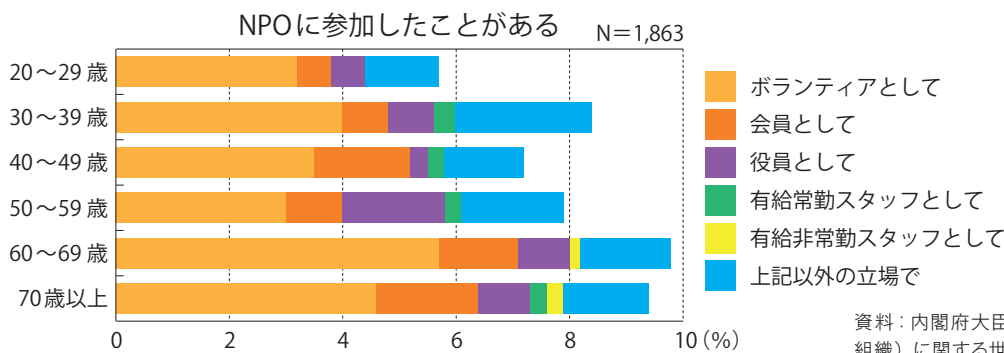
「高齢者宅による学童保育」を提案する。高齢者の自宅で、小学校に進学した子どもを親の退勤時間まで預かるというシステムである。

このシステムが公的学童保育と異なるところは3つある。1つ目は預かり開始日である。既存の公的学童保育は4月1日から預かってもらえない学童保育もあることが「東急グループホームページ <http://www.kidsbasecamp.com/>」からわかるので、このシステムは原則として4月1日から預かりを開始するものとする。

2つ目は預かり時間である。公的学童保育は平日放課後から18時までで、先ほども述べたように、場合によっては勤務時間を見直さなければ迎えに行けない。そこで、このシステムでは、親と高齢者の話し合いにより預かり時間に関して臨機応変に対応していく。そうすることによって、早く迎えに行けるときは早く、残業になってしまった場合は遅くまでの預かりを可能にする。

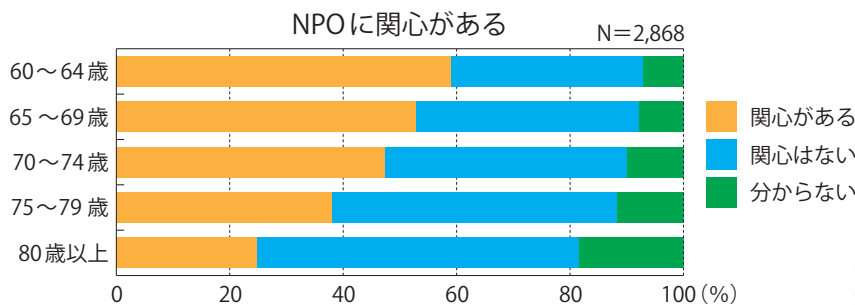
3つ目は人数だ。通常、公的学童保育は少人数の学童保育指導員らが大量の子どもたちを預かる。しかしこのシステムは、高齢者宅で行うもので、高齢者1人から2人に対して子ども1人から4、5人までという、子どもが何をしても目の行き届く範囲と

図2：NPO活動に参加した経験



資料：内閣府大臣官房政府広報室「NPO(民間非営利組織)に関する世論調査」(平成17年8月調査)

図3：NPO活動への関心



資料：内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査(平成15年度)」

いう環境を設定する。これらにより親も心配が少ないし、高齢者にとっても大人数預かるよりも負担が軽減する。また、孫と触れ合っている感覚を実現することができる。さらには子ども1人だけと限定してしまうより、ケースによっては子どもを4人くらいに設定することで、子ども同士も遊べる環境を実現することができる。

次からは、このシステムを実際行うにあたって必要なことをより詳しく説明していく。

2-2. 「高齢者宅による学童保育」のシステムの内容

「高齢者宅による学童保育」のシステムを確立するにおいて必要なことは、1.会社の設立、2.利用者登録、3.マッチング作業、の3つのステップに分けることができる。その3つのステップを順を追って説明していく。また、最後に料金について説明する。

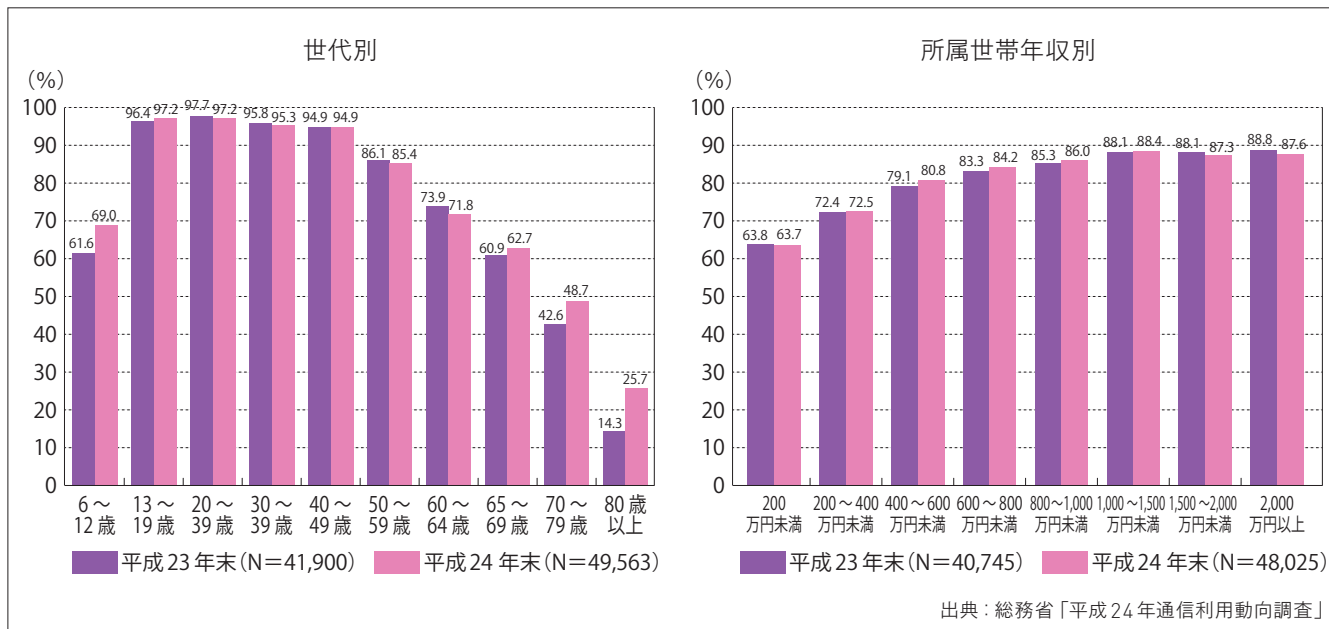
ファーストステップとして、会社を設立する。会社を設立するうえで、この後のセカンドステップで詳しく説明するが、従業員は基本的に会社に通勤する必要がない。主な従業員がこのシステムを利用することを決めた高齢者なので、高齢者の仕事場所はその方自身の自宅であるからだ。よって、基本的に通勤が必要な社員はいないが、管理等の仕事のためにごく少数の従業員は通勤が必要である。その従業員は女性をターゲットにする。今回提案するシステムには女性従業員の方が利点が多いので、女性を雇用する。その利点については、この後のセカンドステップで言及する。

セカンドステップとして、従業員と利用者、すなわち高齢者と小学生の子どもを持つ親がすることを手順に沿って説明して

いく。まず、高齢者についてである。自宅で小学生を預かることを希望する高齢者が、今回のシステムの従業員となる。ただ、会社へ通う必要がないため、面倒な手間は省ける。この高齢者の募集方法だが、現代の高齢者はネットを使いこなすといわれているが、総務省「平成24年通信利用動向調査」からは、やはりまだ普及率が高くないことが読み取れるので、通勤する女性従業員の訪問勧誘により「自宅による学童保育」に興味のある高齢者を募る。女性の方が子育てにおいて知識が豊富であるため、高齢者にこのシステムを利用してみたいか勧誘する際に、男性よりもよりスムーズな対応ができる。この勧誘により「利用する」と回答した高齢者は、自宅の場所・子どもを預かる際の条件（男児または女児等）を登録。あとは開始日を待つのみである。登録した瞬間、高齢者は従業員となる。次に、利用者である親だが、こちらは訪問勧誘ではなく、ネット登録を主とする。会社で用意した登録フォームに従い、子どもの学校名・性別・性格や趣味等の項目を記入、登録すれば完了である。両者これで登録は完了だ。

最後のステップは、マッチング作業である。こちらは、登録をした高齢者と利用者の親の情報を照らし合わせ、会社で利用希望の小学生に合った高齢者宅を親に紹介する。そして小学校入学の前までに、高齢者宅へ従業員同行で子どもと3者で出向く。ここで直接高齢者と会い、実際にその自宅でも良いと思えるかどうか（人間性や自宅の雰囲気等）を判断してもらう。納得がいったら、4月1日から実際に預かりが開始される。なかなかマッチングできない可能性もあるので、このマッチング作業は原則として子どもがまだ保育園に通っている時から徐々に

図4：属性別インターネット利用率



行っていく。

最後に、金額の設定だが、学童保育のように従業員が何人もいるわけではなく、会社の運営費もさほどかからないので、公的学童保育と比較して安く預けることが可能である。また、従業員を通年雇う場合、厚生労働省から特別給付金が支給されることが厚生労働省ホームページからわかるので、それらも活用していく。次に、このシステムから期待できる効果・影響について説明していく。

2-3. 効果・影響

このシステムにおいて期待できる効果は、大きく分けて1.高齢者の雇用、2.働く親の支援、3.世代間交流、の3つがある。

1つ目の高齢者雇用とは、65歳で定年した後の高齢者の働き口がなかなかないというのが現状で、実際警備員などで高齢者をよく見かけるが、基本的に年金暮らしの高齢者にとって、このシステムは雇用場所の提供となる。現在、日本のシニア世帯は、厚生労働省「平成25年国民生活基礎調査」より約1,161万世帯と言われている。需要は大いにあると言えるだろう。

2つ目だが、このシステムは保育時間等が高齢者との話し合いで決まるため、周りの児童と合わせる必要もなく、働く親にとってはワークスタイルを大きく変える必要がないという大きなメリットがある。

そして、なんといっても3つ目の世代間交流は大きな効果になる。現在の日本では核家族化が進んでおり、子どもが簡単に祖父母に会える環境でないことが多い。そのため、子どもは昔からの遊びや風習を知らずに大人へ成長していく。親が働いていれば、なおさらそのようなことを体験する時間がないだろう。子どもたちが普段日常的に体験することが減った遊びや食事、言葉などを高齢者から学ぶ場所になれば、学校外の時間もより有意義な時間になるだろう。高齢者にとっても、普段孫となかなか会う機会がない人や孫が欲しくてもいない人にとっては、かけがえのない時間になるだろう。実際、便利屋に「孫をレンタルしたい」と頼んだ人がいる、というニュース番組を観たことがある。

このようなシステムが実現すれば、希薄となった世代間交流が活発になる時代が来るかもしれない。

2-4. 問題点と解決方法

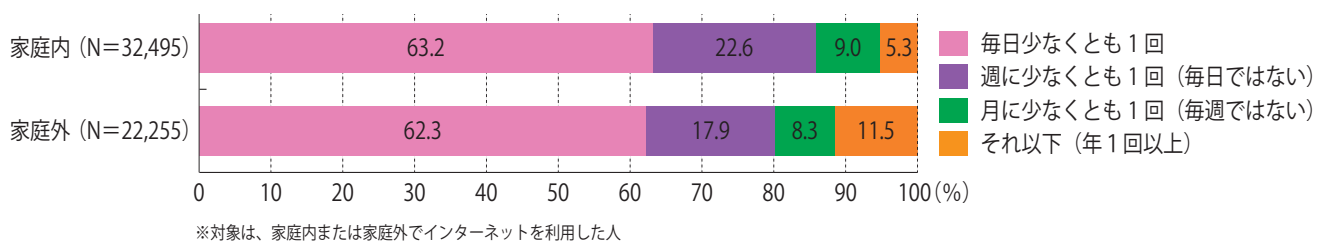
最後に、このシステムによって懸念される問題点とその解決方法について説明する。このシステムによって一番大きな問題となるのは、安全面だ。公的学童保育は、施設の設備、構造ともに安全面に配慮してあるため、高齢者の自宅は公的学童保育よりも安全面では劣る。また、従業員に関しても、学童保育における知識がある公的学童保育の従業員に比べ、高齢者には知識はなく、いざとなった時の対処方法がない。さらに、マッチング作業の時の面談だけでは高齢者の本質は理解できず、犯罪が起こってしまう可能性も懸念される。

それらの解決方法として、まず、会社勤務の女性従業員に定期的に巡回作業を行ってもらう。定期的に自宅を訪問することによって、犯罪を防ぐほか、いざとなった時に駆けつけられる環境を整える目的である。次に、高齢者宅に会社とすぐつながる電話又はブザーを設置しておく。子どもに危険が迫った時、それを使えば会社と簡単にやりとりができるようにするためだ。最後に、子どもを預けることが決まった高齢者には、学童保育における簡単な知識を学ぶための講座を受けてもらう。また、それらをまとめた冊子を配布し、高齢者が空いている時間に学べる環境も整えておく。以上のことで問題点を解決する。

3. まとめ

現在、学童保育の数よりも保育園・幼稚園の数が少ないことが話題として取り上げられ、そちらの問題の対策は市町村レベルでどんどん解決している。高架下に保育園や幼稚園を作るなど、工夫がなされている。しかし、子どもが小学校に入学した途端、子どものケアについてはないがしろにされがちである。また、核家族化も進み、世代間交流が図れない子どもたちは、古き良き日本に触れることもなく、成熟した大人へ成長していくの

図5：家庭内外別インターネット利用頻度



出典：総務省「平成24年通信利用動向調査」

である。このシステムを導入すれば、高齢者、子ども、親にとって利益が見込める。それは単なる金銭面の利益だけではなく、お金では計り知れない経験・時間の利益である。高齢者に新たな生きがいを創出し、自分たちが世の中で必要とされていることを実感できることによって、これからもどんどん増えていこうとする高齢者がさらに活発になる。それにより、暗いニュースが多いように感じられる現在の日本が明るくなるだろう。また、働く親にとっては、子どもを大切にしながら自分のキャリアアップを図れるといった、今までは諦めていた両方を欲張る人生が実現できる。どんな立場の人も平等に輝ける社会、それが私の目指す未来社会である。

参考文献

- ・「レジャー白書2008 ～「選択投資型余暇」の時代～」財団法人社会経済生産性本部、2008年
- ・内閣府大臣官房政府広報室「NPO(民間非営利組織)に関する世論調査」、平成17年8月調査
- ・内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査(平成15年度)」
- ・東急グループの学童保育 キッズベースキャンプ「小一の壁とは?」
<http://www.kidsbasecamp.com/workingmother/01/index.html>
- ・厚生労働省「特定求職者雇用開発助成金(特定就職困難者者雇用開発助成金)」2014年
http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyou/kyufukin/tokutei_konnan.html
- ・総務省「平成24年通信利用動向調査」2013年
http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01tsushin02_02000058.html
- ・総務省「平成25年版 情報通信白書」
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h25/pdf/n4300000.pdf>
- ・日本水産株式会社「役立つデータクリッピング 70歳以上の元気な高齢者」
http://www.nissui.co.jp/academy/data/08/data_vol08.pdf
- ・「小一の壁って何? 就学後も子の預け先不足」『日本経済新聞』(日本経済新聞社、2014年8月25日付夕刊)
- ・厚生労働省「平成25年国民生活基礎調査」
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa13/dl/02.pdf>

[受賞者インタビュー]

人と人のつながりを大切に、世代や背景の違う人たちと交流していきたい



——コンテストに応募した理由、きっかけは?

大学のゼミで、「自分の目指す未来社会をデザインするために、どう行動していくか」といった内容で日々学んでいるのですが、今回のこのコンテストのテーマと私たちが学んでいることが一致したため、応募を決めました。

——この論文を書く上で苦労したことは?

私の論文は特に安全対策が難しく、犯罪を未然に防ぐ策を考えるのに苦労しました。

——この論文を書いたことで発見したことや良かったことはありますか?

人と人のつながりがあるからこそ、新しい何かが生み出されるということを感じました。また、新しい何かを生み出すことによって、人と人のつながりも生み出すことができると感じました。

——今、どんなことをしている時間が楽しいですか?

初めて会った人(子供から高齢者まで)とコミュニケーションを取っている時間が楽しいです。世代によって会話の内容も全く違うので、自分の知らない世界を体験させてもらえます。今後もバックグラウンドの異なる人たちと交流していきたいです。

留学生の部

留学生の部 テーマ

世界に向けて未来を提案しよう！

創りたい未来社会 あなたの夢とこだわり

世界はいつもさまざまな課題を抱えています。

先人たちはこうした課題の解決にチャレンジし、科学・技術だけでなく、社会制度、芸術文化、教育スポーツなどの分野でイノベーションを起こして、よりよい社会の実現に貢献してきました。

先人たちのこうした偉業は、多くの人たちの協力によって実現していますが、その発端はひとりの、あるいはほんの少数の人たちの想いや創意工夫から始まったものが少なくありません。

「こういう社会が実現できたら…」、「こんなことが可能になったら…」など、夢を描き、それを実現するための強いこだわりを持ち続け、行動することが、社会の発展や世界を変えることにつながっているのです。

さて、あなたには、現在の日本や世界がどのように見えていますか。

あなたは、未来に向けてどのような夢を描きますか。

また、どのような“こだわり”を持って、その夢を実現したいと思いますか。

NRIは、あなたが夢とこだわりを持ち続けることが、よりよい未来社会を創る原動力になると信じています。

あなたの経験や体験に基づく強い想いや、常識にとらわれない柔軟な発想を元にした論文の応募をお待ちしています。



大賞 [留学生の部]

日本の伝統産業に深い理解を寄せ、取材・調査に基づいて日本人では気づかない視点で鋭く分析。その継承策への独創的な提案が、審査委員の高い評価を集めました。

若者でつなぐ伝統産業と未来社会

—— 人的資本の活用による伝統産業の継承

京都大学大学院 経済学研究科 修士課程2年

陳 慕薇 ちんぼび (中国)

1. 伝統産業の未来社会への意義

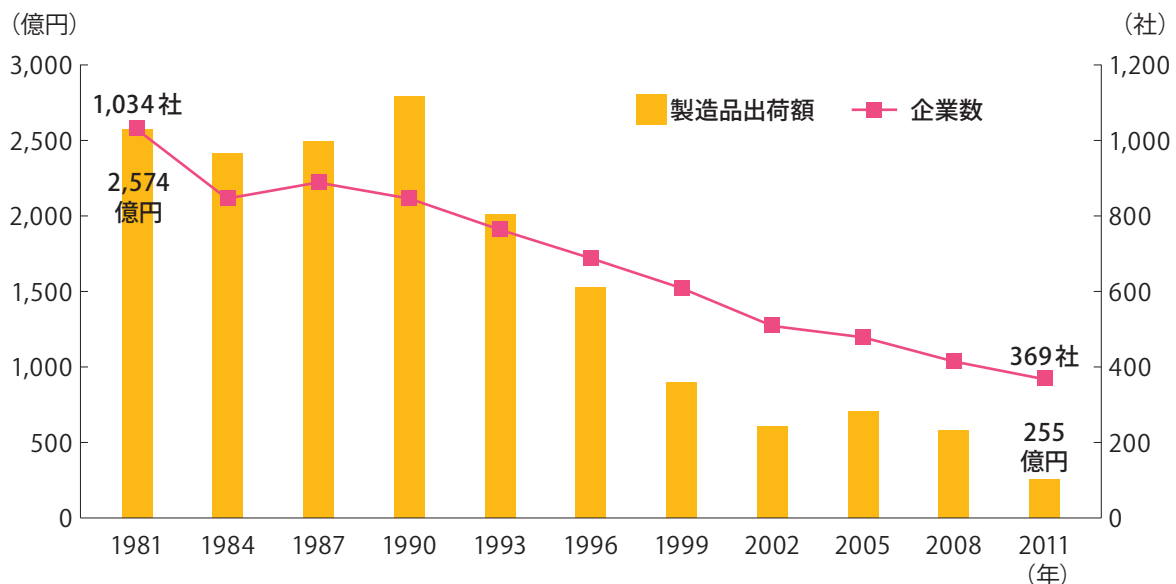
和装離れ、紡織技術の変化により、西陣織の出荷額と企業数は30年間、右肩下がりが続いてきた(図1)。それに伴い、西陣織物業に関わる従業員数も減少している。京都の先染め織物の代名詞ともいえる西陣織は、存続の危機にさらされている。しかし、現代社会において西陣織をはじめとする伝統産業を「無理矢理に」守ろうとすることは必要だろうか。必要であるとしても、需要の減少と新技術による代替が伝統産業の存続を脅かしている中、いかにして伝統産業を守ることができるのだろうか。つまり、未来社会に伝統産業を残す意味がどこにあるのか、そして、いかに残すのかという2つの課題が本論文のテー

マである。

未来社会に伝統産業を残す意味として、主に以下の3つが挙げられる。

- ① 未来社会はグローバル社会であるため、ローカルの特徴を残すことはアイデンティティを明確化し、比較優位性を持つことを意味する。「民族のものをこそ世界のもの」と言われるように、2000年の歴史を持つ日本ならではの技術と文化は、日本のものづくりの基礎、日本人の美的感覚、几帳面で繊細な国民性につながる。日本の未来社会の礎の大事な部分は伝統産業である。
- ② 「古くて時代遅れ」と印象づけられている伝統技術には、先端技術が敵わないところがある。伝統技術にとって肝心の

図1 西陣織の出荷額と企業数の推移



出所：第19次および第20次西陣機業調査委員会『西陣機業調査の概要』、西陣織工業組合『西陣生産概況 平成23年』より筆者作成

は、自然との調和と職人技である。自然から採取した原材料の特性を熟知し、気候風土に合わせて、手間をかけて仕上げた真綿布団、ところてん、紅花染めなどは、現代技術がどうしても敵わないほどの質と美しさを実現できる。神楽鈴の音色は、職人技で作られたものと機械で大量生産されたものとは雲泥の差がある。日本の未来社会にとって、伝統産業の技がなければ後代の損失である。

- ③ 伝統産業は美学を極める産業である。例えば、西陣織のハンカチや財布、ポーチなどの小物系、屏風などのインテリアなどは、ますます現代人に好まれるようになってきた。日本の未来社会では、伝統産業の美学が人々の生活を彩っている。

その必要性を分かったうえで、伝統産業の技術、経験、美学を受け継ぎ、現代に生かすためには、後継者の育成が大事になってくる。それに欠かせないのは、人的資本 (human capital) である。技術を代々伝えていくのも人であれば、常に革新させていくのも人であり、新たな活用を見つけ出すのも人である。特に若い世代に、この責任を担ってもらわなければならない。したがって、以下では伝統産業の後継者育成問題とその解決策を検討してみたい。

本論文は、京都の伝統産業関係者へのヒアリングとメディアで収集した職人のインタビューを基礎に、伝統産業が面している後継者問題の真実に迫る。その後、若者に伝統産業を未来社会につなげてもらうための方法を提案する。

2. 伝統産業の後継者問題

伝統産業は、全体的に職人の高齢化が進んでいる。例えば、京鹿の子絞り振興協同組合の調査によると、組合に所属する伝統工芸士のうち、60歳以上の伝統工芸士が4分の3を超えているという。それとともに、伝統産業の後継者問題が顕在化してきた。その一つは、技術を受け継いでくれる若者が来てくれないことである。門外不出の技術を習得するには長い年月が必要であるし、伝統産業自体が閉鎖的になりがちであるため若者が伝統技術と触れ合う機会が少なく、ベテラン職人に一人前と認められる敷居が高いため、両者の間に溝ができていく。したがって、伝統産業がオープンになることが必要であり、両者間の双方向の交流が鍵となる。

2つ目の問題は、若年労働者の流動性が高いことである。ヒアリングでは、伝統技術に引き付けられる若者がかなりいる反面、長く続かず辞めてしまう人が続出していることがわかった。その原因を以下の4つにまとめた。

- ① 作品作り (美術品作り) と製品作りには違いがあるため、後者では重複作業に飽きてしまう。
② 会社が小さいため、売り上げは賃金に直接関係する。大手

会社のように安定しているわけではない。

- ③ 職人の仕事は、きつい割に給料は安い。
④ 伝統産業は時代離れしているのも、もっと同世代の人々に近づきたいという思いがつのる。

つまり若者の育成に問題があるため、今までの弟子入りの方法を見直さなければいけない。そこで、先進国が途上国への支援に使う「ペイシェントキャピタル」の概念を、若年職人の育成に転用してみたいと思う。

具体的に人的資本がいかんにかんして伝統産業の存続に運用されるのかは、以下に述べる。

3. 若者と伝統産業とが会う場を設ける

伝統産業をテーマにする展示会は数多くあるが、その意図があまり若者に明確に伝わっていないため、若者は伝統産業に興味を持つことができなかった。展示会には主に2つのパターンがある。1つは博物館や美術館での展示で、技術も美学も値段も相当高い芸術品で、若者に近づきにくく感じさせるものである。もう1つはお土産系で、近づきやすい反面、製造業の商品という認識が強いため、伝統技術を学ぼうという意欲が湧かない。したがって、展示会にどのようなモチベーションで臨むかによって、その役割はかなり変わらなうと思う。

3-1. 「外」向けの発信による可能性の拡大

「外」というのは、伝統産業に関わりがちな若者を指す。老舗や職人の子孫はここでは論じない。閉鎖的になりがちな伝統産業がより広範な可能性を身に付けるためには、さまざまな分野の人をその輪の中に受け入れるべきである。たとえば、150年の歴史を持つ和傘メーカー『日吉屋』がデザイン照明器具に進出したきっかけは、とある展示会での外国人若手デザイナーとの出会いだった。そのデザイナーは和傘のデザインに魅了され、「そのデザインをランプに使ったら」と提案したのが始まりだった。現在、KOTORI「古都里」、MOTO「動」といった照明器具シリーズが、日吉屋の人気商品になっている。偶然の出会いだが、展示会は伝統産業と参加者が交流できる場であり、そのデザイナーのアイデアを受け入れたことが伝統産業に新たな可能性をもたらしたのである。

つまり、若者に伝統産業を継いでもらうには、弟子入りだけでなく、ものづくりの前段階や後段階に参加してもらったり、事業提携してもらったりすることによって、伝統産業に新たな生き方を与えるやり方がある。これに関しては4-2. で述べる。

3-2. 伝統産業に若者の可能性を発見

博報堂生活総合研究所が発表した『生活定点2012』によると、20代で「夢や希望が多い」と答えた人の割合は減っている。そ

の原因として、今ある日常に満足する傾向と安定志向に帰すると分析されている。イギリスの劇作家バーナード・ショー氏はこう言っている。「人生には二つの悲劇がある。一つは願いが達せられないこと。もう一つはそれが達せられること」。今時の日本の若者たちは、後者の悲劇に直面している。物質的な豊かさや平和かつ成熟社会により、夢を失った世代と言われている。

伝統産業は救世主ではないが、日本の古き良きものづくりは人生の生き甲斐を教えてくれると思う。冒頭で論じた伝統産業の意義に、その生き甲斐が含まれている。我々のアイデンティティと美学のあるライフスタイルを理解することにより、自己観が形成される。それは生きるモチベーションにつながる。それに、伝統産業の今でも劣らない高い技術と技には、自分を見失った若者たちを魅了する力がある。

したがって、若者に伝統産業の出来上がりを見せているだけでは物足りない。その出来上りに至るまで、職人の細かい分業、仕事に臨む責任感と完璧主義、微差に気づく職人技、自然との会話、一点ものへの尽くし方などなど、つまり出来上がりの価値に値する、そしてさらにそれを超えるものを見せなければいけない。その伝統産業の唯一無二の尊さを感じることができれば、誘惑だらけの社会にいながらもちきちんと自己観を形成することができるだろう。

要するに、若者と伝統産業の間で、双方向に情報が流れる場を設置することが、両者に新たな可能性をもたらすのである。いきなり継いでもらうことを考えずに、まず理解と交流を図ることによって、継承のパターンも多様化し、より多くの若者が伝統産業の輪に参加し、長く務めることができるようになるだろう。続いて、後継者育成の課題を見てみよう。

4. 後継者育成のペイシエントキャピタル

もともと伝統産業（主に手工業）は、産業集積によって産地の雰囲気の後継者が集まり、育ってきた。現在、伝統産業の産地が衰退し、産地内の水平的な分業が弱くなっているため、分散した伝統産業に新たな労働力が集まらず、仮に人が入っても長くは残らなくなった。

したがって、伝統産業における弟子入りによる後継者育成は現状に合わなくなっている。まとめてみれば、弟子入りのルートが不明確であることと、弟子入りという一貫したしくみしかないという2つの問題が浮き彫りになった。そこで、「ペイシエントキャピタル」という概念を導入してみたい。

4-1. ペイシエントキャピタルの転用

ペイシエントキャピタルとは、「忍耐強い資本」や「寛容な資本」と訳され、発展途上国で貧困にあえぐ小規模事業者などを投資対象として、自立できるまで支援し続けることを指す。短期

間に高額リターンを求めるヘッジファンドと違い、10年以上の歳月をかけて事業を支援する。見返りを全く求めない場合も少なくない。

なぜこの概念を伝統産業の後継者育成に導入するのか。まず、伝統産業と関わりのない若者は技術も経験もなく、途上国の小規模事業者のように指導と支援を必要としている。伝統技術を習得するには少なくとも3年から5年が必要であるし、その間もボトルネックによく当たるため、長い目で後継者を育成しなければいけない。ただ、ここでのペイシエントキャピタルは金銭的な投入にとどまらず、ベテランから教わることや実習も含まれている。

それに倣って、2つほど提案したいと思う。弟子入りルートをオープンにすることと、後継者育成パターンの多様化である。

4-2. ペイシエントキャピタルの活用

門外不出の技術であるため、職人の後継者探しはほぼ知り合いの紹介である。それ以外に、自分が自ら名乗り出て、教えてもらえるように頼んだ人もいた。西陣織の織機の前に70代のベテラン数人以外に1人の28歳の女性がいて、一生懸命西陣織を作っている。「彼女が来てくれることがありがたい」と担当者が言っているが、そんな若者はかなり少ないし、彼女も何千万人に1人、西陣織の魅力を理解したうえで応募したのだった。伝統産業に一般応募してもらうことはなかなか難しいが、敷居を低く設定することによって、より多くの人に触れてもらうことで伝統産業に選択権を与えるのである。応募する人の中から面接や実習などを通して不合格の人を淘汰し、ふさわしい職人の卵を選りすぐる。それは、限りあるペイシエントキャピタルを適切な投資対象に活用することを意味する。

現在、美術学校に西陣織など伝統産業と関わる学科ができたという。それもペイシエントキャピタルの活用であり、美術学校の学生はもともとポテンシャルと能力を持っているため、その中から将来の職人になるまで育成していくのである。

2つ目の問題点に対しては、3-1. で触れたように、後継者の育成は一貫した技術を教えることに限らず、作成前のデザイン段階、作成中の技術改善、作成後の加工と販売などにおいて若者と協力・連携することも伝統産業の継承である。昔の伝統産業は一人の職人によって成り立っていたわけではなく、水平的分業をしっかりと行うことによって存在していた。新たな水平的分業を企画するつもりで、様々な分野の若者を伝統産業の輪に入れてもらうことが、ここでのペイシエントキャピタルの活用である。

おわりに

映画「バック・トゥ・ザ・フューチャーII」では、空に飛び交う浮遊装置、ロボットによるサービス業、携帯情報端末、音声

認識スイッチ、多チャンネル同時表示テレビなどという2015年の未来社会を描いていた。25年前に描かれたアメリカの金属色のデジタル化された未来予想図が、来年果たされるかどうかは楽しみであるだろうが、日本、中国、ロシア、ブラジルなど様々な国には、それぞれの未来予想図があるべきである。そのひと味違う未来予想図に貢献するのは、それぞれの国の伝統産業であろう。

若者たちは現在と未来をつなげる役割を担っている以上、伝統産業が未来社会においてどう生きるのかを考えるべきであり、自らその使命を果たすべきである。

参考文献

- ・第19次西陣機業調査委員会『西陣機業調査の概要（西陣機業調査報告書）調査対象 平成20年』
- ・第20次西陣機業調査委員会『西陣機業調査の概要（西陣機業調査報告書）調査対象 平成23年』
- ・西陣織工業組合『西陣生産概況 平成23年』
- ・小藤弘樹、篠原総一「西陣機業の現状に関する統計的分析」同志社大学経済学部・経済学研究科ワーキングペーパーNO.26、p.3、2006年3月
<http://www.econ.doshisha.ac.jp/attach/page/ECONOMICS-PAGE-JA-146/27388/file/workingpaper026.pdf>
- ・「京都府織布生産動態統計調査26年6月分」『統計京都NO.503 2014年8月』京都府政策企画部企画統計課
<http://www.pref.kyoto.jp/tokei/monthly/tokeikyoto/tk2014/tkzenbun201408.pdf>
- ・陳慕薇「老舗の維持発展」『京都の維持発展』岡田ゼミナール、2012年後期レポート
- ・日本経済新聞「やさしい投資 きょうのキーワード～ペイシエントキャピタル（Patient Capital）」
<http://www.nikkei.com/money/investment/toushiyougo.aspx?g=DGXIMMVEW4002017052010000001>
- ・京鹿の子紋振興協同組合ホームページ
<http://www.kyokanoko-shibori.or.jp/index.html>

[受賞者インタビュー]

新たな発想に 現実性を持たせることに 苦勞した



——コンテストに応募した理由、きっかけは？

図書館でたまたまポスターを見かけて、テーマに興味を持ったからです。

——この論文を書く上で苦勞したことは？

新たな発想を提案するには、現実性がないとただの空想になるので、いかに現実的に行うことができるのかということを考えました。

——この論文を書いたことで発見したこと、良かったことはありますか？

伝統産業に興味を持っている人がたくさんいるということです。伝統産業を仕事にしたり、生涯キャリアにするのは難しいものですが、世代替わりで若い後継者が現れることによって、伝統産業がオープンになりつつあります。

——今、どんなことをしている時間が楽しいですか？

舞台を見ることです。今まで本や映画などでいろいろな作品を楽しんできましたが、去年から舞台を見始めて、「生」の力に衝撃を受けました。ストーリーだけでなく、表現の仕方も楽しむことができるからです。ミュージカル、時代劇、滑稽劇、新舞台など、いろいろなストーリーに引き込まれます。



優秀賞 [留学生の部]

日中関係改善の土台作りに貢献したいという切実な想いを提言に展開。独仏の事例を踏まえ、既存の日中青少年交流事業を見直すという提案の実効性、説得力も評価されました。

良好な隣国関係を築ける 社会の第一歩へ

——日中青少年交流事業の強化について

立命館大学 政策科学部政策科学科4年

邵 天澤 しょう てんたく (中国)

1. はじめに

問題背景・提案

領土問題をきっかけに急速に悪化した日中関係は、2年を経ても依然として膠着状態にある。政治の対立はさておき、経済面だけに注目すれば、近年、両国の相互依存はますます強まっており、世界第3位及び世界第2位の経済大国として、世界に多大な影響を及ぼしている。そんな両国の対立が常態化すれば、国際社会の平和と繁栄を脅かす不安定要素になりかねない。

そんな現状を打破するには、日中関係の改善及び未来志向の両国関係の構築が必要不可欠だと考える。そこで、私が創りたい未来社会、即ち日中両国にとって良好な隣国関係を築ける社会の実現に向けて提案したい。

日中関係の発展を阻む一因として、両国国内で台頭している偏狭なナショナリズムが挙げられるだろう。過熱したナショナリズムは、歴史問題や領土問題に絡む形で両国の国民感情を急

速に悪化させている。民間機関による2013年度の日中共同世論調査(図1参照)によれば、両国の国民が相手国に対して、“良くない印象を持つ”と回答した者はいずれも9割を超え、2004年に調査を開始して以来、最悪の状況であることがわかった。そこで、関係改善に向け、国民感情の悪化を如何に止めるかは、喫緊の課題である。本稿は、独仏両国の国民感情と独仏関係の改善に重要な役割を果たした独仏青少年事務所¹⁾の事例を参考に、日中青少年交流事業の強化について考えていきたい。

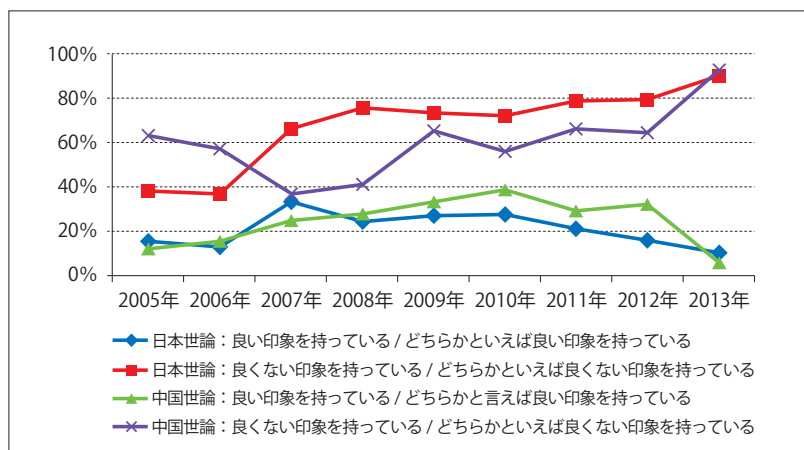
2. なぜ青少年交流は重要なのか?

研究対象の選定とその理由

隣国との関係を見事に改善した成功事例として、独仏関係がしばしば取り上げられている。独仏両国は歴史上、百年の敵と言われ、両国民は普仏戦争、第1次及び第2次世界大戦で殺し合い、お互いに深い憎しみを抱いてきた。しかし、戦後、か

つての宿敵であった両国は、恩讐を乗り越えるために様々な努力を続け、見事に両国の関係を改善して和解を果たした。この事例は隣国同士の和解に大きな示唆を与えるが、今の日中両国が直面する課題および国際社会、政治体制の状況は第2次大戦後の独仏和解の状況とは大きく異なっており、それら前提条件を無視して安易に倣うわけにはいかないだろう。そこで、筆者は独仏両国の和解プロセスにおいて重要な役割を果たし、かつ、日中両国においても運用可能な政策や事例に絞って検討した結果、独仏両国間の青少年交流事業とそれを担う運営機構である“独仏青少年事務所”という事例に注目した。

図1 日中両国民の相手国に対する印象の推移



出所：特定非営利活動法人言論NPO「第9回日中共同世論調査」2013年

独仏青少年事務所は、1963年に独仏両国の間に締結された独仏協力条約（通称：エリゼ条約）のC項「教育・青少年問題」により設立された、青少年交流専門の両国共同運営の機構である。同事務所の任務は独仏両国の青少年間の関係を深化させることであり、そのうち主要な業務内容は、両国の3歳から30歳までの青少年を対象に、独仏間交流プログラム（相互言語研修、職業実習、交換留学、スポーツ交流、姉妹都市交流など）を運営する、公的及び私的な団体や組織の支援である。同事務所は補助金（両国政府から毎年同額供給される基金により支出される。2012年の予算は2,080万ユーロ）を、それらの団体や組織に交付して助成する（必要に応じて助言及び指導の役割を果たすこともある）。同事務所は1963年の設立以来、半世紀に亘って独仏の若者約800万人を約30万の交流プログラムにより支援してきた。毎年平均して約1万1千件以上（グループ交流プログラムは6,500件以上、個人交流プログラムは4,300件以上）の交流機会を提供しており、約20万人の若者が参加している。

では、なぜ独仏両国は青少年交流を重視し、他に例のない大規模で多様な交流を持続的に行ってきたのか？

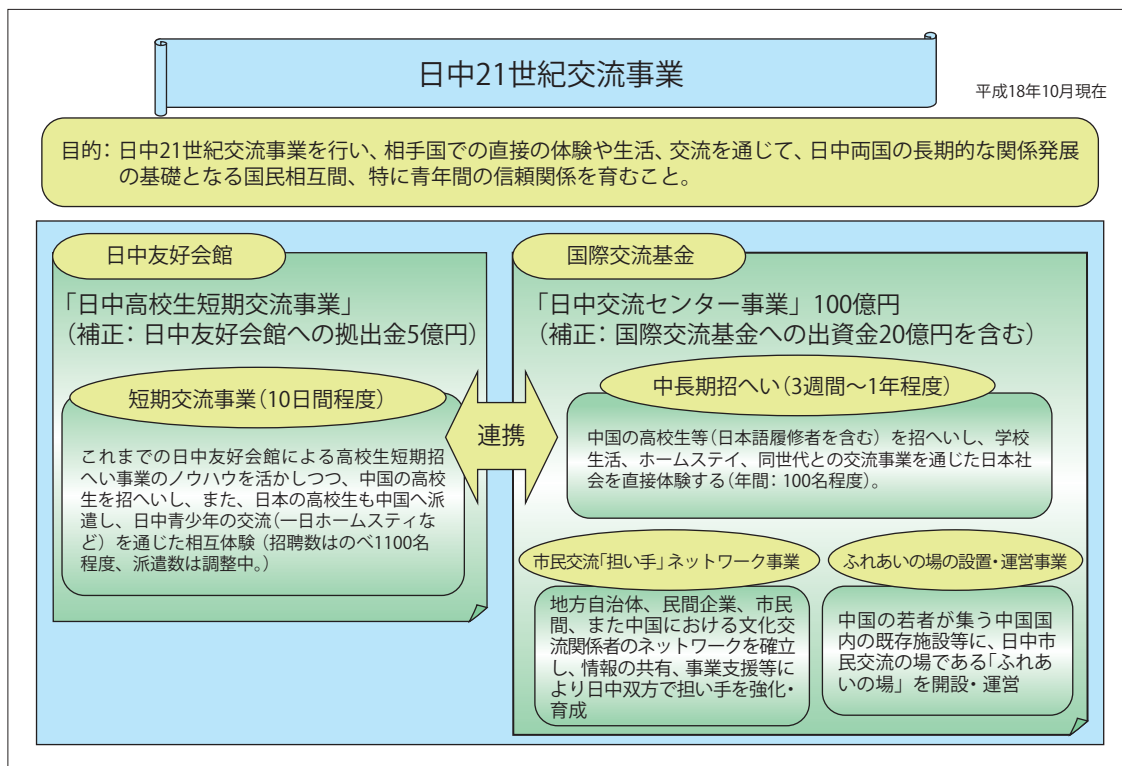
言うまでもなく、青少年交流の意義は極めて大きい。若者同士の相互理解と交流が、未来志向の両国関係の構築に決定的な役割を果たすという認識を、当時のフランスと西ドイツの指導

者は共有していた。両国の若者の相互理解の促進は現在の国民感情の改善に良い影響を及ぼすだけではなく、次世代の市民である両国青少年の交流により、将来の紛争や問題を予防する効果があると考えられたのである。独仏両国の指導者はその共通の理念に基づき、手を組んで素早く大規模な交流を可能にする制度を立ち上げた。

寺島（2012）は独仏青少年事務所が量と質、いずれにおいても前例のない青少年交流を持続させてきた理由として、次の3点を指摘した。1番目は、両国政府が青少年交流事業を制度化したことである。青少年交流が制度化されたため、両国政治の関係が悪化した場合にも持続的な青少年の交流が可能になった。2番目は、青少年交流を支えようとする両国の市民社会の連携の存在である。3番目は、政治と市民社会の連携である。つまり、交流には市民社会の視点が取り入れられていたのである。

50年以上も続いた独仏の青少年交流は、両国関係の改善に重要な役割を果たしたほか、欧州をはじめ世界に良い影響を及ぼしたと考えられている。例えば、1991年に、ドイツは同事務所の経験を活かし、隣国ポーランドとの間に“ドイツ・ポーランド青少年事務所”を設立し、これまで約200万人の両国青少年の交流を促進して両国の友好関係の構築に貢献した。また、独仏青少年事務所が主催した独仏青少年会議の発案によ

図2 日中21世紀交流事業の概要



出所：外務省「日中21世紀交流事業の概要」2006年

り、独仏共通の歴史教科書が誕生し、その影響を受けて日中韓共通の教科書作成に向けた機運が東アジアでも高まった。

3. 日中青少年交流事業について

3-1. 現状と問題点

近代における日中青少年交流の歴史は、日中国交正常化の前まで遡るが、本項では主に近年の日中青少年交流事業の現状に焦点を当てて問題点を探りたい。

同事業が本格的に拡大し始めたのは、2006年からだと見られる。2004年に開催した「新日中友好21世紀委員会」の第2回の会合で、中国側が発した「共通認識」における青少年交流強化の提言に基づき、2006年から日中両国の青少年交流を中心とする“日中21世紀交流事業”（図2参照）が開始された。2007年の第2回東アジア首脳会議においては、安倍総理（第1次安倍内閣）の提言に基づき、“21世紀東アジア青少年大交流計画（JENESYS Programme、図3参照）”が立ち上げられ、“日中21世紀交流事業”を継続し拡充するために“JENESYS”に編入された。また、2012年には被災地視察、復興支援活動体験の目的で立ち上げられた青少年交流事業“絆強化プロジェクト”（1,500人規模）が実施された。

これらの事業の特徴は、日本の関係省庁が目標を設定して

予算を編成し、日中友好会館（公益財団法人）や国際交流基金（独立行政法人）の日中交流センターなどの機関に業務を委託して、中国側の協力を求めて実施する形になっていることである。つまり、その実態は両国の政府および公的機関が主導し、運営しているといえる。

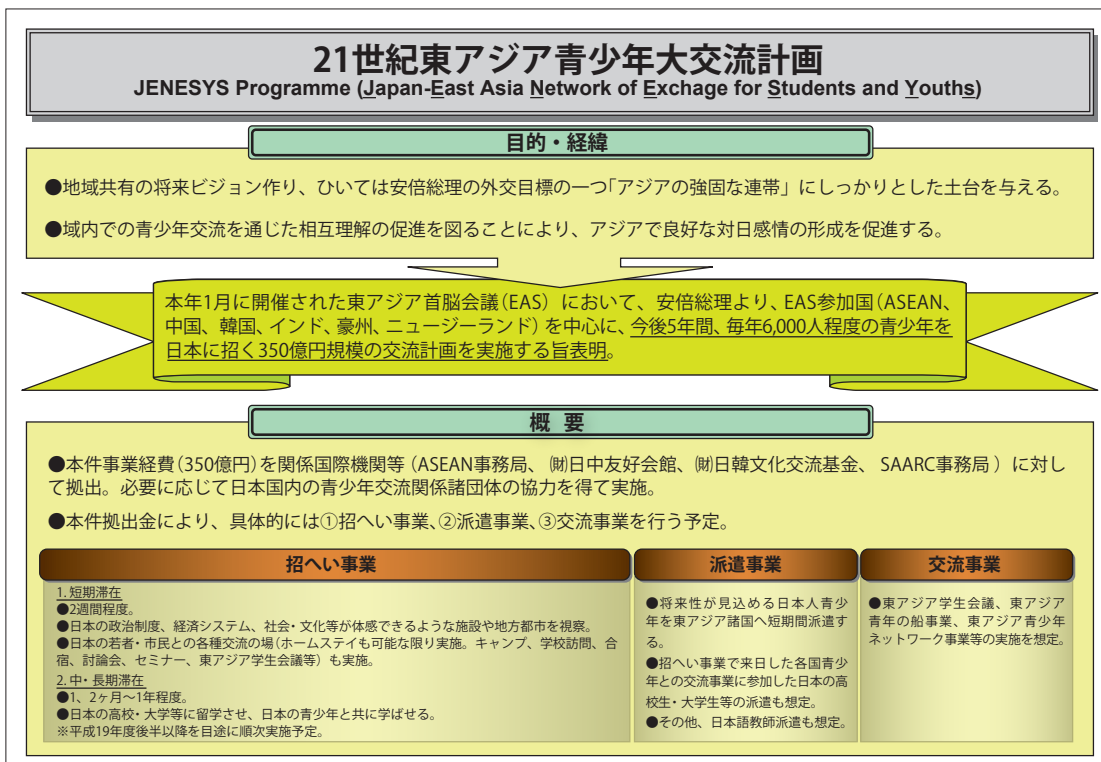
これまでの実績としては、以下のようなものがある。

- (a) 日中高校生短期交流事業（2006～2014年現在、年間5,000人規模）
- (b) 高校生の中長期招聘事業（2006～2014年現在、毎年30人程度、これまでの累計298人）
- (c) 市民交流「担い手」ネットワーク事業
- (d) ふれあいの場の設置・運営事業

近年の日中青少年交流事業の発展を振り返ると、小泉政権時代に悪化した日中関係を改善するための一つの手段として、青少年交流が両国政府に重視されてきたことがわかる。特に持続的に行われてきた青少年交流は、民間交流の一環として日中関係の改善に重要な役割を果たすことが広く認められています²⁾。

しかし、2012年9月に領土問題が浮上し、両国関係は一転して再び悪化した。青少年交流を含む日中の民間交流は次々と中止となった。同年、日中国交正常化40周年の記念事業や交流イベントの中止、延期が中国全土に広がり、かつてない深刻な事態になった。それにより、政府が主導する民間交流事業の

図3 JENESYS 21世紀東アジア青少年大交流計画概要



出所：外務省「JENESYS 21世紀東アジア青少年大交流計画」2007年

脆弱性が浮き彫りになった。

また、今までの青少年交流事業は一つ一つの規模が小さい上、参加人数や機会が限られていることも指摘しなければならない。その理由は、マクロ的な視点から見ると、5～29歳の青少年人口の場合、中国は5億1千万人で、日本は3千万人である。両国の青少年人口の規模から考えれば、日中青少年交流事業の最大で代表的なプロジェクト“JENESYS”の規模であっても、なお九牛の一毛と言っても過言ではない。日中が独仏のような規模を目指す場合、筆者の試算では年間約260万人（補足参照）以上の青少年交流の機会を提供しなければならない。勿論、規模や経済面でほぼ同等の独仏と異なり、日中両国の地理的、経済的な条件を無視し、いきなり独仏のような規模を目指すのは非現実的である。しかし、筆者の試算は、今後日中の青少年交流が進むべき一つの指標を示していると言えるだろう。さらに交流の実態からみれば、従来の直接的な交流プロジェクトでは、人数がわずかな上に、日本に来ることができる対象者は日本語や英語を専攻している者や政府及び公的機関により選ばれた者など、様々な条件をクリアした者に限られていた。両国のエリートに限定された交流は、当然ながら裾野が広がらず効果も薄くなるだろう。

3-2. 提言と考察

以上のような問題を解決するために、私は主に2つの提案を行いたい。

- ① 日中両国の青少年交流事業の強化に向けての制度改革。
- ② 市民社会の力の活用を前提とする、両国の官と民の連携に

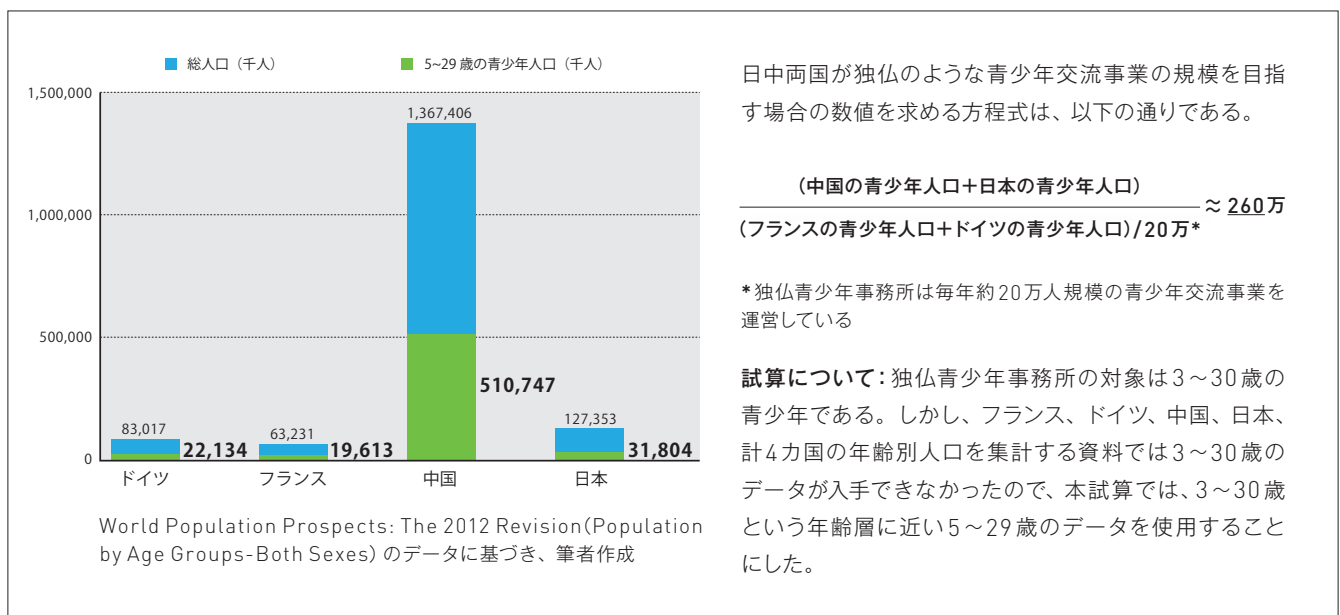
よる両国共同で運営する青少年交流事業専門機構の設立。

1番目は、両国の青少年交流事業をより持続的、安定的に継続するための制度作りが求められる。前述した歴史認識問題や領土問題をめぐり、両国関係が悪化した事態を想定して柔軟に対応できる制度の整備が必要だと考える。そうすれば、両国の対立が顕在化しても青少年の交流は制度として存続されるので、政治的な対立を民間交流にまで波及させるという最悪の事態を防ぐ、言わば保険をかけるような役割を果たせると考えられる。

2番目について、青少年交流事業における“量と質”の強化を図るため、両国共同運営の専門機構の設立が必要だと考える。グローバル化が進む今、両国間の市民ネットワークはますます発達し、市民団体の活躍がしばしば世の中に注目されている。その力を活用することでこそ、大規模で多様な青少年交流事業を実施できる。例えば、筆者が研究のために在籍している東アジア青少年歴史体験キャンプ日本実行委員会は、13年の歴史を有する市民交流団体であり、2001年から毎年、日中韓3カ国の約100名以上の青少年を集め、歴史・社会問題について学び語り合い、相互理解を促進するイベントを企画し、実施してきた。しかし、公的な助成を受けられず、地域や所得に関して幅広い層からの参加は実現できていない。

確かに、中国には受け皿となる民間機関が存在しないのではないかと懸念もありうる。しかし、李妍焱(2012)は、社会主義体制の中国においても草の根“NPO/NGO”は確実に存在し、政府との距離感をうまく取りつつ力を伸ばして成長している、と指摘している。また、政府間の関係が悪化したにも関わらず、来日中国人観光客の数は前より大幅に増えている³⁾。し

補足：青少年交流事業の試算について



たがって、政府と独立した社会は両国共に存在しており、政府間の関係に関わらず交流を深める民間主体の交流機構の設置が望まれるし、また、その前提条件も備わっていると言える。

4. おわりに

昨年、ドイツに短期留学をした。休みを利用してパリやベルリンを訪れた際、エリゼ条約締結50周年を記念するため、町中に溢れていた“独仏友好ムード”に感動したことは記憶に新しい。和解を果たした独仏両国のことを羨ましく思った反面、日中関係の悪化を憂慮して、とても悔しい気持ちが湧き上がった。

日本で勉強している中国人留学生として、私は心から真の日中友好の実現を願っている。しかし、現実には理想とかけ離れていて、悲しい事態が続いている。真の日中友好は願うだけでは意味もなく、行動を起してこそ初めて自分の理想に近づける。今後も青少年交流の芽を育てていきたい。

日中の青少年交流事業の強化は、真の日中友好に向けて必要不可欠な初めの第一歩だと私は信じている。まだまだ未熟な研究であるが、過去に例を見ないほど悪化した日中関係の改善に少しでも寄与できれば、この上ない幸せである。

文中注

- 1) DFJW/OFAJ: Das Deutsch-Französische Jugendwerk (DFJW) / L'Office franco-allemand pour la Jeunesse (OFAJ) 独仏青少年事務所という訳語は、同事務所を研究する日本人研究者の西山暁義氏と寺島敦子氏の著作内容に参考して使用したものである。
- 2) 言論NPO・チャイナデーリー(中国日報社)が共同で実施した「第6回日中共同世論調査」によると、民間交流が日中関係の改善に重要な役割を果たすと、両国国民の多数が考えていることが明らかになった。
- 3) 日本国観光局が2014年7月23日に発表した統計データによると、2014年上半期、中国大陸部からの訪日者数が前年同期比88.2%増の100万9,200人となり、大幅に増加した。

参考文献

- ・DFJW/OFAJホームページ
<http://www.dfjw.org>
- ・DPJW/PNWMホームページ
<http://www.dpjw.org>
- ・World Population Prospects: The 2012 Revision
http://esa.un.org/wpp/Excel-Data/EXCEL_FILES/1_Population/WPP2012_POP_F07_1_POPULATION_BY_AGE_BOTH_SEXES.XLS
- ・Bock, Hans Manfred, 『Deutsch-französische Begegnung und europäischer Bürgersinn: Studien zum Deutsch-Französischen Jugendwerk 1963-2003』 Opladen: Leske & Budrich, 2003
- ・外務省ホームページ「最近の日中関係と中国情勢について」
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/pdfs/kankei.pdf>
- ・外務省ホームページ「日中青少年交流事業」
http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/jc_koryu21/
- ・日本政府観光局(JNTO)ホームページ
<http://www.jnto.go.jp>
- ・言論NPO「第6回日中共同世論調査」結果
<http://tokyo-beijingforum.net/index.php/survey/6th-survey>

- ・言論NPO「第9回日中共同世論調査」結果
<http://www.genron-npo.net/world/genre/tokyobeijing/post-240.html>
- ・日中友好会館ホームページ
<http://www.jcfc.or.jp>
- ・国際交流基金日中交流センターホームページ
<http://www.chinacenter.jp>
- ・寺島敦子「エリゼ条約の最も美しい子供」——独仏青少年事務所：国境を越える青少年交流、『国際関係・比較文化研究』第11巻第1号、静岡県立大学国際関係学部、2012年9月
- ・廣田功編『欧州統合の半世紀と東アジア共同体』、「第11章 ユーロッパ文化関係における独仏青少年事務所(DFJW/OFAJ)」ハンス・マンフェット・ボック/西山暁義 訳、日本経済評論社、2009年
- ・児玉嘉之「フランスと西ドイツの青少年の交流 独仏青少年交流機構について」、『青少年問題』第11巻第11号、1964年11月
- ・川嶋周一『独仏関係と戦後ヨーロッパ国際秩序——ドゴール外交とヨーロッパの構築1958-1969』創文社、2007年
- ・相川泰「日中民間非営利交流・協力の現状と将来像」、『日中環境産業』2013年1月号、環境コミュニケーションズ
- ・天児慧『中国とどう付き合うか』NHKブックス、日本放送出版協会、2003年
- ・園田茂人「日中交流概観調査～国内における諸機関・団体の活動状況を中心に～」、財団法人国際文化交流推進協会、2004年3月
- ・李妍焱『中国の市民社会——動き出す草の根NGO』岩波新書、2012年11月
- ・劉徳友「中日邦交正常化回顧——兼論加強中日青少年交流與文化交流的意義——」、『國際關係學院學報』2012年5期
- ・張進山「戦後中日關係史中民間交流的特徵與作用」、『日本學刊』2002年4月、中國社會科學院
- ・常進・吳建華「中日青少年交流回顧與思量」、『日本問題研究』2009年第4期
- ・邢文萍「浅析戦後中日關係中的民間外交」、『遼寧教育行政學院學報』23-9、2006年9月

※ウェブサイトは2014年8月31日最終閲覧

【受賞者インタビュー】

次の目標を実現して、
もっと視野や見識を
上げたい



——コンテストに応募した理由、きっかけは？

日中関係の悪化を憂慮し、その改善策を考えたので、自分のアイデアを“公の場”で公表したいと思ったからです。

——この論文を書く上で苦労したことは？

やはり自分が考えた提言の論理性と実行性です。一見、立派な提言を言っても、論理性や実行性に欠けたら、ただの机上の空論になってしまいます。その点に注意し、説得力を増すために努力しました。

——論文を書いたことで発見したことや良かったことはありますか？

自分の問題意識や思考力を鍛えられました。自分が書いた論文が評価されたことで自信が付き、次のステージを目指して挑戦する意欲が湧きました。

——今、どんなことに興味を持っていますか？

日中関係を研究するためには、第三国から見る視点も大変重要だと認識しています。将来、ドイツに長期留学して、もっと視野や見識を広げたいと思っています。その目標を実現するために、日々努力している時間が楽しいです。

優秀賞 [留学生の部]

留学生として日本の博士・ポストドクターの置かれた環境に覚えた違和感を、具体的提案に展開。社会への影響まで考察した点や文章力や論文の構成力も高い評価を得ました。

博士活用社会の実現を目指した 博士・ポストドクターの 国際コミュニケーター派遣制度の提案

東京工業大学大学院 総合理工学研究科 博士課程2年

劉 維 りゅうい (中国)



1. 初めに

2005年頃、「博士が100人いる村」という作者不明の創作童話がインターネット上で公開され、一部で話題となった。その内容は、博士号取得者の現状を風刺したもので、博士100人の内16人が無職、8人が行方不明・死亡しているという衝撃的で生々しい内容が記述されている。この童話自体は創作で誇張された部分もあるが、高学歴ワーキングプア・余剰博士などの社会問題を反映しており、現実とかけ離れているとも言い難い。昨今の日本では、多くの博士号を取得した若手研究者が、その学歴と能力に見合った職に就けず、フリーター同然の生活を送っている。彼等の様な高度な専門知識を有する人材が活躍できていない状況は、日本社会にとって決して好ましいものではない。本論文では、現状を分析し、解決策として若手研究者向けの新たなキャリア制度を考案していきたい。

2. 博士号取得者の就職難の現状

2.1 博士新卒の進路状況

文部科学省が公表した「学校基本調査」によれば、2013年度博士課程修了者10,809名の内、大学助手・助教や民間企業就職など正規雇用で就職できた者は全体の50.5%しかない。同年度の大学卒業者の正規雇用での就職率は60.3%、修士課程修了者の正規雇用での就職率70.5%であり、それらと比べて著しく低い水準である。また、ここでいう「正規雇用」には、塾・予備校講師や運転手など、博士号を必要としない、または博士の能力が活かされない職業も含まれる。さらに、非常勤の職員・研究員や派遣社員・アルバイトなど、非正規雇用の労働に就いている者が全体の21.4%を占めている。一方、博士課程修了者の内、就職も進学もしていない者が全体の18.7%、不詳・死亡などのその他の者が全体8.7%を占めており、皮肉なことに

創作童話よりも悪い結果となっている¹⁾。

2.2 ポストドクターの進路状況

博士課程修了後に引き続き大学に籍を置き、任期付きの研究職に就く者、またはそのポスト自体は、ポストドクター（以降、ポスドク）と呼ばれる。その任期は通常1年、長くても3年から5年とされる。本来、ポスドクは若手研究者にとって経験とキャリアを積むための一般的な進路の一つであるが、日本においては博士卒業後の一時的な受け皿としてしか機能していない。ポスドク後のキャリアパスの整備が不十分であり、ポスドクから大学教員やその他研究開発職へ職種変更できるのはごく一部である。2012年度の調査結果によれば、ポスドク在籍者14,237人の内、職種を変更した者は全体の僅か12.5%しかいない²⁾。大多数のポスドクは複数の研究室を転々としながら、ポスドクの身分を継続し、先の見えない生活を続けている。

3. 博士号取得者の就職難の原因

3.1 大学・公的研究機関のポストの不足

根本的な原因として指摘されているのが、博士号取得者の数に対して、大学教職の空きポスト数が圧倒的に不足していることである。1990年代に旧文部省が推進した大学院重点化計画によって大学院の定員が増え、結果として博士課程へ進学する者が計画開始以前に比べ大幅に増加した。一方で、日本社会は成長の減退期に入り少子高齢化が加速する中、景気低迷による国の財政状況悪化などの影響もあり、大学側は無闇にアカデミックポスト、特に常勤のポストを新設できないのが現状である。若手研究者のポスト空き待ちが多発し、ポストを巡る競争が激化した結果、若手研究者が大学などで教職・研究ポストに就くことが難しくなっている。

3.2 企業の意識の問題

博士の民間企業への就職状況も、好ましいとは言えない。文系博士の場合は、そもそも企業が文系学生の就く事務職・営業企画職などで博士学生を募集・採用することが稀であるため、民間就職出来るケースは少ない。理工学系の博士は、比較的就職しやすいと言われているが、実際大多数の民間企業は博士の採用に関しては前向きではない。文部科学省が公表した「民間企業の研究活動に関する調査報告2012」によると、調査対象の内、過去5年間(2007年度～2011年度)に博士課程修了者を一度も採用していない企業は、全体の約70%を占める³⁾。民間企業が博士の採用に後ろ向きである一番の原因は、日本企業の新卒採用の考え方にあると思われる。日本の新卒採用の文化においては、学生の実績や知識などよりも、将来のポテンシャルが重視される。博士は特定分野の専門知識と研究経験を有しているが、それらは必ずしも企業で活用できるわけではない。そのため、企業側には博士を採用するよりも、自社での教育・訓練によって育成する方が効果的という認識が一般的である。その結果、新卒採用において、博士課程修了の学生は企業から敬遠されることが多い。

3.3 博士学生自身の弱点

世間には、博士の学生は象牙の塔の住人で、人と付き合うことが不得意という通説がある。この通説には同意しかねる部分はあるが、博士課程の学生が研究室という閉鎖的な環境下で研究を中心に活動し、対人能力を磨く機会が少ないことを考慮すると、誤った認識であるとも言えない。また、研究業績を重視する大学院後期課程の教育においては、学生のコミュニケーション能力、リーダーシップや協調性などの能力の育成は軽視される傾向がある。一方で、近年、企業は採用において、これら対人能力を重視する傾向が強い。その為、対人能力が不足していることにより、研究能力が高いと評価された博士学生の中でも内定を取れない人はいる。

4. 高学歴ワーキングプア・余剰博士などの問題が及ぼす悪影響

顕著化する博士の就職難により、学生の博士離れ、ポスドク離れが加速する。優秀な学生の多くは、学部や修士の段階で民間企業への就職という無難な選択へと流れる。同時に、現状に絶望して熱意を失い、学术界からフェイドアウトする博士やポスドクも少なくない。それは長期的に考えれば、日本社会の研究活力や学術競争力、ひいては国際競争力の低下に繋がりがかねない。また、博士学生の育成には、多額の資金と労力が必要とされる。一説では、博士1人の育成に1億円の税金がかかると言われている。職業に貴賤なしとは言うものの、それだ

け多くの教育資源を注ぎ込み育てた博士の行き着く先が、塾講師や派遣・フリーターなどというのは、どう考えても非合理的で、非効率的である。同時に、多くの博士課程修了者の知識や能力が社会に還元されないのは、日本社会にとって大きな損失である。

5. 博士・ポスドクの国際コミュニケーター派遣制度の提案

5.1 本制度の内容

深刻化する博士号取得者の就職難問題の解決策として、本論文では博士・ポスドク向けの新たなキャリア制度を提案する。その内容は、日本人の若手研究者を採用したいと考える海外大学と提携し、未就業で意欲のある博士やポスドクなどを対象に、提携する海外大学群に国際コミュニケーターとして派遣するものである。この制度による海外派遣プログラムは、大きく2つの段階に分けられる。その活動内容を以下に示す。

まず、第1段階では、1年程度を目安に、派遣プログラム参加者は滞在先の語学や文化、歴史について学ぶ。それと同時に、参加者は派遣先大学の学生向け日本語教育関係の講義や課外活動などで、講師、アシスタントまたは顧問として活動することを義務づけられる。さらに、派遣対象者は語学教育への参加と並行して、自身の専門性や経歴を考慮した上で、大学の教養科目の講義などで日本の社会、伝統文化や先端技術などの日本事情について紹介する活動も要求される。例えば、参加者が機械工学の博士であれば、現地大学で日本語教育に携わると同時に、日本の研究機関・企業が手がける最先端のロボット技術等について紹介することが想定される。

第2段階では、第1段階を終えた参加者が自身の希望や置かれている状況に基づき、その後の進路を選択する為の準備期間を設ける。例えば、参加者が海外大学や研究機関で就職や研究職に就くこともしくは進学を希望する場合は、この期間を情報収集、研究室訪問や採用試験の準備期間として利用できる。海外で民間企業への就職を希望する場合は、この期間を就職活動やインターンシップに利用できる。参加者が帰国して就職することも想定されるが、その場合は派遣プログラムを終了する。

本制度の特徴は、通常の留学と異なり、参加者は現地大学での教育活動にコミュニケーターとして参加することを要求される点にある。参加者は同時に学ぶ側と教わる側であり、双方向のコミュニケーター活動を通して、現地の大学生との相互理解を深めることができる。また、大学側の教育活動にも貢献することで、参加者は見返りに寮の使用、大学施設の利用や講義の聴講が許され、現地での生活基盤の構築を順調に進めることができる。さらに、コミュニケーター活動の功績・成果自体、

教職員採用の際に大学側が若手研究者らを評価・選別する指標の一つとなる。

同時に、本制度は、定職に就けていない若手研究者に対する一方的な保護政策や単なる受け皿づくりではない。この制度の本質は、自身の努力と挑戦によって現状を打開すること望む若手研究者らに対して、海外で自分を鍛える機会を提供するもので、いわば武者修行の場である。このプログラムに参加し多様な経験を積むことで、参加者の更なる成長が期待できる。

5.2 期待される具体的な効果

まず、本制度の導入により博士、ポスドクが海外大学で教職、研究職に就く機会を創造することが期待される。前述の様に、日本国内でのアカデミックポストの増設は見込めない。そのため、若手研究者は就職先として海外の大学、特に講師や研究者の需要が高まる新興国の大学にも目を向ける必要があると考える。近年では、アメリカ等の先進国のみならず、中国やベトナム等に活躍の場を求める日本の若手研究者も少なくない。しかし、個人が海外大学のポストに応募する場合は、コネクションや人脈がない、情報が不足するといった障害がある。同時に、本人の語学能力や現地生活への不安も存在する。そのため、本制度では、語学学習と海外生活への適応のため期間を設けている。同時に、海外大学と提携することで、情報の集約と生活基盤構築の面で若手研究者の支援を図る。

次に、この制度は、海外大学での教育交流活動を通じて、参加者により高い語学力、コミュニケーション能力、マネジメント能力や異文化理解力を身に付けてもらう狙いがある。参加者は博士課程で培った知識や経験に加え、更にこれらの能力を鍛えることで、総合力が高く魅力的な人材に成長する。それにより、将来のキャリア選択の可能性が広がることを期待できる。参加者の将来の活躍の場が大学と民間企業のどちらであっても、本プログラムを通して得た経験と能力は役に立つと確信する。

また、本制度の導入により、頭脳流出が加速するのではないかという懸念が存在する。確かに、短期的に見れば、博士、ポスドクが海外で教職や研究職に就くことは頭脳流出であり、日本社会の損失となることは否めない。しかしながら、派遣プログラムの内容である日本語教育と日本文化の紹介を普及させることで、海外の大学生が日本に興味や関心を持つきっかけを作り出せる。それは将来、日本への留学生の獲得や観光客の誘致に繋がり、長い目で見れば日本社会にとってもプラスの方向に働く。

6. おわりに

私は長い期間、日本の大学、大学院に留学し、機械工学について学んで来た。勉学と研究に励む日々の中で、日本の博士

とポスドクの就職難の現状を知り、強い違和感を覚えた。本来なら学術研究の最前線で活躍し、将来が約束されているはずの優秀な人材の多くが、安定した職にすら就けない状況は、私には異常としか思えない。日本留学で感じたこの違和感が、今回本論文を手がけるきっかけとなった。

博士号を取得した若手研究者達が、彼らの学歴と能力に見合う職に就くことができ、その知識や経験を活用し世界の発展に貢献できる社会、これこそが私が思う理想の社会であり、私を持つ夢とこだわりである。本論文では、「博士を活用できる理想の社会」へ繋がる可能性の一つとして、博士・ポスドクの国際コミュニケーター派遣制度を提案した。

参考文献

- 1) 文部科学省「学校基本調査——平成25年度結果概要（高等教育機関）」
- 2) 文部科学省 科学技術・学術政策研究所「ポストドクター等の雇用・進路に関する調査——大学・公的研究機関への全数調査（2012年度実績）」
- 3) 文部科学省 科学技術・学術政策研究所「民間企業の研究活動に関する調査報告2012」

[受賞者インタビュー]

**自分の考えを
論文にまとめるのは、
楽しい経験だった**



—— コンテストに応募した理由、きっかけは？

学内のポスターとチラシを見てコンテストを知り、自分を鍛える良い機会と考え、応募しました。

—— 論文を書き上げるまでにどのくらいの時間がかかりましたか？

データや資料集めを含めて、1週間で書き上げました。構想はそれ以前からありました。

—— この論文を書く上で苦労したことは？

文字制限内で自分の考えを最大限に表現することです。最初は4,500字以上に届くか心配でしたが、論文に取り組んで行くうちに書きたい内容が溢れて来て、5,000字以内におさめるのが大変でした。

—— この論文を書いたことで発見したこと、良かったことはありますか？

論文を書くこと自体が楽しい経験でした。関心があるテーマを選んだためか、取り掛かると自然と熱が入り、自分でも意外に感じるほどでした。

—— 今、どんなことをしている時間が楽しいですか？

一人で寺院巡りをすることです。私は信心深い人間ではありませんが、お寺や神社の独特の雰囲気が好きです。工学的視点で寺院の建築を観察するのもなかなか楽しいです。

「NRI 学生小論文コンテストに入賞して」

2006年に始まり、今回で第9回目となった「NRI 学生小論文コンテスト」では、これまでたくさんの受賞者を生み出してきました。当時、大学生や高校生だった皆さんは、今や社会人や大学生となり、さらにアクティブに自分の道を進んでおられます。2015年度のコンテストは、開始以来10年目の節目を迎えます。そこで受賞されたOB・OGの方に、コンテスト応募当時のことを振り返っていただき、応募理由や受賞後の進路などについて伺いました。



人の病を治療する医師から、 国の政策を企画立案する官僚へ

2012年に[大学生の部]で優秀賞を受賞した
木下 翔太郎 さん

きのした・しょうたろう さん
応募当時：千葉大学 医学部5年
現在：内閣府 政策統括官（沖縄政策担当）付 事務官
2012年コンテストテーマ：「自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会～あるべき社会の姿と私たちの挑戦」
受賞論文タイトル：将来の日本の為に——「我々の世代が為すべき医療改革」



— どういう動機からコンテストに応募されたのですか

当時は医学部5年生で、病院実習が始まり数カ月が経った頃で、周りの学生が進む診療科を決めていく中、自分にはそれがなかなか見えてこなくて、どうしようかと考えていました。また、それまで打ち込んでいた弓道部を引退して、アウトプットしたり自己表現する場が欲しいと思っていました。そんなときにインターネットで「NRI 学生小論文コンテスト」を知り、チャレンジしてみようと思ったのです。

— 論文のテーマはどのように決めたのですか

大学に入学した頃に政権交代があったり、その後、東日本大震災などがあって、社会問題に関心が強くなりました。中でも少子高齢化に関心があり、本を読んだりして自分なりに勉強していました。実際に病院実習で病院が高齢者であふれているのを見て、自分たちの世代がこの問題をしっかり考えなくてはいけないと思い、論文のテーマに選びました。

— 病院実習をしながら論文を書くのは大変だったのでは？

時間の合間を見つけて2、3カ月かけて書きました。文章を書くことは得意ではなかったのですが、問題に対するアプ

ローチを考えて論文の構成を練る過程や、テーマに対して調べ物をしたり、知らなかった知識を得たり、使えるような資料を見つけること自体がとても楽しく感じました。自分はこういうことが好きなんだと気が付きました。

— 受賞された後、医師の道から国家公務員の道に方向転換することを決めたのはどうしてですか

少子高齢化に対する自分の問題意識をまとめた論文がコンテストで評価されたことは、私にとって少なからず自信になり、真剣にこういう仕事ができないかと考えるようになったのです。いろいろと調べるうちに、社会問題に対して現状分析を行い、アプローチを考えていく政策の企画立案の仕事に強くひかれ、一念発起して国家公務員試験に挑戦することにしたのです。

— 迷いはありませんでしたか？

国家公務員試験を目指すことは自分にとってのスキルアップになると思いましたし、どこまで自分が評価されるのかチャレンジしてみたいという気持ちもありました。病院実習の合間にコツコツ勉強して、受験に臨み、幸い合格すること

ができました。新しい課題を多く抱える内閣府にひかれて入府し、現在は沖縄政策関連の仕事をしています。大変ハードですが、楽しく仕事をしています。論文コンテストに応募し、国家公務員を目指して良かったと思っています。

— コンテストへの応募を考えている大学生にメッセージを
勉強でも読書でも、目標があると身の入り方が違うものです。自分を高めるために目標を持つことは、とても良いこ

とだと思います。また、社会人になると、自分が何かを発信していくときには、その考えの根拠や具体的な内容までしっかり述べるのが求められます。論文という1つの形にまとめる作業は自分の考えを整理する訓練になり、必ず今後の自分のために役立つと思いますので、ぜひ皆さんには本コンテストへの応募に挑戦して欲しいと思います。

努力はさまざまな可能性を もたらしてくれる

2012年に[留学生の部]で優秀賞を受賞した
張 辰飛 さん

ちょう・しんひ さん
応募当時：東京大学大学院 経済学研究科 修士課程1年
現在：株式会社ディー・エヌ・エー マーケティング本部 勤務
2012年コンテストテーマ：「自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会～あるべき社会の姿と私たちの挑戦」
入賞論文タイトル：「留学生活用社会」の創造——外国人留学生就職における問題の解決と留学生自身にできること（東京大学大学院 工学系研究科 修士課程2年 馬一丹さんとのペア応募）



— 張さんは受賞された小論文の題材に、日本における外国人留学生の就職を選ばれていましたが、応募されたいきざつを教えてください

私は北京の中国人民大学を卒業後、2012年4月に東大の大学院に入りました。周りには日本企業への就職を希望する留学生が多かったですが、留学生が日本で就職活動を行うにはあまりにも情報量が少ない状態でした。私は人材系のベンチャー企業でアルバイトをして、留学生向けの就職セミナーの準備に関わったり、留学生のメーリングリストを作って就職情報を配信するといった活動を行っていました。本コンテストのことは大学の図書館でチラシを見て知り、同じ研究科の1学年上の留学生の先輩にこのコンテストで賞をとった人がいて、「私も応募してみようかな」と思ったのが直接のきっかけです。留学生の就職について感じていた問題意識や自分なりの提案を、論文にまとめました。

— 論文が入賞したことで、何か生活や心境などに変化はありましたか

何より、賞をいただいて自分に自信が付きました。「これまで自分がしてきたことには価値があるんだ」と思えて、いろいろなことがポジティブに循環するようになっていきました。生活面では、論文を応募したすぐ後の2012年9月から、アル

バイトをしていた人材系のベンチャー企業でインターンとして働き始めました。留学生向けセミナーの講師など、さまざまな業務を経験して、1年半勤めました。自分の実際の就職活動では、初めのうちは失敗を重ねましたが、次第に自分の課題が見えてくるようになりました。論文を書いたことによって考えを整理でき、それをベースに行動できるようになったと思います。最終的には希望していたIT企業に内定をいただき、就職することができました。

— 現在はどのようなお仕事をされているのですか

マーケティング本部で、主にユーザーの意見を吸い上げて分析する、マーケティングリサーチの業務を担当しています。また、新卒の社員で構成された組織改善という社内チームに入っていて、リーダーを務めています。今は仕事に集中し、前を向いて進んでいます。自分自身が満足できる人生を歩み、自己実現できるように、頑張っていきたいと思っています。

— 応募を考えている留学生にメッセージをお願いします

私はこのコンテストに応募して、日本の社会では日本人だろうと外国人だろうと関係なく、自分の努力次第で何かを変えていく可能性があるということを実感しました。ぜひ自分の考えを論文にまとめて、コンテストに応募してください。

コンテスト受賞がきっかけとなって、 自分の世界が大きく広がりました

2012年に「高校生の部」で優秀賞を受賞した
舛田 桃香さん

ますだ・ももかさん

応募当時：頌栄女子学院高等学校2年

現在：慶應義塾大学総合政策学部1年

2012年コンテストテーマ：「自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会～あるべき社会の姿と私たちの挑戦」

受賞論文タイトル：今どきの子供が未来を創る——興味が繋ぐバトン



— 舛田さんが受賞されたのは高校2年生のときでしたが、どういったきっかけで応募されたのですか

私はもともと文章を書くことが好きで、中高一貫の女子校でごく普通の高校生活を送りながらも、「自分の好きなことで何か形を残したい」という思いを持っていました。インターネットで本コンテストを知り、過去の受賞作品を読んで、「私も自分の考えを文章に表現してみたい」と思ったのです。テーマには「子供が社会にもっと興味を持つにはどうしたら良いか」という問題意識をベースに、「小・中学生向けの週刊誌を作る」という提案をまとめました。

— 論文発表会や表彰式などに参加して、いかがでしたか

論文発表会でプレゼンやディスカッションを初めて経験し、大きな刺激を受けました。特に、NRI社員の皆さんや受賞者であるOB・OGの方とのディスカッションでは、論文の内容について鋭く質問されたり、いろいろな意見をいただいて、自分の視野の狭さや考えの甘さに気づかされました。そのディスカッションで同じグループにいた、受賞OBの慶應義塾大学SFC(湘南藤沢キャンパス)の大学院生の方に、「社会に対する子供の興味を全体的に上げていくには、やはり教育が大事」と指摘されました。論文発表会の後しばらくして、その方が研究で参加している『よのなか科』という中学生対象の対話型授業を見学させてもらい、大変興味を持ちました。

— 受賞がきっかけになって行動が広がっていったのですか

行動的な自分に変わっていったと思います。その後も『高校生新聞』の高校生記者として活動したり、世代を越えた対

話活動を行っている『こどなひろば』という高校生主催の学生団体にも参加しました。進路については慶應SFCに強く魅かれ、AO入試に挑戦して合格することができました。

— 大学に入学されて、1年目はどんな年でしたか

実は、去年は友人の薦めで『ミス慶應SFCコンテスト』にエントリーし、ファイナリストに選ばれるという経験をしました。学外の大きいイベントにも参加して忙しい日々を送りましたが、新しい世界を垣間見ることができて、楽しかったです。最近改めて感じているのは、慶應SFCは自分から行動を起こして求めて行かなくては何も得られないところだ、ということです。4月からは2年生になりますので、まず勉強の面では自分の関心を掘り下げて、ゼミも決めたいと思っています。また、所属しているサークル「慶應アナウンス局」で幹部を務める予定なので、そちらも頑張っていくつもりです。

— 最後に、現役高校生にメッセージをいただけますか

私はこの「NRI学生小論文コンテスト」に応募したことで、いろいろな方との出会いやチャンスに恵まれ、自分では思ってもいなかった方向へ自分が変わっていくきっかけを得ました。論文を書くことで、「考えることの大切さ」を感じるとともに、「考えても分からないことがたくさんある」ことにも気づかされましたし、その「分からないことを知りたい」という思いが、次の行動につながって行ったと思います。皆さんも、今の自分の精一杯の力を「考える」ことに注いで、ぜひ応募してみてください。

NRI学生小論文コンテスト
受賞OB・OGインタビュー

「NRI学生小論文コンテストに入賞して」

高 校 生 の 部

高校生の部 テーマ

世界に向けて未来を提案しよう！

創りたい未来社会 あなたの夢とこだわり

世界はいつもさまざまな課題を抱えています。

先人たちはこうした課題の解決にチャレンジし、科学・技術だけでなく、社会制度、芸術文化、教育スポーツなどの分野でイノベーションを起こして、よりよい社会の実現に貢献してきました。

先人たちのこうした偉業は、多くの人たちの協力によって実現していますが、その発端はひとりの、あるいはほんの少数の人たちの想いや創意工夫から始まったものが少なくありません。

「こういう社会が実現できたら…」、「こんなことが可能になったら…」など、夢を描き、それを実現するための強いこだわりを持ち続け、行動することが、社会の発展や世界を変えることにつながっているのです。

さて、あなたには、現在の日本や世界がどのように見えていますか。

あなたは、未来に向けてどのような夢を描きますか。

また、どのような“こだわり”を持って、その夢を実現したいと思いますか。

NRIは、あなたが夢とこだわりを持ち続けることが、よりよい未来社会を創る原動力になると信じています。

あなたの経験や体験に基づく強い想いや、常識にとらわれない柔軟な発想を元にした論文の応募をお待ちしています。



大賞 [高校生の部]

戦争や貧困に苦しむ海外の同世代の子どもたちを救いたいという、筆者のこだわりや強い思い、課題意識の掘り下げ、提案の具体性・実効性が高い評価につながりました。

さくらんぼネットワークの構築

——世界を救い、日本を変える

神戸朝鮮高級学校2年

韓 大鏞 はん てよん

私の創りたい未来社会は、世界をリードする元気で活力に満ちた日本である。

日本の最も深刻な問題は超高齢社会化であり、少子化である。就業年齢に当たる人口の減少は経済発展を妨げるだけではない。いつの時代でも若者たちが新しい文化を創造し、よりよい社会を創るために身を挺して戦ってきた。若者たちが生き生きと活躍できる社会は、高齢者も幸せに暮らせる社会である。しかし、日本の若者の数を今すぐ増加させることは不可能であり、手品のように出生率を高めることは難しいであろう。

私の提案は「さくらんぼネットワーク」の構築である。これは13歳から17歳、日本の学齢でいうと中高生にあたる若者たちを世界中から日本に呼び、勉強してもらおうというものだ。

文部科学省は2008年に、2020年を目途に30万人の留学生受け入れを目指すとしている¹⁾。留学生というのは、おおむね18歳以上を指し、彼らは日本で高等教育を受けることを目的としている。

私は、ここで新しい発想を提言したい。それは世界の13歳から17歳の10代半ばの若者たちに、日本で教育を受けてもらおうというものだ。日本は少子化による若者の数の減少で悩んでいる。しかし、世界に目を向けると、貧しさや戦乱で、学校にも通えない子供たちが数多く存在する。今日の命が保障されない社会で、明日の食事の心配をしなくてはならない子供たちを、日本が救おうというのが第一の目的である。日本国憲法の前文には、「われらは平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する」と明記されている。私はこのように素晴らしい憲法を持っている日本人が羨ましい。

今朝の新聞でも、パレスチナのガザで何の罪もない子供たち

が命を落としていると報道されている。アジアやアフリカでは多くの子どもたちが重労働を強いられている。今こそ日本が「国際社会において名誉ある地位」を占める時であろう。69年間、平和を守りぬいてきた日本であるからこそできるのが、この「さくらんぼ計画」である。

現在、日本には「さくらネットワーク」というものがある。これは国際交流基金が海外日本語教育拠点の整備拡充を実現するため、世界各国の中核的な日本語教育機関を構成メンバーとしたものであり、2011年8月現在、43カ国116拠点で展開している²⁾。現在、日本の国際協力NGOは400以上あるといわれ、世界100カ国以上で活躍しているという。そのほとんどの組織で子どもたちへの教育支援が行われている。このNGOやNPOを「さくらんぼネットワーク」で繋いでいくのだ。現地に学校を建て、給食を配り、学用品を与えるというサポートは必須である。しかし、13歳ぐらいになると学校を終え、そのまま社会に出るしかないという子供たちが圧倒的多数である。読み書きを教えることは、子供たちの生きる力の源である。しかし、そこで教育支援を終えてしまうのは、あまりにも惜しい。

まず、各NGOやNPOの協力を得て、世界各地から日本で学ぶ希望者を募る。いろいろな国で、さまざまな事情を抱えた子供たちを選別することは、非常に難しいことである。まず、命の危機から救うこと。そして、残された家族にも納得してもらい、新しい未来を創るためにさくらんぼたちを日本に呼ぶ。さくらんぼたちの労働による収入が生活に不可欠であるという場合は少なくないであろう。さくらんぼたちは、日本でも学びながら簡単な労働(アルバイト)に従事する。その報酬の一部を家族に送金できるようにすれば、残された家族には大きな助けとなる。

各地で集められたさくらんぼたちを、日本ではボランティアで募った家庭で受け入れる。そして中学校と高校の各学年に1クラスずつ「さくらんぼ組」を設け、ここでは1年間で日本語を習

得することを目標とした授業を行う。今、日本全国の公立の中学や高校では、空き教室が毎年のように増加している。生徒数の減少で悩んでいる学校を優先して、さくらんぼたちを学ばせるようにすることが望ましい。13歳から17歳までの若者たちがひとクラス増えただけでも、学校はもちろん、その地域の雰囲気も大きく変わることは間違いないであろう。

学校では、1年間の日本語教育を柱とした授業を中心に、学校行事や部活動にも日本人の生徒と全く同じように参加させていく。このぐらいの年齢になると、日本人生徒や外国人生徒の考え方の中にも、言われのない先入観や偏見などがあることが考えられる。まだその芽が小さいうちに摘むには、同じ学校で共に学び、歌い、汗を流すことが最も効果的だ。私自身、在日コリアン3世として、たくさんの日本の友人と親しくなれたのは、バスケットボールのおかげだと確信している。知らないことが不安を生み、不安が偏見を育てるのだ。そして、さくらんぼたちは2年目から日本人生徒と同じクラスで学ぶようにする。

さくらんぼたちと仲良くなった日本人の子どもたちは、家庭に戻り、家族に彼らのことを伝えるであろう。ホームステイ先の大人たちも、彼らと共に生活することで貴重なものを得ることができる。寂しかった夕食時にも笑いが起こり、誰もいなかった部屋にも灯りがともる。さくらんぼたちは、故国と日本に2つの家族ができることになる。そして、中学と高校の学区が中心となり、若者がいなかった町にも賑わいが戻る。人手不足で悩んでいた店舗には、さくらんぼたちがアルバイトとして元気に勤めることにより、活気が生まれるであろう。部員不足で試合ができないような部活も、さくらんぼたちの入部により、どんどん試合に出場することができるようになる。17歳になり、高校卒業を控えたさくらんぼたちは、故郷に帰るか、日本で就職するか、進学するかを選べるようになる。故郷に戻ったさくらんぼたちには、日本で学んだ日本語の力を地元で発揮し、次の新しいさくらんぼたちが日本に渡るまでのサポーターとして活動してもらおう。日本に残る場合には、彼らが自由に働けるような資格を与える。日本語が自由に操れるようになった10代の若者たちの増加は、日本経済を飛躍的に発展させることが予想される。日本の社会に出たさくらんぼたちは、会社や工場、商店で、そして農園や漁場で、逞しく働くことであろう。さくらんぼたちの最も大きな特徴は、彼らが日本語を話せるということである。

ことばが正しく通じてこそ、お互いの考えや気持ちが理解でき、お互いを思いやれるのである。さくらんぼたちは、日本語ができるだけではない。同じ年代の日本人の子どもたちと、同じ空間で、同じ時間を過ごした「ともだち」であり「なかま」でもある。10代の多感な時期を共に過ごした経験は何物にも代えがたい連帯感を生む。これは、この後、何年、何十年経っても、深まりこそすれ決してなくなることはない貴重な宝物となる。そして、

さくらんぼたちと共に育った日本人の若者たちは、それ以前の世代とは、明らかに違ったグローバルな視野を持った日本人として社会を担っていくであろう。

参考文献

- 1) 文部科学省ホームページ「留学生30万人計画」骨子の策定について
- 2) 文部科学省「留学生30万人計画の進捗状況について」平成23年8月現在

[受賞者インタビュー]

**考えを論文に
まとめることができたこと、
受賞できたことが嬉しい**



——コンテストに応募したきっかけは？

学校の掲示版に貼り出されていた募集ポスターを見て、担当の先生にチャレンジしてみたいと伝えました。

——論文を書き上げるまでにどのくらいの時間がかかりましたか？

夏休みに、バスケ部の部活の前後の時間を使って、うんうん唸りながら書きました。

——この論文を書いたことで良かったことは？

今まで「こうなればいいのに」と頭の中で思っていたことを小論文という形にできたことが、何よりの喜びです。大きな賞をいただき、いつも迷惑ばかりかけている母に少しは恩返しができたかなと思います。

——今、どんなことをしている時間が楽しいですか？

今まで以上に本を読むことが好きになりました。今まで興味がなかった政治や経済をテーマにした本も読むようになりました。表彰式で審査委員の方々がお話しされていた、「人生が変わるかもしれない」コンテストだという言葉が耳から離れません。



優秀賞 [高校生の部] 東南アジアの自然破壊問題と日本の里山保全の仕組み「アグロフォレストリー」を結び付けた視点が、グローバルで独創的。論文としての完成度の高さも評価されました。

「アグロフォレストリー」 ——日本と東南アジアの掛け橋

宮城県宮城野高等学校 2年

菅野 康弘 かの やすひろ

「83%」この数値は何を示しているのか？

これは、東南アジア全体の熱帯林焼失面積がアジア・太平洋地域全体の熱帯林焼失面積に占める割合である。この数値を調べた理由は、学校の授業で世界の森林事情について触れた際に興味を持ったからだ。調べる前は、地球温暖化・熱帯林の減少というと、砂漠化やアマゾン川流域の問題という印象が強かった。しかし、世界の裏側でなく、もっと身近な所で、自分が想像していた以上に大きな影響を与えていることに驚いた。それと同時に「東南アジアの森林破壊の進行を止めなければならない」と強く思った。そこで、自然を利用しながら、自然を残す形の社会、つまり「環境を保全し、人と共生できる社会」を、私の考える創りたい未来社会として提案したい。

東南アジアの現状と未来、そして課題とは

まず、東南アジアの現状として、各国の森林面積が年間約1～3%ずつ減少していることが挙げられる¹⁾。森林が減少する理由は様々だが、主なものとしては土地利用の変換、燃料木材の過剰な摂取、違法伐採が挙げられる。このような森林伐採が起こる原因は、資本主義に則った「目先の利益」を優先するからである。この現状が今後どう変化していくのか推測してみると、現在と同様に森林面積が年率約1～3%減少することにとどまらず、大幅な人口増加により更に土地や資源が必要となり、森林面積の減少に拍車がかかる可能性が高いと推測できる。これが現段階での東南アジアの環境における問題点であると私は考える。

問題解決とアグロフォレストリー

では、問題解決のためには何をしたらよいかと考えていた時、私は日本の里山保全の仕組みである「アグロフォレストリー」という言葉に出会った。「アグロフォレストリー」とは、環境省のホームページによると、「1つの土地から林産物も農産物も、さ

らには畜産物も水産物も収穫しようとする、複合的な土地利用の一形態である」と定義されている。現在、日本の里山の保全活動は里山に農地を作り、農産物と林産物と水産物を収穫する形である。この仕組みが最も自分の考えた未来社会に近い形の仕組みであるように思え、この仕組みを活用することで、東南アジアの森林問題を解決できるのではないかと考えた。

問題解決の方法として「アグロフォレストリー」を採用した理由は3つある。1つ目は、複合的な土地利用形態により、様々な収穫物が得られるため、天候不良などによる凶作のリスクが分散し、1年を通して収入を得る安定性が増すからだ。2つ目は、東南アジアの熱帯林の生物種の多様性を保全することができること。3つ目は熱帯地域の日照時間や気温、水といった第1次産業を活性化させる条件を満たしていることが挙げられる。つまり、環境に配慮した森林保全と地域の人々の豊かな生活の両立が可能だが、その理由である。

理想的に思えるこの「アグロフォレストリー」だが、実現するためには大きな課題を解決しなければならない。それは、東南アジアの土地が過剰な伐採などの影響により、すでに荒廃していることだ。現在、東南アジアの第1次産業は、単一の品種を多量に育て輸出するプランテーションを主流としている。その中には木材も該当し、成長の早い品種ばかりを育て、「目先の利益」を得ようとしている。そのため、木材を収穫することに精一杯で土地の回復にまで手が回らず、土地はやせていくばかりである。「東南アジアの森林減少の要因と進む対策」（榎尾昌秀 著／FAOアジア・太平洋地域森林資源官）によれば、このような土地を再生させるためには木片やおがくずを土にばらまき、腐敗を進行させ、栄養価の高い腐葉土にする方法が発見されているが、現地でそれらの材料すべてをまかなうのは難しい。

では、どうしたらよいかと考えた時、ふと、日本の里山の風景が思い浮かんだ。少し前まで日本の里山は、豊かな土壌と清らかな水流に適度な人の手が加わって、美しい景観が保たれ、多

くの日本人の原風景となっていた。しかし、現在その里山は過疎化によって美しい姿を維持することが難しくなり、荒廃した土地となっているところが多く、今後更に多くの里山が荒廃していくことが懸念されている。里山を美しく維持するためには、適切な間伐などを行う必要があるが、日本ではその間伐材を使う用途も、間伐を行う人材もないため、そのまま放置されているのが現状だと聞いた。その放置されている間伐材を、腐葉土を作るための木片やおがくずに使わない手はない。日本と東南アジアに掛け橋を渡すことで、日本の美しい里山が、東南アジアの美しい自然が蘇るのではないかと、私はそう考えた。

以下、私の考えた掛け橋の仕組みを説明する。まず、現在過疎化している日本の里山に、東南アジアで農業・林業に従事する人材を研修生として受け入れる。彼らには日本で農業・林業に従事する傍ら、里山の整備として間伐を行い、その木材を木材チップに加工してもらう。次に、彼らの作った木材チップを東南アジアに送り、現地の荒廃した土地にばらまき、腐葉土を作る。そうすることで、「アグロフォレストリー」の形態に適した土壌を再構築していく、というものだ。

この仕組みが実現すれば、日本の里山が再び整備され、美しい景観が保たれるだけでなく、農作物の生産効率も向上する。また、里山に人口が増えることで地域の活性化にもつながるだろう。対して、東南アジアの国々では、無償で豊かな土壌を手に入れられるだけでなく、農業・林業の研修も積むことができると考えた。

残された問題点と私の夢とこだわり

当然のことだが、「アグロフォレストリー」導入のための障害はこれだけではない。第1次産業であるため、そして自然を相手に計画を進めていくため、時間がかかってしまったり、天候に左右されてうまくいかなかったりすることや、発展途上国なので技術が発達してなくて急速な改革ができないということもある。さらに、その荒廃した土地にも、所有権・利用権・土地の税金が存在することも忘れてはならない。このような障害が存在するのも確かだ。だが、それらを解決または軽減する方法を私は知っている。

それは、地方公共団体とNPO・NGOがタッグを組んで、里山を保全しようというものだ。自然を守るという誰かが我慢を強いられるという印象が強いが、私は自然人も皆が豊かになれること、これにこだわりたい。そして、私は将来この活動に参加したいと考えている。そこで私は「東南アジアの森林を保全する団体」を立ち上げ、有志を募り、現地へ赴き、東南アジアの荒れた土地を「アグロフォレストリー」に適した豊かな土壌に作り変えるプログラムを推進する仲介人になりたい。

私は、「アグロフォレストリー」には高度な科学文明に裏打ちされた大量生産・大量消費の資本主義経済システムの中に生き

る先進国の人々とは少し異なった、新しい豊かさを実現する可能性があると考え、新たな豊かさの価値を見出すことができると思っています。

文中注

1) 梶尾昌秀 (FAOアジア・太平洋地域森林資源官) 「東南アジアの森林減少の要因と進む対策」

<http://www.gef.or.jp/forest/kashio.htm>

参考文献

・ 環境省 自然環境局自然環境計画課ホームページ「国際的な森林保全対策」

http://www.env.go.jp/nature/shinrin/index_1_2.html

・ 丸山聡司「アジアの熱帯林破壊と日本の関係」、敬和学園大学「VERITAS」学生論文・レポート集 第8号、2001年7月

[受賞者インタビュー]

**本を読んで
もっと知識を蓄え、
自分の興味・関心を
広げていきたい**



——コンテストに応募したきっかけは？

昨年も応募しましたが、入賞することすらできず悔しい思いをしました。今年こそはリベンジしたいと思い、応募しました。

——論文を書き上げるまでにどのくらいの期間がかかりましたか？

約1カ月半です。夏休み前に「創りたい未来社会」を考え始め、夏休みに小論文の草案を作り、8月下旬に修正しました。

——この論文を書いたことで良かったことは？

たくさんの書籍を読んで、知識が蓄えられたことです。今までの日常生活の中で、自然現象や森林破壊についての本を読む機会が少なかったので、自分の興味・関心事が増えました。

——今、どんなことに興味を持っていますか？ どんなことをしている時間が楽しいですか？

「環境工学」という学問で、自然現象が我々の生活にどんな影響を与えているかを調べることです。知識が蓄えられていく感覚が心地良いので、読書をしている時間が好きです。



優秀賞 [高校生の部] 今日で切実な社会問題に真向から取り組んだ、勇気ある提案。解決策の実効性、子どもの笑顔が溢れる社会を作るといふ筆者のこだわりや強い思いが共感を集めました。

子どもの笑顔が溢れる社会

—— ネットいじめ解決への提案

大阪府立佐野高等学校 3年

谷口 今日子 たにぐち きょうこ

「笑ってあげなさい。笑いたくなくても笑うのよ。笑顔が人間に必要なの」

これは、カトリック教会の修道女であるマザー・テレサの言葉だが、彼女は笑顔を作ることで世界が変わると考えた。彼女の言う、世界を変えるといった大きな話ではなくとも、笑顔には様々な効果がある。笑顔でいることで副交感神経が活発化してリラックスした状態を保つことができたり、良好な人間関係を築いたりすることにも役立つ。つまり、笑顔は人々の生活を豊かにする源である。

しかし、様々な理由から、笑いたいけれども笑うことができない人もいる。例えば、その理由の1つが「いじめ」である。私も小学生の時は、いじめに苦しむ子どもの1人だった。仲の良かった友達から無視され、私に話しかけてくれる友達はなくなり、私物がトイレに投げ捨てられていたり、私の席がなくなっていたりということが日常茶飯事のように行われた。両親や担任の先生に言うことも出来ず、耐え凌ぐことしかできなかったが、そんな私に気づいてくれて手を差し伸べてくれる先生がいた。その先生が「よく頑張ったね」と、笑顔で声をかけてくれた時は涙が止まらなかったが、先生の笑顔は私の心を穏やかにさせ、いじめに立ち向かう勇気を与えてくれた。同時にその時私は、この先生のような教師となって、同じようにいじめに苦しむ子どもたちを助け、そして子どもたちを笑顔にできる存在となり、笑顔の大切さを伝えていきたいと強く思ったことを覚えている。

現代の教育現場でも、いじめ問題はとても深刻なものとなっている。近年では、スマートフォンの普及等もあり、インターネット上で行われる「ネットいじめ」というものが急速に増加してきた。ネットいじめは、ネット世界がいかに作られたものであっても、架空の世界では終わらず、リアル世界と必ず接点を持っており、そのことを子どもたちもよく知っているの、ネットいじめには逃げ場がないと言われる¹⁾。

中でも、日本で約5,000万人が利用しているLINEを用いたいじめ事件の報道が目につき、深刻化していることがうかがえる。友達同士でメッセージや写真などを気軽にやり取りできる便利なものである一方、1人だけメッセージを読めないように設定したり、メッセージをすぐに読んで返信しないと既読無視と言われて仲間外れにされたりするが、加害者本人は相手の顔が見えずボタン1つで簡単にできるので、悪いことであるという認識が甘かったり、外部から閲覧できないように制限されたりするために、見えないところでネットいじめが増加しているのが現状である。

こうした状況に対して国は、携帯電話の学校への持ち込み禁止を提案したり、フィルタリングサービスをつけることを義務化したり、解決に向けて取り組みを行ってはいるが、その程度でネットいじめがなくなり、苦しんでいる子どもたちを笑顔にすることができるとは到底思えない。文部科学省も「ネット上のいじめに関する対応マニュアル・事例集(学校・教員向け)【概要】」を平成20年1月に出しているが、その後新たに出てきたネットいじめの内容には対応できておらず、十分なものとは言えない²⁾。

では、こうした状況の中、どのようにすればネットいじめをなくし、ネットいじめに苦しむ子どもたちを笑顔にすることができるだろうか。私はこの解決策として2点提案したい。

1点目は、これまでも業者に委託して、インターネット上でいじめの発端となりそうなことをいち早く見つけ、子どもたちがトラブルに巻き込まれるのを未然に防ぐネットパトロールが実施されてきたが、「教師によるネットパトロール」を実施するということである。先生方の中には、「自分はTwitterやLINEは使わないからわからない」と仰る人もいるが、子どもが利用しているものを知らずに子どもをネットいじめから救うことはできないはずだ。そのために、各都道府県・市町村の教育委員会には予算を組んでもらい、先生方全てにTwitter等の利用方法や特徴について

学んでもらう。さらには、ネットパトロールを仕事としている企業から講師を招き、ネットパトロールのノウハウを身につけてもらう。このようにして教師自らがネットいじめに気を配ることで、気付けることが増えると考えられ、また、教師の目が及ぶという危機感が子どものいじめ行為への抑止力となることが期待される。

2点目は、教育カリキュラムの中に、必修科目として「コミュニケーション」という授業を導入することである。ネットいじめはインターネットを媒介にしていじめ行為が行われるが、そのインターネットを使用する私達のコミュニケーション能力の不足も大きな要因と考えられる。近年、若者のコミュニケーション能力が低下していると言われ、対面してのコミュニケーションもままならない人がいる中で、インターネット上の書き言葉の文字情報から相手の気持ちを推し量ったり、あるいは相手の立場で物事を考えたりするというのは難しいことなのかもしれない。言葉はすごい道具で、人を喜ばせたり怒らせたり様々な働きをするが、書き言葉の文字情報だけで正確に意思を伝えることは至難であり、これはコミュニケーションという点では弱点である³⁾。そこでこの授業では、互いに顔を合わせて自己紹介をするといった簡単なコミュニケーションから始め、LINE等の書き言葉の文字情報から情報を読み解く場合と対面して情報を読み解く場合とでは、内容の理解に差があることを実感する等といった体験型の授業形式を取る。必修科目とすることで全学校が行うことになるため、近くの学校と連携して、例えば各学校の生徒が混じったグループを作成し、実際に顔を合わせてコミュニケーションを取りながらネットいじめをテーマに設定してグループ発表を行うことで、見知らぬ人と上手にコミュニケーションを取っていく術を学ぶことができ、また、ネットいじめについての知識を得るといった効果も期待できる。

これらの提案は、勿論社会の仕組みを変えていかなければ実現することはできない。しかし、それが可能となった時に私自身がこうした提案を実行できるよう、高校卒業後、私は情報学や心理学、教育学等を総合的に学べる大学に進学し、インターネットに関する豊富な知識とスキルを身につけ、大学卒業後は教師として学校現場でネットいじめに苦しむ子どもたちを救い、その子どもたちを笑顔にしてあげたい。

子どもの笑顔が溢れる社会を創ることができれば、その子どもが成長して大人になった時、きっとその社会もまた笑顔が溢れる社会になっているのではないだろうか。これからの子ども、そして、いつか母となり自分の子どもが過ごす社会がそうした笑顔が溢れる社会となるように、私はこれから夢に向かって一歩一歩努力していく。

参考文献

- 1) 加納寛子「リゾーム的に増殖するネットいじめ」『現代のエスプリ』第492号 pp.40-53、至文堂、2008年
- 2) 文部科学省「ネット上のいじめ」に関する対応マニュアル・事例集(学校・教員向け)【概要】、2008年
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/11/08111701/001.pdf
- 3) 赤堀侃司「学校における情報モラル教育のあり方」『児童心理』2008年10月号臨時増刊 pp.114-119、金子書房

[受賞者インタビュー]

**論文を書いて
応募したことで、
過去の経験を越えて
強くなった**



—— コンテストに応募したきっかけは？

学校の先生に勧めていただきました。大学ではレポートや論文を書く機会が増えるので、その練習と思い、応募することにしました。

—— 論文を書き上げるまでにどのくらいの時間がかかりましたか？

先生に添削指導していただいた時間も含めると、完成まで1～2週間ほどかかりました。

—— この論文を書く上で苦労したことは？

2,500字程度という長い文章を書くことに慣れておらず、読み手に強く印象を残せるような文章を考えるということもほとんど経験のないことで、とても苦労しました。

—— この論文を書いたことで良かったことは？

自分が過去にいじめに遭っていたという経験を晒すことはとてもためらいましたが、そのためらいを越えて、こうして論文を書いて発表できたことは、今までの自分より強くなった気がして良かったです。

—— 今、どんなことをしている時間が楽しいですか？

小説を読むことが自分の今の楽しみです。本を読むことで自分の知識を増やすことができますし、小説を読み、その物語に没頭している時が一番楽しいと感じます。



特別審査委員賞 [高校生の部]

【世界-World-】の授業を世界規模で行うという発想は、雄大で夢があり、カリキュラムの具体性も併せて、未来への提案として非常に魅力的であるとして審査委員の心をつかみました。

世界中の子供たちがつながっていく

佐賀県立武雄高等学校 2年

野田 かれん のだ かれん

「グローバル化しよう」と日本では最近多く言われていますが、日本にはその体制が整っているのでしょうか。日本社会がどんどん国際的になっていく中で、私たちは本当に「国際化」を理解しているのでしょうか。私が気になったのは日本人と外国人の関係です。

私は今年の7月までドイツに1年間語学留学をしていました。そこで体験したのはアジア人とヨーロッパ人という人種の違いです。私はあらゆる面で外国人であるという扱いを受けました。それ以来、私は外国人という言葉の意味と差別についてより深く考えるようになりました。差別といっても種類はたくさんあります。肌の色で人を差別する。最近のニュースで白人の警察官が黒人の容疑者を射殺したことが大きな問題になるのも、差別に一因があります。また、世界規模で話をすると言語、文化や宗教など、違いはとても多く、差別も多く見つかるでしょう。

私は、人が差別をしてしまう原因は無知ではないかと考えました。その理由となったのが、私のヨーロッパでの体験です。街に行くと、私は日本人ではなくアジア人として見られます。そしてすれ違いざまに「中国は最悪の国だ」「アジアは貧乏だ」などの言葉を投げかけられました。これは明らかにアジアに対する偏見です。中国を例に挙げると、経済成長率は世界でもトップであり、工業技術、芸術の面でも世界的にレベルが高く、私たちの身の回りには中国から来たものが多くあります。また、日本にとってとても大切な存在であり、中国という国がなくては日本が成り立ちません。

無知が原因で偏見をするのなら、知ってもらえばいいのです。そこで私は教育に視点を置きました。現在の日本では、外国の事情を勉強する教科として地理と世界史があります。しかし、私たちは主にテストや入試のために勉強しており、これでは現在の世界を理解するというのは難しいでしょう。

そこで私が提案する解決策は、【世界-World-】の授業を行

うことです。小学1年生から高校2年生までの11年間、週に1時間行います。地理や世界史など、従来の授業では知ることのできない本当の世界を知り、世界中と関係を作る授業です。例えば、音楽を例に挙げてみると、各地域の伝統楽器、民謡などは音楽の授業で多少習いますが、いつ、誰が、どこで、何の目的で演奏するのか、専用の楽譜はあるのかなど、みんなが素朴に疑問に思うことは詳しく習いません。このような疑問や関心を、食生活、気候、季節のイベント、言葉、文化や生活の様子、習慣など自分たちが実際に知りたいこと、体験してみたいことをテーマに設定して、生徒に自主的に活動してもらいます。

なぜ今までこのような授業がなかったのでしょうか。グローバル化の大切さが広く謳われている現在、私はこの必要性を大きく感じます。この授業をするための教科書やワークブックを作るのは、確かに簡単ではないでしょう。しかし、時代は変わっています。タブレット端末や電子黒板などのインターネット環境が、学校の教室にも普及し始めています。インターネットは世界中を結びつける重要かつ簡単な手段となりました。こういった技術が進むことによって、世界に関心を持つきっかけと少しの英語力さえあれば、世界中から多くの情報を入手することが可能であり、さらに情報を瞬時に交換することも可能となります。こういった環境での教科書の必要性は今ほど重要ではなく、生徒たちが自分自身でそれぞれのテーマで活動を行うというように、自分たちでいろいろ調べながら進めていくことができます。

私はこの【世界-World-】の授業で、生徒の自主性も伸ばしていきたいと思いました。小学校低学年ではまず、世界にどんな国があるのかを知ることから始まります。言葉や気候の違いについて先生に授業をしてもらうところは従来と同じです。ただし、新しいことを学び始める際には必ず生徒に答えを想像してもらい、自分で考えてみることを重視します。テーマが終わるごとに、全員が自分たちのグループで作ったポスターなどを使って考えをみ

んなの前で発表することによって、小さいときから人前で自分の意見を伝える楽しさや積極性を身に付けることもできるのではないのでしょうか。

小学校高学年では、外国語には英語以外にもあるのか、見た目の違いはどうして起こるのか、どの地域にどういった特徴があるのかなど、低学年の時よりもさらに具体的に学んでそれぞれが発表します。また、グループに分かれ、1つの国について調べ、最後の発表会にはその国の人になりきってもらい、ほかの生徒と接する活動を考えました。先生にも1人で発表してもらい、生徒から評価してもらうのも面白いでしょう。中学1年生では世界情勢などを自分たちで調べ学習をし、発表し合っただけで現在の世界や社会についての知識を深め、次の学年からの交流プログラムに向けた生徒同士のシミュレーションを行います。

授業の最終段階は、中学校2年生から高校2年生までの4年間で行う、世界各国との交流プログラムです。4、5人のグループを作り、1カ月間である国の1学校の1グループとプログラムを共同で行っていきます。同じクラスのメンバーでも、それぞれのグループによって違う国の人とつながりながら活動をしていくことになります。1カ月ごとにクラス発表会を行い、自分たちがその1カ月間で活動したことをお互いに学び合います。40人を1クラスと考えると、1カ月で8カ国(学校)、1年(約10カ月)で80カ国、単純計算で行くと4年間で320カ国の世界中にいる中学2年生から高校2年生に当たる年代の人とともに学べるということです。このプログラムの目標は、交流をするグループ同士での相互理解を深め、生徒同士の交友関係にもつながることで、どこかの国に自分と同世代の友達ができるという期待が授業に対するやる気にもつながることです。

交流テーマはそれぞれのグループで話し合っただけで決めてもらい、テレビ電話などを使ってオンラインでまずは自分の国に関するプレゼンテーションをし、共通のテーマに対するディベートなどを行います。小学校の時から経験がここで活かってくるのです。また、授業以外でもメールでの意見交換や個人的な交流などを行うことによって、英語力の向上や世界中の人とつながっているというリアルな交友関係は、時間が経つにつれどんどん増えていきます。知り合いがいることやこれまでの知識により、差別や偏見の芽は減っていくでしょう。

このプログラムを実行するには、国連やユネスコなどの機関の協力も必要です。言葉の壁はもちろん出てくるでしょう。授業中に話し合いをするときは、よりスムーズにするためにNGOを新しく設立し、グローバル企業からの支援といった形で通訳派遣をしていただいたり、Googleに最先端の自動翻訳を依頼して、各学校の電子機器に無償か格安の値段で提供してもらえ、可能性もあります。テレビ電話などの世界をつなげるオンライン技術は、マイクロソフトやAppleといった世界的にも大手の会

社に交渉し、ディベート用のテレビ電話機能などの開発も依頼してみたいかかでしょうか。

それで問題がすべて解決するのかどうかは断言することができません。しかし、小さいことを少しずつ時間かけて積み上げていくことによって、世界は変わっていくと信じています。

[受賞者インタビュー]

互いを知らないことから
偏見は生じる
ドイツに留学して
感じたこととまとめた



——コンテストに応募した理由、きっかけは？

留学から帰ってきた私に、先生が「書いてみないか」と勧めてくださいました。

——論文を書き上げるまでにどのくらいの時間がかかりましたか？

構成を考える段階からだと、約1週間です。

——この論文を書く上で苦労したことは？

3,000字という字数制限にとっても苦労しました。

——この論文を書いたことで良かったことはありますか？

自分の考えを明確に文字として表すことができ、また、受賞して多くの方と知り合えたことがとても良かったです。

——今、どんなことに興味を持っていますか？ どんなことをしている時間が楽しいですか？

医療、国際社会、外国語に今はとても関心があります。部活動(吹奏楽)をしている時間がとても楽しいです。

NRI 学生小論文コンテスト2014

募集告知から審査、 そして表彰まで

厳正な審査を経て、決定される入賞論文

入賞論文は、予備審査→1次審査→2次審査→最終審査会というステップを経て、決定しています。

予備審査—まず事務局が、応募論文すべてについて、応募基準をクリアしているか審査しました。

1次審査—NRIグループの社員128名が、手分けをして審査。その結果、評価の高かった論文24本（大学生の部：8、留学生の部：6、高校生の部：10）が2次審査に進みました。

2次審査—審査委員10名がそれぞれ24の論文を読み、評価基準に基づいて採点、順位付けを行いました。

最終審査会—審査委員10名が集まり、最終審査を実施。長時間にわたる議論の末、10本（大学生の部：3、留学生の部：3、高校生の部4）を入賞論文として選びました。

どの段階においても、規定の評価基準に基づき、応募者の学校名、名前などの属性を秘匿したうえで、厳正に審査を行っています。また、評価が偏らないように、1つ1つの応募作品を複数の者が評価しています。

「NRI学生小論文コンテスト2014」審査ステップ

募集 2014年6月30日～9月5日 コンテストの告知活動を通じて応募を呼びかけ

予備審査 9月10日～10月17日 事務局で応募論文が応募基準を満たしているか確認

1次審査 10月18日～11月5日 NRIグループの社員128人が論文を評価、24本の論文が2次審査へ

2次審査 11月10日～11月17日 審査委員10名が24本の論文を評価

最終審査会 11月21日 審査委員が集まり、議論を経て入賞論文10本を選出

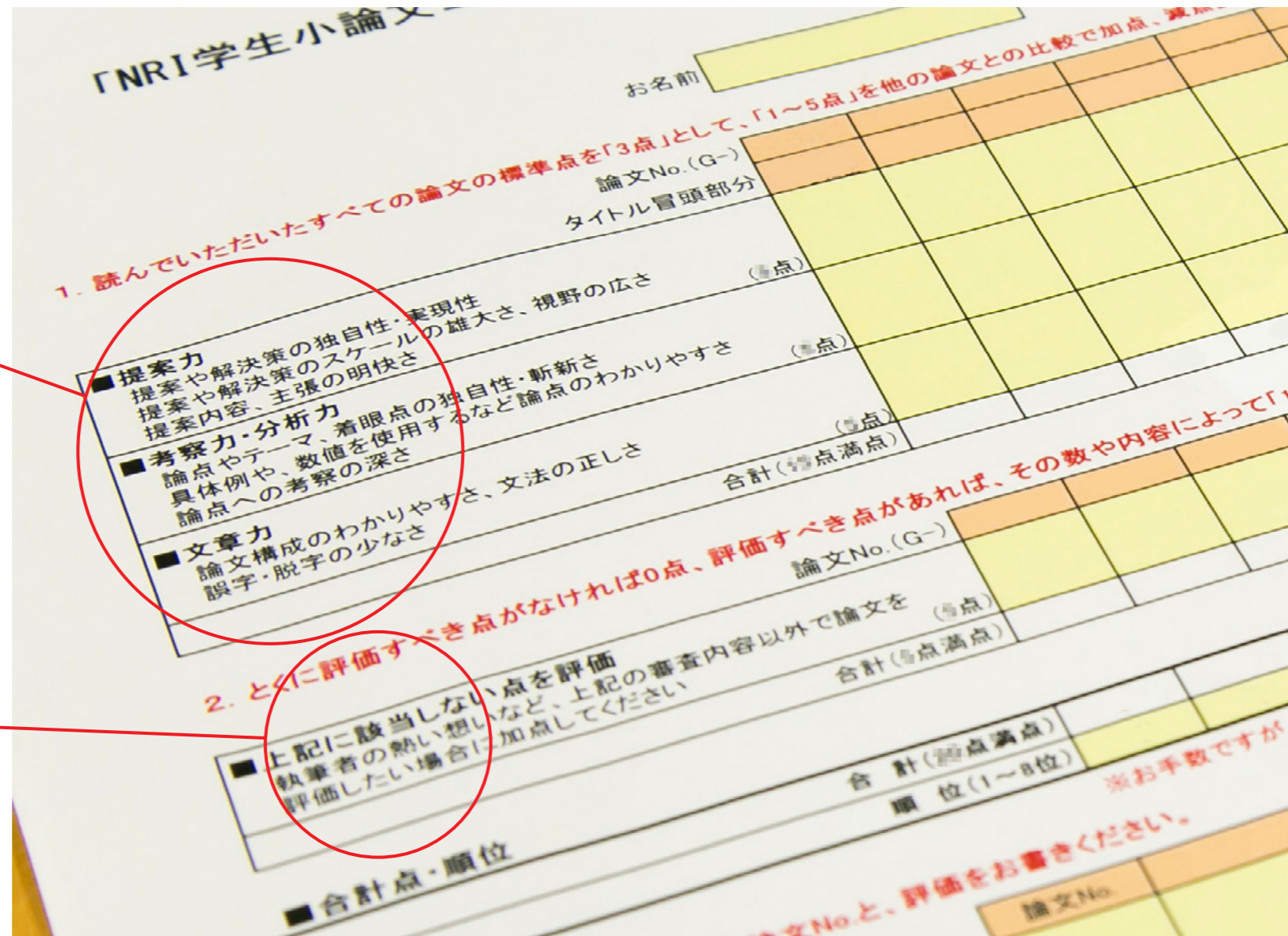
入賞論文発表 11月28日 NRIホームページにて発表

論文審査の評価基準

- テーマと論点の整合性
- 提案力
 - ・提案や解決策の独自性・実現性
 - ・提案や解決策のスケールの雄大さ、視野の広さ
 - ・提案内容、主張の明快さ
- 考察力・分析力
 - ・論点やテーマ、着眼点の独自性・斬新さ
 - ・具体例や、数値を使用するなど論点のわかりやすさ
 - ・論点への考察の深さ
- 文章力
 - ・論文構成のわかりやすさ
 - ・文法の正しさ、誤字・脱字の少なさ

評価基準以外のプラスアルファ

- 上記に該当しない点を評価
 評価基準以外の尺度においても特に評価が高い論文は、ここで加点されます（例えば、執筆者の熱い想い、独自の調査・取材の実施、など）



最終審査会

審査委員が議論を深め、 入賞論文を決定



審査委員

審査委員長

谷川 史郎 NRI 理事長

副審査委員長

椎野 孝雄 NRI 理事

特別審査委員

池上 彰 ジャーナリスト・東京工業大学教授

最相 葉月 ノンフィクションライター

審査委員

三浦 智康 執行役員 未来創発センター センター長

淀川 高喜 研究理事

中野 ひなつ 証券ソリューション事業六部 部長 兼 証券ソリューション推進四部 部長

山之内 亜由知 IT 基盤技術部 上級システムコンサルタント

野呂 直子 コーポレートコミュニケーション部 部長

横山 喜一郎 CSR 推進室 室長

NRIグループ社員による1次審査を通過したのは

24の論文(大学生の部8、留学生の部6、高校生の部10)。

2次審査には、審査委員長を務めるNRI理事長の谷川史郎をはじめとする社内審査委員に、特別審査委員の池上彰さんと最相葉月さんが加わります。

10人の審査委員は、まず各自で24の論文全てを読み、審査基準に基づいて評価、順位付けを行いました。

事務局がその結果を集約したうえで、2014年11月21日に最終審査会を開催。議論を深めながら10の入賞論文(大学生の部3、留学生の部3、高校生の部4)を選定しました。

審査委員長

谷川 史郎 NRI 理事長

今年は、自らの体験をベースにしながら、世界や日本が抱えるさまざまな問題の解決を提案する論文が多く見られました。入賞作品に共通していたのは、日本にある、まだ活用されていないリソース(資源)を問題解決のためにつないだり、人々の温かい心をうまくつなぐといった、『つなぐ』という提案であったと思います。今までにない組み合わせによる『つなぐ』取り組みが実践されれば、今よりもっと明るい未来社会が訪れるだろうと、希望を持ちました。



特別審査委員

池上 彰さん ジャーナリスト・東京工業大学教授

今年のテーマは「夢とこだわり」を問うものでした。全体のレベルは一定以上で、どれも大変読み応えがありました。期待値が高くなったがゆえの厳しい意見を申し上げるなら、「こだわり」についてはよく表現されていましたが、「夢」についてはこじんまりとまとまっている感がありました。もっと夢を語ったり、破天荒と思われるくらい大きな構想を描く力を付けてほしい。そうすれば、さらに読み応えのある論文が増えるだろうと期待しています。



特別審査委員

最相 葉月さん ノンフィクションライター

「創りたい未来社会」というテーマに対して、現在の課題の解決を図ろうとする論文がほとんどでした。私にはこれが、若い世代が夢を語らなくなっているのではなく、逆に着実に未来を見据えていることの表れだと感じられました。日本や世界の抱える現在の課題を何とかして乗り越えていかなければ、明るい未来は来ないということを、若い世代はしっかり認識しているのです。個人的な思いよりも世界に対して広く視野が開かれたものや、いじめや子育て支援といった目下の課題を取り上げたものがあった点も、頼もしく思いました。



ドキュメント最終審査会

—さまざまな「夢とこだわりの未来社会」を前に
3時間の熱い議論を展開

2014年11月21日、最終審査会で一堂に会した審査委員の約3時間にわたる白熱した議論の一部を誌上に再現します。なお、各論文の応募者の情報は一切伏せられたうえで、審査は進められています。



大学生

大学生の部

専門分野や経験に根差した、筆者の想いとこだわり

入賞候補論文 *文中での呼称

- インクルーシブ教育の実現に向けて——地域から創る、「福祉教育の日本」 *「インクルーシブ教育」
- 2025年問題に対する3つの提案——医学生から考えた日本の医療の展望 *「2025年問題」
- 小一の壁から小一の扉へ「高齢者宅による学童保育」 *「小一の壁」

※他に5つの論文が入賞候補に残りましたが、誌上では上位入賞の3論文について取り上げました。

創りたい社会への想いの強さを評価

山之内——大学生の論文は、論文としての構成は非常に立派で、よく考えて手堅くまとめられているという印象を持ちました。

中野——例年よりバラエティ豊かで、非常に楽しく読みました。

淀川——テーマが教育や医療に集中していて、問題意識や解決策があまり斬新でないと思いました。そのため、論文としての上手さで選んだ面があります。

三浦——「創りたい未来社会」というテーマなので、社会を変えたり、多くの人に関わる提案かどうかを意識して評価しました。その意味で、「小一の壁」と「2025年問題」を推したいと思います。

池上——私は「インクルーシブ教育」を最も高く評価しました。幼い頃の体験をきっかけに、あるべき社会の実現を志した情熱が感じられます。次いで「2025年問題」は、医療の現状分析に基づいて、医学生から説得力ある論文にまとめています。「小一の壁」は、高齢者による学童保育という少子高齢化問題を逆手に取った提案で、非常に具体的である点が良かったです。

椎野——「インクルーシブ教育」は、論理展開には少し甘いところがありますが、問題意識の新鮮さが光っていて、高く評価しました。

中野——私も「インクルーシブ教育」は、特に筆者の想いが強く表れていて、印象に残る論文だと思います。

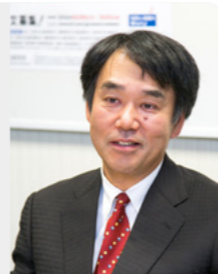
野呂——「インクルーシブ教育」は、日本が後れている障害者教育の議論を、あえて取り上げていて斬新さを感じます。地域社会を巻き込む策や、「日本を福祉国に」という想いが明確に

副審査委員長

椎野 孝雄

NRI理事

課題解決型の提案が多かったため、より豊かな世界を追求する、夢のある提案がもう少し欲しかったという印象があります。大学生・留学生の論文では、しっかりと調査を行って裏付けし、提案に結びつけるという、論文としての体裁を重視しました。



表れている点も評価したいと思いました。

山之内——私も「インクルーシブ教育」の考え方に共感しました。「小一の壁」は評価する意見も出ていますが、私は親として、人の目の行き届かない高齢者宅での学童保育に子供を預けるのは、正直言って不安があると思いました。

最相——今の意見にドキッとしましたが、私は「小一の壁」を評価したいと思います。背に腹は代えられないと言うか、働く親の中には、高齢者宅による学童保育があれば助かる人もいると思うのです。確かに犯罪面の課題はありますが、筆者もそれを想定していて安全対策もよく考察されています。高齢者の見守りにもつながる、発展性のある良い提案だと感じました。

特別審査委員賞の議論が白熱

椎野——まず、大賞について議論したいと思います。

池上——得点も最も高く、評価が高い「インクルーシブ教育」が大賞で異論はないでしょう。

椎野——そうですね。大賞は「インクルーシブ教育」に決定します。次に特別審査委員賞ですが、候補は「2025年問題」と「小一の壁」です。特別審査委員の池上さん、最相さん、いかがでしょうか。

池上——「小一の壁」は反対意見が出ているので、「2025年問題」が良いのではないのでしょうか。

山之内——私は「小一の壁」に対して先ほど反対意見を述べましたが、最相さんの「高齢者の見守りにもなる発展性のある提案」という意見を聞き、「なるほど」と思いました。安全対策がしっかりしているのならば、提案として評価できると思います。

最相——私はぜひ「小一の壁」を推したいですね。安全面を心配する審査委員の方は、表彰式のときに筆者と直接ディスカッションしてみたいかがでしょうか。

池上——では、特別審査委員賞は「小一の壁」にしましょう。

椎野——「2025年問題」は、得点から言って優秀賞で異論はないと思います。では、大学生の部の入賞論文は、大賞は「インクルーシブ教育」、優秀賞は「2025年問題」、特別審査委員賞は「小一の壁」に決定します。

審査委員

山之内 亜由知

IT基盤技術部
上級システムコンサルタント

自分の専門分野や、興味やこだわりに対する熱意がよく表れている論文が多かったと思います。その中で、世界に開かれた目線の感じられるものや、自らの行動姿勢を表現しているものを高く評価しました。



ドキュメント最終審査会
 —さまざまな「夢とこだわりの未来社会」を前に
 3時間の熱い議論を展開

留学生の部

問題意識を掘り下げ、新たな視点を提示

入賞候補論文 *文中での呼称

- 若者でつなぐ伝統産業と未来社会——人的資本の活用による伝統産業の継承 *「伝統産業」
- 良好な隣国関係を築ける社会の第一歩へ——日中青少年交流事業の強化について *「日中青少年交流事業」
- 博士活用社会の実現を目指した博士・ポストドクターの国際コミュニケーター派遣制度の提案 *「ポストドク」

※他に3つの論文が入賞候補に残りましたが、誌上では上位入賞の3論文について取り上げました。

“留学生”にとどまらない、広い視点

三浦——留学生の論文は、「視野は少々狭いが、良く書けているもの」と「視野は広いが、掘り下げが足りないもの」に分かれていた印象で、審査が難しかったです。課題設定の目線の高さ、インパクトの大きさを重視しました。

中野——留学生の論文は、全般的に深掘り感が少し足りないという印象を持ちました。

椎野——「日中青少年交流事業」は、調査、問題点の指摘、提案という、論文としての構成がしっかりしています。

池上——私は「ポストドク」を最も評価していて、日本の抱えるポストドク問題を真剣に考えてくれている姿勢に打たれました。次点で評価した「伝統産業」は、日本人では気づかない伝統文化、産業再生、継承策について、若者労働者やペイシエントキャピタルの活用という視点で提案している点が素晴らしいと思いました。「日中青少年交流事業」は、将来に向けて日中



が手を携えていくために、若い人達が手をつなぐことから始めようという政策の提案に大いに共感しました。

最相——「日中青少年交流事業」と「伝統産業」が良かったです。「日中青少年交流事業」は、日中関係の行く末を真剣に心配する筆者の切実さが伝わってきました。「伝統産業」は、取材に基づいて細部にわたって分析していて、日本人として教えられる点が多くありました。

山之内——私も「伝統産業」を評価します。留学生ならではの自国の文化を大切に思う気持ちから日本の伝統産業に着目していて、その視点を嬉しく思いました。筆者の強い危機感が感じられる「日中青少年交流事業」、「ポストドク」は甲乙つけがたいものがあります。

横山——評価が非常に難しかったのですが、「ポストドク」は、留学生として感じた違和感を提案へとつなげている視点が良かったです。「日中青少年交流事業」は、日中の関係改善策を既存事業の制度改革や既存の組織を活用することで進めるという、地に足の着いた提案をしている点を評価しました。

野呂——改めて日本人としてのアイデンティティに気づかせてくれる「伝統産業」を最も評価しました。日本にいと気づかない問題点を指摘し、具体的な解決策を示している「ポストドク」も良かったです。

中野——私が1位にしたのは「ポストドク」で、博士やポストドクの置かれた現状の課題をしっかり考察していて、解決策に納得感を生んでいると思います。次いで評価したのは「伝統産業」で、留学生が日本人以上の知識を持っていることに素直に感心しました。

淀川——「伝統産業」は、その再生に向けて現代的な手法を考案しているアイデアを評価しました。「ポストドク」は、博士人材の求人難と非国際化の問題を鋭く捉え、海外での活躍に打開策を見出している点が良いかったです。両作品とも、課題を

審査委員

横山 喜一郎

CSR推進室 室長

医療、教育、少子高齢化、国際関係などにテーマが集中して多様性が少なくなっている分、審査が難しかったです。独自の観点を提示している論文や、これまで気づけなかったことに気づかせてくれる論文には魅力を感じます。



審査委員

淀川 高喜

研究理事



全体的に、テーマ選定や問題意識の斬新さが弱いと思いました。そのため、視点のユニークさ、理解の深さ、実現可能性に着目しました。留学生の論文には、大学生の論文に比べても遜色ない、日本語の文章力が非常に優れたものが多かったです。

捉える視点が深く、それを自らの提言につなげています。

最相——「ポストドク」は1位、2位をつけている人が多いのですが、私はポストドクを外国に派遣するという提案は修業期間を延長してしまうことになり、根本的なポストドク問題の解決にならないのではないかと危惧するのですが…。

三浦——私は「ポストドクは意図的に日本の外へ出て行くべきだ」という意見には共感します。

評価の分かれるなか、優秀賞が決定

椎野——では候補の「伝統産業」、「ポストドク」、「日中青少年交流事業」の中で、まず大賞を議論したいと思います。

池上——大賞は、多くの審査委員が高く評価していて、点数的にも最も高い「伝統産業」がふさわしいのではないのでしょうか。

一同——賛成。

椎野——次に優秀賞ですが、点数的には「日中青少年交流事業」、「ポストドク」の2つとも高いですね。

三浦——「ポストドク」は評価が二極化していますね。

椎野——「日中青少年交流事業」は優秀賞で異論はないと思います。「ポストドク」についても、評価は分かれていますけど得点面で優秀賞にふさわしいと思うのですが、先ほど意見を述べた最相さん、いかがでしょうか。

最相——優秀賞が良いと思います。表彰式で直接本人と会って、ぜひディスカッションしたいと思います。

椎野——では留学生の部の入賞論文は、大賞は「伝統産業」、優秀賞は「日中青少年交流事業」と「ポストドク」に決定します。

ドキュメント最終審査会

—さまざまな「夢とこだわりの未来社会」を前に
3時間の熱い議論を展開

高校生の部	筆者の強い想いと視野の広がり
	<p>入賞候補論文 *文中での呼称</p> <ul style="list-style-type: none"> • さくらんぼネットワークの構築——世界を救い、日本を変える *「さくらんぼネットワーク」 • 「アグロフォレストリー」——日本と東南アジアの掛け橋 *「アグロフォレストリー」 • 子どもの笑顔が溢れる社会——ネットいじめ解決への提案 *「子どもの笑顔が溢れる社会」 • 世界中の子供たちがつながっていく *「世界中の子供たち」

※他に6つの論文が入賞候補に残りましたが、誌上では上位入賞の4論文について取り上げました。

大賞には審査委員の意見が一致

椎野——高校生の論文は、論文としての体裁や実現性より、筆者の想いの強さや提案の具体性を重視したいと考えています。

池上——私は「世界中の子供たち」を一番に推したいと思います。世界共通の「世界-world-」という授業の提案は「確かに」という思いを持ちました。「さくらんぼネットワーク」は、世界へ向けた日本の新しい貢献であると思います。ネーミングも素晴らしいですね。

三浦——「さくらんぼネットワーク」は、海外のさくらんぼ世代の子たちを集めて、多くの人を巻き込んで日本の社会をグローバル化するという提案で、内容も具体的に設計されています。実現すれば日本の社会が変わりそうで、期待が持てるなと感じました。

最相——一番評価したいのは「さくらんぼネットワーク」です。この筆者は、命を守ること、命の危機から救うことの大切さを主張していて、感銘を受けました。論文の体裁は「アグロフォ



レストリー」が優れていると思います。

淀川——「アグロフォレストリー」は、東南アジアの森林消失と日本の里山の荒廃を併せて解決するというアイデアが面白いと思いました。

椎野——「アグロフォレストリー」は、東南アジアの森林破壊の危機感から日本と東南アジアの状況を分析し、それぞれの問題を解決するために必要なことをしっかり提案しているところが良いと思いました。

野呂——「さくらんぼネットワーク」が群を抜いていると思います。新興国の子供を救いたいという筆者の問題認識や、子供たちを日本に迎えるという解決策は、日本のグローバル化の後れへの解決にもつながり、素晴らしいと思いました。


中野——「さくらんぼネットワーク」と「アグロフォレストリー」を高く評価しました。「さくらんぼネットワーク」には筆者の強い想いが感じられ、具体策の細やかな記述によって、実現イメージが浮かんできます。「アグロフォレストリー」は、論文としての完成度が一番高いと思います。東南アジアの森林と日本の里

審査委員

三浦 智康

執行役員
未来創発センター センター長

「創りたい未来社会」というテーマなので、「大きな課題に向かって、私はこれをやっていく」という目線の高さを重視しました。高校生の論文には、視野の広がりを感じられる作品が多かったです。



山を結びつける解決策にも「なるほど」と感心させられました。

山之内——「アグロフォレストリー」と「さくらんぼネットワーク」はどちらも視点が素晴らしく、甲乙つけがたかったです。

横山——「アグロフォレストリー」を最も高く評価しました。アジアの森林破壊と日本の里山作りをつなげている点がとても面白く、自らの夢を実現するために行動宣言しているところも良いと思います。「子供の笑顔が溢れる社会」は、対面コミュニケーションの大切さを訴えている点に共感しました。

椎野——全員の評価を合わせると、大賞は「さくらんぼネットワーク」で異論ないと思いますが、いかがでしょうか。

——同——賛成。

池上さん、最相さんの推す作品が特別審査委員賞に

椎野——次に、優秀賞と特別審査委員賞を議論したいと思います。候補は「子供の笑顔が溢れる社会」、「世界中の子供たちがつながっていく」、「アグロフォレストリー」です。この中で「アグロフォレストリー」は最も得点が高いので、優秀賞にふさわしいと思います。

最相——池上さんが1位、私が3位を付けている「世界中の子供たち」は、特別審査委員賞でいかがでしょうか。

池上——同感です。ぜひ特別審査委員賞をお願いします。

椎野——「アグロフォレストリー」のほかに、もう1点、「子供の笑顔が溢れる社会」に優秀賞を出すかどうかなのですが。

淀川——「子供の笑顔が溢れる社会」は「ネットいじめ」という大切な問題を取り上げていますが、「夢」というテーマから見て、どう評価するべきか迷いますね。

最相——いじめの問題は、足元の問題として非常に重要ですので外すことはできないと思います。子供たちは笑顔になることによって、未来を考えるスタートラインにも立てるという意味で、私は「子供の笑顔が溢れる社会」を評価したいと思います。

山之内——「子供の笑顔が溢れる社会」は全体的に高い順位が付いていて、優秀賞にふさわしいのではないのでしょうか。

椎野——そうですね。「子供の笑顔が溢れる社会」を優秀賞としたいと思います。高校生の部の入賞論文は、大賞は「さくらんぼネットワーク」、優秀賞は「アグロフォレストリー」と「子どもの笑顔が溢れる社会」、特別審査委員賞は「世界中の子供たち」、以上4作品に決定します。




審査委員

中野 ひなつ

証券ソリューション事業六部 部長 兼
証券ソリューション推進四部 部長

筆者の想いやこだわりが強く表れている論文を評価しました。問題意識や具体策の掘り下げが不足していたために、提案内容が良くても高評価できなかった作品が見受けられたのが残念でした。もう少しの努力で、更に素晴らしい論文になるものが沢山あるという印象です。



審査委員

野呂 直子

コーポレートコミュニケーション部 部長

提案に新たな気づきや発見があるか、新鮮さを感じられるかをポイントに評価しました。高校生・留学生の論文には、訴えたい想いが強く伝わってくる作品が多かったです。



論文発表会

NRI社員らを前に 入賞者が未来社会への “夢とこだわり”をプレゼン

2014年12月19日、東京・丸の内でのNRI本社において「NRI学生小論文コンテスト2014」の論文発表会が行われました。NRI代表取締役副社長の室井雅博をはじめ、審査に関わったNRIグループ社員を前に、10名の入賞者全員が論文につづった提案内容を発表しました。



NRI代表取締役副社長の室井雅博(右下)と入賞者たち

論文発表会は、NRI代表取締役副社長の室井雅博の挨拶からスタート。「受賞者の皆さんが一生懸命考えてくれた、日本や世界の未来のための提案を大変楽しみにしている。ここに集まってきている社員も同じだと思う。皆さんの想いや発想とNRI社員の英知を合わせて、日本や世界の明るい未来に貢献していけたら嬉しい」と受賞者たちの未来へエールを送りました。

その後、大学生3名、留学生3名、高校生4名の入賞者が、緊張しながらもしっかりとした語り口で、プレゼンテーションを行いました。会場に集まったNRI社員らは熱心に発表に聞き入り、入賞者1人ずつに渡されるメッセージカードに感想を書き入っていました。



発表会の後は、社員や応援に駆け付けたコンテスト入賞のOB・OGを交えて、グループディスカッションが行われました。そこで出た意見や感想の一部をご紹介します。

プレゼンについて

NRI社員「初めて参加しました。皆さんの発表を聞いて、その想いの強さに感動しました」

NRI社員「経験をばねに頑張っている姿に心打たれました。たくさんの気づきとエネルギーをもらいました」

入賞者(大学生)「多くの方に自分の意見をお伝えできたことが、嬉しいです」

入賞者(留学生)「プレゼンは苦手で、悪戦苦闘しました」

入賞者(留学生)「皆さん独自の視点から問題を捉えています、その根底には“日本の社会を良くして行こう”という共通した想いがあると感じました」

入賞者(大学生)「それぞれの提案には、自らの体験に基づいて問題点を解決の方向に転換させる、柔軟な考えがありました」

入賞者(高校生)「自分の論文にはまだまだ問題点や課題が多



いのですが、皆さんの提案には問題点を解決するための自分なりの考えがしっかりあって、勉強になりました」

入賞者(高校生)「高校生に意見を発表する機会を与えて下さる会社は、多くないと思います。ありがとうございました」

NRI社員「失敗してもいいから、ぜひ今後、提案内容を実践して欲しいです。何事もトライアル&エラーです」

NRI社員「皆さんが提案されたようなことが、これからの世の中を切り開いていくのではないかと感じました」

審査にあたって

NRI社員「毎年いろいろな論文が出てきて、若い人達が評論家的ではなく“自分はこういうことをやるんだ”と発信していて、非常に楽しく審査しています」

NRI社員「ここ5年ほど1次審査を担当しています。私たち大人がつい“無理だな”と思って考えを閉ざしてしまうことを、皆さんは発想の豊かさで乗り越えていき、教えられることがたくさんあります」



NRI社員「1次審査を担当して6年目です。入賞者の方と会えるこのイベントは、毎年私にとって楽しみです」

NRI社員「特別審査委員の池上さんと最相さんは、大変お忙しい中、毎年しっかりと応募論文を読んで審査にあたって下さっています。お二方に審査委員になっていただいていることは、このコンテストの財産だと思います」

入賞者(大学生)「講評をうかがうのが、とても楽しみです」

OB・OGとのつながり

NRI社員「何年も続けて過去の受賞者とのつながりを持っているコンテストは他にあまりないと思います。ここで生まれたつながりを、これからも活かしていっていただけたら嬉しいです」

OB「第1回コンテストで入賞し、今は起業してWeb系の事業をしています。このコンテストに応募する人はエネルギーや行動力があって、実際にリサーチした上で提案していて、素晴らしいと思います」

OG「毎年参加しています。自分にはない発想を知ることができて、いつも新しい発見があります。今年もとても面白かったです」

OB「招待していただいて嬉しいです。プレゼンを聞いて、とても刺激になりました。自分自身も何か社会に貢献できたらと思いました」

OG「これからもOB・OGでつながっていけたらいいなと思います。このコンテストがきっかけでCSR(企業の社会的責任)に興味を持ち、イギリスの大学に留学することにしました」

OB「皆さんのプレゼンを聞いて、自分の調べたデータや取材した結果を元に自分の主張を述べることの大切さを再認識しました」

入賞者(高校生)「自分はこういう場を経験するのは初めてなので、他の入賞者や審査委員の皆さん、OB・OGの方々と話できて、とても勉強になりました」



受賞、おめでとうございます！

NRI学生小論文コンテスト2014 授与式



2014年12月20日、入賞者とその家族、学校関係者を招き、東京ステーションホテルにおいて表彰式と祝賀会が開催されました。

表彰式は、NRI代表取締役社長の嶋本正の祝辞からスタート。嶋本は「これからの社会を担っていく皆さんには、将来、自分になりたい姿、果たしたい役割を思い描く“Vision”、相手の立場に立ち、広い視野、より高い視点を持つ“View”、自分の価値、強み、誇れるものを磨く“Value”—この3つのVをぜひ大切にしていってほしい」と祝いの言葉を述べ、入賞者一人ひとりに表彰状と副賞を手渡しました。

続いて、審査委員長であるNRI理事長の谷川史郎、特別審査委員を務めたジャーナリスト・東京工業大学教授の池上彰さん、ノンフィクションライターの最相葉月さんが、お祝いの言葉とともに、入賞論文一つひとつに講評を述べました。



表彰式に続いて行われた祝賀会で、[大学生の部] [留学生の部] [高校生の部]、それぞれの部門で大賞を受賞した3名が、喜びの言葉を述べました。



[大学生の部] 大賞 城内香葉さん 慶應義塾大学 総合政策学部2年

今回、私の論文を評価していただいたことを、大変光栄に思っています。私が小学生の頃から抱いてきた想いやこれまでの行動を振り返ると、この論文は本当に長い時間をかけて、私のすべての想いを込めて書いたものなのだなと感じています。インクルーシブ教育を実現させることは簡単なことではありませんが、これからも自ら発信し続けていきたいと考えています。また、今回出会った方たちとのつながりを、今後も大切にしていきたいと思います。



[留学生の部] 大賞 陳慕薇さん 京都大学大学院 経済学研究科 修士課程2年

私は以前から日本の伝統産業に関心を持っていましたが、修士論文では経済学の面から伝統産業を研究することが難しく、他の分野を扱いました。でも、伝統産業に対する関心や情熱はまったく衰えておらず、むしろ増えています。今回受賞できたことや、NRIの皆さんや池上さん、最相さんに伝統産業の研究を続けるようにと励ましをいただいたことで、今後も研究を続けていこうという想いを強くしました。ありがとうございました。



[高校生の部] 大賞 韓大鏞さん 神戸朝鮮高級学校2年

私がこのコンテストに応募した理由はただ一つ、在日朝鮮人という存在を多くの人に知ってもらいたいという想いがあったからです。日本に住んでいる朝鮮人だからこそ、見ることができるもの、考えることができることがあることを、皆さんにお伝えしたいと思いました。また、私の通う神戸朝鮮高級学校は、このコンテストの受賞者を過去何人も出している、優れた学校であることもお伝えしたいと思います。このたびはこのような場に参加する機会をいただき、本当にありがとうございました。

祝賀会では、入賞者と池上さんや最相さん、NRI社員、学校関係者や家族が、和やかな雰囲気の中で、交流を深めました。池上さんや最相さんの著作を持参してサインをお願いしたり、論文の内容について語り合ったり、記念撮影をしたりと、終始リラックスした入賞者の姿が見られました。



「創りたい未来社会～あなたの夢とこだわり～」 というテーマにひかれた

大学生

テーマに興味

- 「創りたい未来社会」という言葉に心ひかれたから
- ゼミの先生からコンテストを紹介され、興味を持った。「私の夢とこだわり」について一度じっくり考える機会になると思い、応募した
- テーマにすごく興味を持って、チャレンジしようと思った

自分の考えを発信し、他の人と共有したい

- 自分の考えを形にしたい、また、より多くの人と共有したいと考えたため
- 情報を受け取るだけでなく、アウトプットする経験を積みたかったから。また他者と共有したいという思いがあったから
- 私は未来の夢を持っているが、その夢を伝えるチャンスが今までなかった。このコンテストは私の考えを伝える場所だと思った
- 留学を通じて感じたことを文章で表現したいと思った

研究の集大成

- 学生時代の集大成として、学生にしかできない形で論文発表してみたかった
- 大学の研究室で学んでいる内容と関連付けて、未来社会への提案ができるのではないかと考えたから
- 大学で行っている研究とコンテストのテーマがマッチしていると感じたから

留学生

自分を見つめ直す・自分への挑戦

- 20歳になった記念に、文字にすることで今の自分の思考を明確化したいと思った
- 将来の夢に向けて、今の自分自身を見つめ直す機会にしたかった
- 他大学の学生と競争することで、自分の力を試してみたいと思ったから
- 留學生活の最後に新しいことに挑戦したいと思い、応募した
- 自分の考えを磨き、他の応募者と切磋琢磨できると考えたから

世界を良くしたい

- 世界各地ではまだ紛争が絶えない。何の罪のない人たちが傷つき、犠牲となっている。この不条理な状況を何とかしたい。平和で豊かな未来社会を創造する糸口を見い出そうと思った
- 今の日中関係は微妙な関係になってしまった。その関係を自分の小さい力で少しでも良い方向に変えたいと思ったから

論文を書く力や日本語力を高めたい

- 卒業論文を書く練習として応募した
- 論文を書くことが大学生活において一番の力になると思い、挑戦しようと思いました
- 留学のために来日して4年が経ち、4年間の勉強で得た日本語能力と知識を試すために応募した

高校生

テーマにひかれた

- 「創りたい未来社会」というテーマにひかれて、自分でも書いてみたいと思ったから
- 募集テーマを見て、「これなら書いてみたい!」と思ったから
- いろいろな論文の募集があった中で、自分の考えを一番伝えられるテーマだったから
- 書きやすいテーマで、言葉にすることで自分の夢を具体的にしたいと応募しました
- テーマの自由度が高くて、魅力的だったから
- テーマが今の自分にぴったりだと思いました
- 自分のことで精一杯だった私にとって、「創りたい未来社会」というテーマは社会について考える良い機会だと思ったから

未来社会を考えたい

- 自分がこれから生きていく社会をどんなふうにしていきたいか、考えてみようと思ったから
- 次世代を担う私たち高校生が、未来のビジョンを明確に意識することは重要なことだと思ったから
- 高校生活最後の夏休みに、未来について考えたいと思ったため
- 高校生として自由な意見を発表することによって、社会に何らかの貢献ができればと思ったため
- 今までしっかりと考えたことがあるのは、自分の身の回りの未来だけだったが、地球規模の広い世界の未来について考えてみたいと思ったから

自分の意見の発信

- 私たちのような世代の子供がこんなことを考えているのだということを知ってほしかったから
- 自分にどれだけできるか挑戦のつもりで応募した
- 自分の夢について語れる良い機会です、楽しそうだったから
- 高校生が自分の意見を広く発表できる機会は多くないので、それを社会に出せるということで応募した

勉強のため

- 授業で小論文を書き、自分の意見・考えを文章にまとめ、相手に伝えることに興味を持ったから
- 論文を書くことで、自分の書く能力を向上させたいと思ったから
- 大学入試の小論文対策
- 夏休みの課題
- 小論文の授業の課題

社内審査委員をつとめた社員が感じたこと

大学生

強い思い、問題意識

- 学生の熱い思いがたくさん伝わってきた
- 「世の中を変えたい、良くしたい」という強い思いが感じられた
- 自分の体験・経験をきっかけにした社会的な課題に対して、自分なりのアイデアをもって解決しようとしているところに、前向きさと力強さを感じた
- 学生が社会に対して問題を感じていること、その問題に対して実際に行動を起こしていることが分かった
- 社会の問題を純粹に受け止め、創造的な解決策を構想することができるという、若者の力を改めて感じる事ができた

面白かった、刺激になった

- テーマの選び方、解決へのアプローチ共に興味深いものが多くあった
- 予想に反して面白く、刺激になった
- テーマが分かりやすいこともあるのか、以前大学生の部を担当したときより具体性があり、ユニークなものが増えたと思う

具体性に欠ける

- 実現案の具体性に乏しく、問題提起や表面的な案にとどまっている内容が多かった
- 夢として社会がどうあってほしいかは書かれているが、その状態をどのように実現するかについては、具体性に乏しいものが多かった

「世の中を変えたい」という強い問題意識

もっと独自性・斬新さを

- 全体的に夢が感じられない。独自性や斬新さ、自分のこだわり・意見に乏しい
- 「創りたい未来社会～あなたの夢とこだわり～」というテーマに対して、現在の課題についての現実的な解を述べたものが多いのに驚いた
- 夢やこだわりを感じさせる論文がないことを残念に思った。論理破綻があるが、自分の奥底からわき出る夢を熱く語ってほしかったのだが、大学生ともなると難しいのだろうか？
- NHKをはじめとする社会問題を取り上げている番組そのままの内容ではないかと思われるものも混在しており、筆者のオリジナリティをどのように見極めるのか難しく感じた

視野が狭い

- 自分の経験や見聞きしたこと、あるいは書籍やメディアからの情報に影響を受けすぎて、視野が狭くなっているのではないかと感じた
- ほぼ全ての論文が「日本」に対する提案だったので、「世界」を意識し、より広い視野で解決策を考えることもしてほしい
- 「世界に向けて未来を提案している？」と思ってしまうような内容が多かった。熱意はあるが、日本の未来社会を主体にしている世界の狭さを感じた

留学生

グローバルな視点

- 留学生の立場として、自国と日本、両国の状況をしっかり捉えている印象を覚えた。他国の現状まで踏み込んだグローバルな視点で、社会課題として自分たちがどうしていかなければならないかを考察していることに、深く感心した
- 生まれ育った国や文化的な背景は異なれど、争いを好む人はおらず、自分の問題として捉えて解決策を模索していることが分かった
- 自国の状況を透過的に比較できる視点は、やはり留学生ならではの視点だと思った

日本語力の高さ

- どの論文も、留学生が書いたとは思えないほどの文章力だった
- 留学生の日本語運用能力の高さに脱帽した

読み応えがある

- いずれの論文も非常に読み応えのある内容だった。同じテーマでも全く異なる観点で書かれており、内容も多様なため、楽しんで読むことができた
- 引用する事例の多様さが印象的だった。それぞれが多様な情報源を持っており、視野を広げてくれた

世界の現状を見つめる目

もっと主張を

- 留学生の部ということで荒々しさや新規性に期待したが、少しまとまり過ぎていたように思う。「留学生らしさ」を出して、日本社会に対して痛烈なメッセージを突き付けてくれるような作品が多く出ることを願っている
- 筆者のこだわりについて強く記述されているものは必ずしも多くなく、淡々とロジカルに整理して論証されているものが多い印象を持った

高校生 — 率直なまなざし

元気

- 高校生の若くて元気な気持ちが伝わってくる論文が多かった
- 高校生の率直な意見がとても魅力的
- どの論文もしっかりと自分の意見や主張を書いていて、面白く読ませてもらった

刺激を受けた

- 高校生の志に触れ、私自身も刺激と気づきを得られた
- 情熱的な文章や画期的な提案も多く、読んでいて初心を思い出させてくれる

もっと提案力を

- 世の中によくある論調に影響を受けがちなのはしょうがないとしても、独自の視点を示してほしい。こざいれにまとめるものが多いと感じた
- 提案に無難なものが多いように思う。丁寧な分析と確実な提案の上に、少しスパイスとして独自の強い提案が混じるくらいのもがあると嬉しかった

もっと夢を

- 「夢とこだわり」というテーマにも関わらず、あまり思いが感じられない評論的な論文が多かった
- もっと高校生らしい明るい夢を期待したい
- 想像力を発揮して「誰も考えたことのない、現在そんなものはない」といった解決方法を考えてほしい
- もう少し夢を持った話題や、その実現を大言壮語する論文が読みたかった

NRIグループ社員によるコンテスト告知活動

全国の高校や大学に赴いて応募を呼びかけ

NRI学生小論文コンテストの告知活動の柱のひとつは、有志のNRIグループ社員による「社内応援団」が担っています。ポスターやチラシを持って、母校や全国各地の学校を訪問し、生徒たちや先生たちにコンテストへの応募を呼びかけました。

会津大学

大学でのOB講演

崔 裕仁 (流通システム一部)

母校からの依頼で度々、コンピュータ理工学部の学生250名を対象に特別講義を行っています。将来設計に役立つ考え方や経験談をはじめ、「自分で課題を見つけ、考えと理解を深め、他人に説明をする力を伸ばす」ことの重要性を訴え、その訓練として本コンテストを積極的に活用するよう紹介しています。



国立有明工業高等専門学校

後輩に夢を描いてほしい

野田 裕太 (WMソリューション事業部)

母校を訪問し、生徒たちにNRIや本コンテストについて説明。「技術者の卵ならではの観点から“こういう社会ができれば”“こんなことが可能になったら”と夢を描き、それを実現するための強い“こだわり”を持ち続けてほしい」と伝えました。



島根県立松江北高等学校

私にできる母校への貢献

武田 宏美 (NRIシステムテクノ株式会社)

本コンテストには島根県からの応募が少ないことを知り、島根出身の私から母校に声をかけようと思いました。後輩の皆さんに「皆さんの未来は社会の未来です。NRIと一緒に未来を考え、未来を輝けるものにしましょう」とレターで応募を呼びかけました。



佐賀県立佐賀西高校・佐賀県立武雄高校

訪問校から入賞者が出て、嬉しさもひとしお

藤野 直明 (サービス・産業ソリューション第一事業本部付)

教育へのICT活用で有名で、自らの出身県でもある佐賀県の武雄高校から講演依頼があり、母校も含め2校で「NRI学生小論文コンテスト2014」を紹介しました。その武雄高校から今年の入賞者(特別審査委員賞)が出たことを、とても嬉しく思っています。今回、両校の校長先生から「受験勉強だけでなく、本校生徒には未来を洞察し大きなことを考える機会を与えたかった。NRIさんには大変感謝しています」という話をお聞きして、大変共感しました。受賞論文は、ドイツ留学から帰国したばかりの野田かれんさんが自らの体験から考えた思い切った提案で、内容についても唸られるものであり、大変感心しました。本コンテストを、ぜひ生徒の皆さんの『ありがたい未来社会』を考える契機にさせていただけたらと思います。



先生から見た「NRI学生小論文コンテスト」

群馬県立女子大学 国際コミュニケーション学部
(大学生の部 特別審査委員賞受賞者の在籍校)

安斎 徹 准教授

私のゼミは『社会デザイン』という名称で、社会を変える人を作るという目標を持っています。その目標と本コンテストのコンセプトが合致しているため、ゼミとして取り組み、3年生全員で応募しました。本コンテストは、論文を5千字にまとめる力や論理性が求められ、教育の題材としても取り組みやすいと思います。初めて応募した2年前に続き、2回目の応募である今回も入賞者を出ことができ、大変嬉しく思います。地方の大学の学生が東京の学生と同じ土俵に立てる貴重な機会なので、今後も挑戦したいと思っています。



神戸朝鮮高級学校

(高校生の部 大賞受賞者の在籍校)

李 英三 教諭

当校では過去に本コンテストの入賞者を出しており、毎年生徒に応募を呼びかけています。今年希望してきた生徒はたまたま1人でしたが、練習がハードなバスケット部に所属しているため、夏休み中の練習の前後の時間を使って指導しました。自宅課題を出してもしっかり取り組んできて、その本気度合いに指導にも熱が入りました。部活と両立しながら書き上げた論文が高校生の部の大賞を受賞したことを、大変誇りに思います。今後も応募を希望する生徒を学校として応援していきたいと考えています。



宮城県宮城野高等学校

(高校生の部 優秀賞受賞者の在籍校)

伊勢 将聡 教諭

当校の総合学科では、3年生になると自分で選んだテーマを追究して発表する『課題研究』という授業があります。2013年からの取り組みとして、1年生のときから課題意識を持ってもらうために、当コンテストへの応募を呼びかけています。昨年に引き続き2年連続で応募した生徒が入賞したことを、大変嬉しく思います。2015年は3年生となり、集大成の課題研究と受験勉強で大変だと思いますが、手を挙げた生徒には課題研究の成果を生かす方向で指導し、挑戦させたいと考えています。



大阪府立佐野高等学校
(高校生の部 優秀賞受賞者の在籍校)

黒松 成輝 教諭

今回は、私が顧問をしている女子ソフトテニス部に所属している生徒が推薦入試で大学が早く決まったため、「文章を書く力を鍛えるためにチャレンジしてはどうか」と顧問として個人的に応募を勧めました。力試しのつもりが入賞し、皆さんの前でプレゼンを行ったり、多くの方と交流でき、高校生としては大変貴重な経験になったと思います。このような経験は推薦・AO入試にも大いに生きてくるので、次年度以降に担任を持った際には、1・2年生の段階から意欲のある生徒に取り組みせたいと思います。



佐賀県立武雄高等学校
(高校生の部 特別審査委員賞受賞者の在籍校)

土井 孝一 教諭

当校には、生徒が世界に視野を広げたり、さまざまな校外学習活動に参加することを積極的に応援する雰囲気があります。コンテストへの応募もその一つです。今回、「NRI学生小論文コンテスト」に当校の生徒が初めて入賞したことは、本人の大きな糧になったことはもちろんのこと、後輩にも先輩のチャレンジする姿を見せることになり、尻込みしがちな校外学習活動への参加を後押しする意味も大きいと思っています。



おわりに

NRI学生小論文コンテストでは、毎年、表彰式の前日に上位入賞者に集まってもらい、論文発表会を行っています。発表会には多数のNRIグループ社員をはじめ、本コンテストでの受賞経験をもつ皆さん(OB・OG)も駆けつけてくれます。発表会の楽しみの一つは、受賞者の発表を聞き、質問をしたり対話ができることです。

社員にとってもう一つの楽しみは、OB・OGとの再会であり、受賞後の進路や今何をしているかなどについて話が聞けることです。

この場では、「受賞がきっかけでイギリスへの大学留学を決めた」、「受賞について地元新聞社から取材を受けたことから、新聞記者に興味をもち、その新聞記者になった」など、受賞がきっかけとなって、それぞれの道をアクティブに進んでいる様子うかがえて、頼もしく思います。今回、本冊子の取材を受けていただいた、木下翔太郎さん、張辰飛さん、舛田桃香さんも、そうしたOB・OGです。

こうしてみると、本コンテストは受賞者の皆さんにとって、さまざまな「気づき」の場になっていることが分かります。なかでも意義深いこととして、それまで自分でも知らなかった自身の可能性への気づきがあり、その道を自ら切り開いていることが挙げられるのではないかと思います。

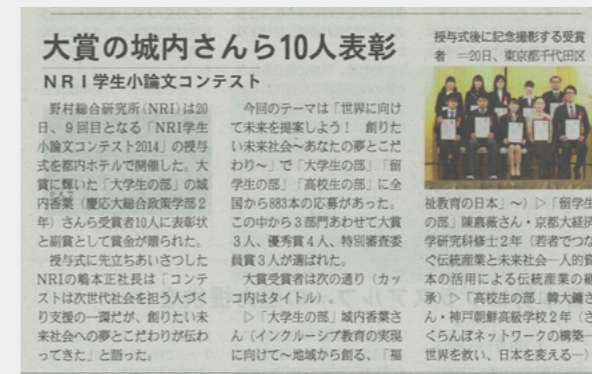
2015年度のコンテストは、開始以来10年目という節目を迎えますが、事務局ではその準備を始めています。今年も多く皆さんにお会いできること、そこから多くの「気づき」が生まれることを、とても楽しみにしています。

2015年3月

「NRI学生小論文コンテスト2014」事務局

メディアでの掲載

NRI学生小論文コンテストは、毎年さまざまなメディアに取り上げられています。その一部をご紹介します。



「フジサンケイビジネスアイ」 2014年12月22日付 日刊20788号



「朝鮮新報」 2015年1月14日付



「佐賀新聞」 2015年1月23日付朝刊



「上毛新聞」 2015年1月19日付朝刊



「高校生新聞」 2015年3月1日発行 第224号



「中日新聞」 2014年12月5日付朝刊 県内版



NRI 学生小論文コンテスト2014

世界に向けて未来を提案しよう！
創りたい未来社会 ~あなたの夢とこだわり~

野村総合研究所 コーポレートコミュニケーション部 CSR推進室

発行：2015年3月

Copyright© 2015 Nomura Research Institute, Ltd. All Rights Reserved.



株式会社 野村総合研究所

〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-6-5 丸の内北口ビル
Tel.03-5533-2111

<http://www.nri.com/jp>